

中勘助インド三部作研究
—印度学・仏教学の受容を中心に—

木内英実

目次
序章

第一部 インド三部作の時代的背景

第一章 森鷗外の「阿育王事蹟」の位置づけ

第二章 中勘助と同年代の文学者による仏教学並びに印度哲学受容

一 石川啄木

二 秋田雨雀

三 久末淳

第二部 インド三部作論

第一章 「提婆達多」

一 「提婆達多」における仏伝

二 「銀の匙」から「提婆達多」に至る救済の思想

4

9

10

18

20

27

34

43

44

44

60

第二章 「犬」

一 「犬」の成立をめぐる

88

二 「犬」における人物造型(一)

102

三 「犬」における人物造型(二)

117

第三章 「菩提樹の蔭」

一 インド歌劇「シャクンタラー姫」の影響

128

二 「菩提樹の蔭」の成立をめぐる

142

終章

160

巻末資料

一 主要参考文献一覧

165

二 初出一覧

170

補足論文

172

「中勘助と仏教童話」『印度學佛教學研究』五六卷二号(平成二〇年三月)掲載

「中勘助の『犬』における『マハーヴァンサ』の影響」『印度學佛教學研究』五九卷二号(平成二三年三月)掲載

凡例

- 一、本文の引用は、岩波書店版『中勘助全集』一～一七卷（平成元年～三年）より行い、適宜、角川書店版『中勘助全集』一～一三卷（昭和三五年～四〇年）を参照した。引用に際し、旧字体を新字体に改めるとともに、ルビ等は省略した。ただし、中勘助手沢本及び原稿類については、可能な限りオリジナルにあたり、字体、仮名遣、漢字の用法ともに原文のままとした。誤記に関しても原文を尊重し、必要に応じてその旨注記した。
- 二、作品の典拠本からの引用に際しては、可能な限り中勘助の蔵書（静岡市所蔵中勘助関係資料）を参照した。
- 三、年号の表記は和暦で行い、必要に応じて西暦を併記した。
- 四、引用文中の傍線は、特に断りのない限り、論者による。

序章

一 本論の目的

中勘助の小説群の中でも、インド三部作^{註1}と呼ばれる作品群がある。

これら作品名と初出は大正一〇年五月『提婆達多』（新潮社）、大正一一年四月「犬」（『思想』岩波書店）、昭和四年一〇月「菩提樹の蔭」（『思想』岩波書店）であり、八年間に創作された。

中勘助の当時の書簡から「提婆達多」発表前後より、大正一五年まで「阿育王」についての執筆構想があったことが分かる。また、昭和六年頃から構想され昭和三八年まで発表され続けた連作「鳥の物語」にも「阿育王」についての「孔雀の話」が予定されていたことが稲森道三郎氏の追懐からも明らかである。

中勘助の代表作「銀の匙」（『東京朝日新聞』前篇連載大正二年四月〜六月、後篇連載大正四年四月〜六月）が第一高等学校、東京帝国大学英文科時代の恩師、夏目漱石の絶賛により『東京朝日新聞』へ連載されたこと、インド三部作一作目の「提婆達多」が漱石の一番弟子ともいえる森田草平を介しての新潮社からの書下ろし原稿の単行本出版であったこと、木曜会に出入りしていた漱石の側近、岩波茂雄が起した岩波書店の雑誌『思想』がインド三部作第二作目「犬」及び第三作目「菩提樹の蔭」初出發表雑誌であったこと、インド三部作構想及び一筆時期、安倍能成、小宮豊隆、和辻哲郎ら漱石の影響を強く受けた友人と交流したこと、以上から、インド三部作執筆時代は漱石山脈の一角を担う作家としての中勘助の社会的評価が定まった時期と言えよう。

「漱石先生と私」（『三田文学』大正六年一月）には、創作上の趣味の面から漱石作品を高く評価しなかったものの、人間漱石への深い関心と愛情を抱いていた中勘助の姿が窺い知れる。第二部第二章の通り、漱石の代表作「吾輩は猫である」を意識した作品設定の「犬」もあるが、果たして中勘助を夏目漱石の思想的影響を強く受けた作家と評価することは可能であるか、再考を試みたい。

また、インド三部作は新潮社版「提婆達多」巻末に参考文献^{註2}一覧^{註2}が付されたように、中勘助による印度学・仏教学資料の受容の結果である。インド三部作構想・執筆に当たり中勘助が具体的に如何なる印度学・仏教学資料のどの箇所を参考としたのか、確認する必要がある。その確認を踏まえ、インド三部作を社会的及び歴史的文脈の中に位置づけ、その意味を考察することを本論の目的と

する。

二 静岡市所蔵中勘助関係資料を用いての確認

中勘助が昭和一八年一〇月から昭和二三年四月まで妻和の縁戚を頼り、転地静養及び疎開のため現静岡市葵区新聞並びに羽鳥に滞在したことを契機に、静岡市は平成六年より三期に分けて、中勘助の養女である中秀氏より中勘助の遺品の寄贈を受けた。その中には、中勘助の手沢本を含む蔵書や角川書店版全集編集時の校正紙、書簡、写真など約四千五百点が含まれる。それら中勘助の遺品と静岡市が購入した資料その他市民より寄贈を受けた資料をまとめて本論では、静岡市所蔵中勘助関係資料と呼称する。中勘助の遺品と全点に関し現在、資料番号が付されている。

これらリストが静岡市によって一部の中勘助文学研究者へ公開され始めた平成二一年以降、論者は中勘助の作品における印度学・仏教学資料の受容研究を行ってきた。平成二四年四月より、静岡市の委託により論者が資料調査を実施する経過^{註3}において、校正紙及び手沢本の閲覧が可能となった。その結果をもとに、インド三部作構想・執筆に当たり中勘助が具体的に如何なる印度学・仏教学資料のどの箇所を参考としたのか、確認していく。

三 印度学・仏教学資料とは

印度学とは、サンسكريットやパーリなど古典インド語で書かれた文献を用いてインドの思想・宗教・言語・文学・歴史等の解明を目的とした学問である。仏教学とは、サンسكريットやパーリなど古典インド語で書かれた文献を用いて仏陀を中心とした原始仏教の思想・仏教文化・仏教伝播の歴史等の解明を目的とした学問である。

東インド会社設立とインド植民地化において英国の初代インド総督ヘイスティングスは統治の一環としてインド学を奨励し、天明四年（一七八四年）に設立されたベンガル・アジア協会の会長ウィリアム・ジョーンズとともに「オリエンタル・ルネッサンス」とも呼ばれる一八世紀のインド・東洋学を英国をはじめヨーロッパに広めていった。この時代数多く紹介されたインドの神話、中世文学は、ヨーロッパの文学者たちに東洋への憧憬をかきたて、ロマン主義文学を形作った要素の一つとなった。特にゲーテ、ヘルダ

ー、ノヴァリスなどドイツ・ロマン派の文学にその影響は顕著に認められる。

日本においても明治三七年（一九〇四年）、東京帝国大学「哲学科」の中に専修学科「印度哲学」が設立され、大正五年（一九一六年）に「印度哲学講座」が開設された。ここではインド思想・宗教・哲学・文学・生活様式・インドにて発生・展開した仏教思想・仏教哲学の研究がなされている。

印度学・仏教学資料とは元来、古典インド語で書かれた資料やヨーロッパ語に翻訳された印度学・仏教学資料を示したが、重訳された資料（ヨーロッパ言語に翻訳された文献を更に日本語に翻訳したもの）も含むようになった。近世期までの仏教文学が漢訳経典や多くは僧侶による仏教思想の解説書の読解を通して創作されてきたのに対し、明治期以降は主にインドや欧米で出版された資料の受容を通して創作されるようになった。

四 本論の構成

本論は、第一部において中勘助が文学活動を軌道に乗せた明治末期から大正期を中心に、印度哲学・仏教学を当時の文学者がどのような作品へ取り込んだのか、社会現象としての印度哲学・仏教学資料を典拠とする作品論を示した。

第一章では、中勘助の蔵書にもその図書の存在が認められ「阿育王」構想の原点となったと推測される森鷗外・大村西崖共著、高楠順次郎校閲の「阿育王事蹟」について取り上げる。中勘助が印度学・仏教学及びそれらの資料に関する知識を和辻哲郎と宇井伯寿から得ていたことは、後掲第二部の書簡からも明らかであるが、文学者が哲学者等と協働して印度に実在した古代の聖王に関するドイツ語資料をもとに翻訳、考証した作品である。共著者である大村西崖（明治元年～昭和二年）は美術史家であり美術評論家。高楠順次郎（慶応二年～昭和二〇年）は英国オックスフォード大学で印度学を学び東京帝国大学でサンスクリット語を講じた当代きつての印度学者であった。

中勘助も哲学者・和辻哲郎、高楠の弟子であった印度学者・宇井伯寿との交流の中でインド三部作を創作したことから、鷗外が先駆的な立場にあったことは明らかである。なぜ鷗外が「阿育王事蹟」を執筆したのか、明治末期の戦時下の社会との関連から明らかにする。

第二章では、中勘助と同年代の文学者の内、寺族出身であり社会主義に深い関心を寄せていた石川啄木は明治末期に印度学者姉崎

嘲風の影響下で印度学・仏教学用語を作品に取り込んでいった。社会主義者であった秋田雨雀の場合、政治的信条とは離れ魂の救済を求める私的事情から印度学・仏教学的作品を執筆した。政治思想と離れ、個人的思想として印度学や仏教学への関心が高まるような明治末期のインド思想を一般人も受容した社会状況について明らかにしたい。

啄木同様、寺族出身であり印度学・仏教学に関心を抱き北原白秋門下として作品を執筆した久末淳（明治二五年〜昭和二七年）について、その周辺環境や受容した印度学・仏教学資料から、大正期の文壇が仏教学・印度学的作品を歓迎していた状況を示す。

第二部は中勘助のインド三部作について、依拠した印度学・仏教学資料との比較を行った結果である。

終章において、第二部を踏まえインド三部作において中勘助が表現したことを整理し、第一部で確認した社会的及び歴史的文脈の中に、中勘助の思想を位置づける。その中で既成概念としての仏教文学と中勘助のインド三部作との相違は何かを示す。

注

1. 関口宗念『提婆達多』における悪』『中勘助研究』（初出『聖和』三号、昭和三六年一月）に「インド三部作」の言葉が初出し、奥山和子『中勘助の思想』（私家版 昭和四二年頃）内にも「インド三部作」という言葉が登場する。この呼称は中勘助文学研究において一般化した。

2. 参考資料が左記の順番で記されている

異出菩薩本起経 過去現在因果経 高僧法顕伝 根本説一切有部毘奈耶雜事 根本説一切有部毘奈耶破僧事 根本説一切有部毘奈耶藥事 根本説一切有部毘奈耶出家事 雜宝藏経 雜阿含経 釈迦氏譜 釈迦譜 修行本起経 十二遊経 十誦律 四部律 増一阿含経 大般涅槃経南本 大善権経 太子瑞応本起経
長阿含経 中阿含経 中本起経 方广大莊嚴経 普曜経 仏本行経 仏説未生冤経 仏説觀無量寿経 仏説衆許摩訶帝経 仏所行讚
仏本行集経 彌沙塞部和醯五分律 印度哲学宗教史（高楠順次郎氏 木村泰賢氏共著） 解説西域記（堀謙徳氏著） 根本仏教（姉崎正治氏著） 釈迦牟尼伝（井上哲次郎氏 堀謙徳氏合著） 仏弟子伝（山辺習学氏著） 美術上の釈迦（堀謙徳氏著） オルデンベルグ氏仏陀（三並良氏訳） ケルン氏仏教大綱（立花俊道氏訳補） 美顔デー氏緬甸仏伝（赤沼智善氏訳） リスデキズ氏釈尊之生涯及其教理（赤沼智善氏訳） *Buddhist India. Rhys Davids.*

Early History of India. Smith. The Hymns of the Rig Veda. Griffith. The Light of Asia. Arnold.

3. 静岡市所蔵中勘助関係資料は平成六年に中勘助遺族により寄贈された原稿、蔵書、メモ、書簡を中心とした中勘助遺品約四五〇〇点（第一期・第二期の寄贈点数）を示す。平成二四年度より論者は資料調査に関わる中で、インド史資料の調査の過程において、本論登場の書籍を含むインド地方史及びインド地方研究図書合計九冊の内容を調査した。また現在調査は自筆原稿及び校正原稿、小説執筆のための参考図書を中心に行われ、平成二七年三月末日までに約八十点の資料のデジタル化が終了した。

第一部 インド三部作の時代的背景

第一章 森鷗外の「阿育王事蹟」の位置づけ

はじめに

森鷗外が本名森林太郎名で高楠順次郎校閲下において、大村西崖と共に明治四十二年一月一日に春陽堂より上梓した『阿育王事蹟』は、鷗外作品の中でも特殊な作品の一つである。内容として、「仏滅後二百数十年の頃北印度に王として賢明の聞え高く、仏法弘通に力を注いだ阿育王（論者註 アショカ王）の事蹟を記したもの」^{註1}である点において、Edmund Hardyが著した*König Asoka*. Mainz, Verlag von Franz Kirchheim. 1902を主たる底本に置き和漢洋の参考書を用いて増補した上に日本語訳し、図版を足した点において、ドイツ語訳印度史料を原典とした考証であり歴史小説の観がある。

『鷗外全集』第四卷^{註2}後記の通り「大村西崖の著述と見る」という指摘により、鷗外の著作から外される事態にもあっている。しかし鷗外原稿（現在、大阪府立中之島図書館所蔵）が発見されたことに伴い鷗外著述部分の存在が物理的に確認された結果、鷗外の著として前掲新全集に収録されるに至った。

以上二点の理由から「阿育王事蹟」は鷗外の作品中、現在に至るまで研究論文が皆無に等しく評価が定まらない作品といえよう。本作出版時に鷗外は四七歳、陸軍軍医として明治二七年の日清戦争、同三七年の日露戦争と二度の大戦への従軍を経ている。特に日露戦争従軍時には陣中で「うた日記」をつくり、東京凱旋後の明治四〇年九月には春陽堂から出版した。

その後、鷗外は大正三年から同七年に至る第一次世界大戦開戦中の大正五年に退官する。本論は、東京が軍都化し軍人尊重の風潮が高まる中、「阿育王事蹟」において鷗外が表現したかったことは何か、「うた日記」及び軍都東京の時代考証により明らかとすることを目的とする。

一・忠臣・軍神像が建立された都市空間

以下に鷗外が活躍した明治・大正時代に軍都東京に建立された時代を象徴する天皇の忠臣・軍神を模った銅像の内、『京浜所在銅

像写真 第一輯 『所伝記』(人見幾三郎、諏訪堂、明治四三年五月)に掲載されたものを時系列に以下に示す。番号に次いで、建立位置、完工年月、像モデル、像原型作者の順で記す。① 麹町区靖国神社、明治二六年二月、大村益次郎銅像、大熊氏廣(写真1) ② 麹町区丸内東京裁判所、明治三一年四月、山田顕義銅碑、石川光明③ 上野公園、明治三一年一月、西郷隆盛銅像、高村光雲④ 芝公園、明治三二年六月、小菅知淵銅像、藤田文蔵⑤ 麹町区霞ヶ関司法省、明治三三年七月一日、楠正成像、高村光雲(写真2) ⑥ 麹町区代官町近衛歩兵第一連隊、明治三五年九月、北白川宮能久親王銅像、新海竹太郎⑦ 麹町区永田町参謀本部、明治三六年一〇月、有栖川宮熾仁銅像、大熊氏廣⑧ 芝公園、明治三六年一月、後藤象二郎銅像、本小白雲⑨ 麹町区九段坂上、明治三八年四月、川上操六銅像、大熊氏廣(写真3) ⑩ 麹町区霞ヶ関外務省、明治四〇年八月、陸奥宗光銅像、藤田文蔵⑪ 麹町区九段坂上、明治四〇年八月、品川弥二郎銅像、本小白雲⑫ 麹町区霞ヶ関海軍省、明治四二年五月、西郷従道銅像、本小白雲⑬ 麹町区霞ヶ関海軍省、明治四二年五月、川村純義銅像、本小白雲⑭ 麹町区霞ヶ関海軍省、明治四二年五月、仁礼景範銅像、朝倉文夫⑮ 神田区万世橋畔、明治四三年三月、廣瀬武夫中佐・杉野孫七兵曹長銅像、渡邊長男(写真4)



写真 1



写真 2

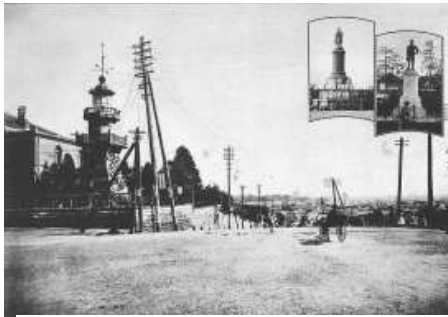


写真 3 葉書内右上が川上像



写真 4

写真1・2・4 出典(石黒敬章『明治の東京写真』角川学芸出版 平成二三年三月)
 写真3 出典(小島又市『最新東京名所写真帖』明治四二年三月 国立国会図書館近代デジタルライブラリー資料)

①は幕末に活躍した長州藩の医師西洋学者兵学者であり維新十傑の一人に数えられる人物。大政奉還後の明治政府の基礎を築いた功績者の一人である。この銅像が東京に建立された西洋式銅像の最古のものとして知られる。②は長州藩士であり司法大臣を務めた人物。人物像はレリーフ。③は薩摩藩士で維新の志士。西南の役で新政府軍と対峙し没する。④は陸地測量部長で陸軍工兵大佐であった人物。日本で初めて工兵隊を組織した。⑤は建武中興の際に南朝の後醍醐天皇を支えた忠臣であり、延宝八年徳川光圀は「嗚呼忠臣楠子之墓」と自らの文字で彫らせた楠正成墓誌を建立した。幕末維新期に天皇を擁護した維新の志士たちにより、楠公と自分を一体視する風潮が起きたことから明治期の検定教科書『国語読本』巻八、『修身経典』巻四にその功績が掲載され、国民的な忠臣としてシンボライズされた。⑥陸軍軍人。明治二六年、台湾出征中に現地でマラリアにより逝去。没後、陸軍大将昇進。⑦明治一八年参謀本部長、明治二七年の日清戦争参謀総長を歴任。参謀総長として広島入りするも腸チフスにて逝去。⑧土佐藩士で維新の志士。⑨薩摩藩士で西南の役にて活躍。陸軍大将を歴任。⑩幕末維新期に坂本龍馬・勝海舟らと活躍した紀州藩士。維新後は外務省に出仕し駐米大使、外務大臣を歴任。⑪長州藩士で吉田松陰門下。維新の志士。内務大臣、枢密院顧問を歴任。⑫⑬は薩摩藩出身の海軍軍人。⑭は西郷隆盛の弟。陸軍及び海軍軍人。元帥海軍大将、海軍大臣を歴任。⑮の廣瀬は海軍中将。海軍軍人。日露戦争旅順閉塞作戦において福井丸を指揮。敵艦魚雷を受け撤退する際に、自爆用爆発物を仕掛けに船倉に降りた部下の杉野が戻らないことから一人福井丸に留まった。救命ボートに乗り移った直後に被弾。戦死した。軍神一号として文部省唱歌になる等日露戦争の国民的英雄であった。

忠臣・軍神像が建立された意味について「ヨーロッパでは権力者の支配が王像となってそのまま具体化されたのに対し、日本では天皇が直接騎馬像や立像となって民衆に対峙することはない。日本では民衆の前に姿を現すのは天皇の忠臣である。日本における偉人の像は、天皇にいかにか仕えるかの規範を示すために都市空間に置かれる」^{註3}との論が示すように、民衆を戦時体制に促すプロパガンダであったと考えられる。その証拠に『東京銅像唱歌』(石原盤岳著 文盛館 明治四四年一二月)が出版され、大正元年一二月には「広瀬中佐」が文部省唱歌として発表された。児童教育・学校教育の側面からも忠臣・軍神銅像や天皇への忠義を子どもに知らしめようとする取り組みがなされていた。

⑨の川上操六像に関し南明日香は『荷風と明治の都市景観』(三省堂、平成二二年一二月)の中で「極めて拙悪なる九段坂上の銅像」(「帰朝者の日記」という永井荷風の批判と「あんな銅像をむやみに建てられては、東京市民が迷惑する。それより、美くしい芸者の銅像でも拵らへる方が気が利いてゐる」(「三四郎」におけるパリ帰りの画家「原口さん」の言葉)という夏目漱石の批判を指

摘した。鷗外と同時代の文学者が美観の点で銅像を批判したのに対し、鷗外は沈黙を守った。

二・陸軍軍医森林太郎による「うた日記」収録詩歌

鷗外は明治三七年の日露戦争には第二軍医長として従軍し、「阿育王事蹟」上梓直前の明治四〇年一月陸軍軍医総監に着任した。明治三七年四月一九日の『都新聞』には「鷗外博士の軍歌」という記事が収録された。「文壇には鷗外または隠流の名を以て知られたる医学博士森林太郎氏は軍医監として出征の途次、広島に於て『第〇軍の歌』を作り摺物として軍隊及び知友の許へ配布せられたり其の句は、□海の氷こごる、北国も、春風いまぞ、吹きわたる、三百年来、跋扈せし、ロシヤを討たん、時は来ぬ。十六世紀の、末つかた、ウラルを越えし、むかしより、虚名におごる、あだびとの、真相たれか、知らざらん。ぬしなき曠野、シベリヤを、我物顔に、奪ひしは、浮狼無頼の、エルマクが、おもひ設けぬ、いさをのみ。黒龍江畔、一帯の、地を略せしも、清国が、長髪賊の叛乱に、つかれしからの、僥倖ぞ。勇あり智なき、スエーデン、武運つたなき、ポーランド、齒にたつもの、なきままに、我慢は世々に、つり来ぬ、海幸おほき、樺太を、あざむきえしが、交換か、わが血を流しし、遼東を、併吞せしが、ナニ租借。鉄道北京に、いたらん日、支那の瓦解は、まのあたり、韓半島まづ、滅びなば、わが国いかで、安からん。本国のため、君がため、子孫のため、戦ぞ、いざ押し立てよ、聯隊旗、いざ吹きすさめ、喇叭の音。見よ開闢の、昔より、勝たではやまぬ、日本兵、その精鋭を、すぐりたる、奥〇将の、第〇軍。」という内容だが、同歌は「第〇軍」を「第二軍」、「奥〇将の第〇軍」を「奥大将の第二軍」に修正し「うた日記」^{註4}に「第二軍 明治三十七年三月二十七日於廣島」として収録された。

「うた日記」は日付が付された新体詩五八篇、長歌九首。短歌三三一首、俳句一六八句、訳詩九篇が、「うた日記」「隕石」「夢がたり」「あふやきるる心」「無名草」の五部立てにより構成される

この作品群は「陣中の豎琴」（佐藤春夫『定本 佐藤春夫全集』第二〇巻収録「陣中の豎琴」臨川書店、平成一一年一月）、「戦争文学としておもしろく、鷗外文学中の特殊心情作品」（日夏耿之介『日夏耿之介全集』第五巻収録「鷗外の詩」昭和四八年九月）と評されてきた。

収録詩歌のモチーフの多様さに関連して、勇ましい軍歌としての「第二軍」の後、日付を付した詩歌で綴る「うた日記」は多様なモチーフで展開していく。この理由として『森鷗外集Ⅰ』（日本近代文学大系一一、角川書店、昭和四九年九月）の三好行雄の注釈

によると、「鷗外はある時は死を恐れぬ『ますらたけを』であり（たとえば『たまくるところ』など）、ロシア憎しの心情を誇張する愛国者である（たとえば『さくら』『黄禍』など）。しかも、過ぎた青春を哀惜し（『卸紐』）、戦争の傷を受けた少女をあわれみ（『罌粟、人糞』）、戦いに倒れたロシア兵の愛別離苦をうたい（『ふろしゆちやい』）、故山の肉親を夢みる（『夢か現』）やさしさを隠さない。そうした心情のひろい振幅が、おのずからこの『うた日記』一卷に多彩なモチーフをかなでさせる」と解説する。平岡敏夫も三好説を後継し「種別も多岐にわたって、これを統一的な世界としてとらえるのはまことに困難な試み」（『日露戦後文学の研究下』有精堂出版、昭和六〇年七月）と述べた。

上田博は『鷗外のほほえみ』（明治の森社、平成二七年三月）にて、明治三八年奉天の宿営にて撮影された鷗外の写真に佐々木信綱から贈られた『日本歌学全書』九・一〇・一一編であることを説明し、その内容が万葉集 卷第一・二〇であったことから、鷗外が「万葉集」編纂者、大伴家持に自らを見立てたのではないかとの説を明らかにした。兵部少輔であった宮廷歌人の大伴家持と官人鷗外の視点を見定める中で、「うた日記」には、「官人の声（A）、わたくしの声（B）、にんげんの声（C）が重なり合い、あるいは位相をずらしてこだまのように響きあっている」と述べた。

最終章の「無名草」は「故郷に待つ妻しげ子の想に擬して詠んだ詩歌を集めた」「集中の白眉」（三好註）と評価されている。『明星』（明治三八年九月号）に寄稿した「曼荼羅歌」の中に混じり寄稿されなかった「死いろの 歌に倦む世や 口によぶ 王者にとほき 覇者のときめき」に注目したい。

ただ中は 蓮華にかふる 牡丹の座 仏しれりや 晶子曼荼羅・・・「曼荼羅歌」収録歌
死いろの 歌に倦む世や 口によぶ 王者にとほき 覇者のときめき

「死いろの歌」の中の「死いろ」について、鷗外は「無名草」中「病める子を 抱きて被く 木綿衾 白きは死のいろ にはあらじか」で「死のいろ」も用いていることから、「生気のない」（三好注釈）と解釈するだけでは不十分と考える。特に前歌が「晶子曼荼羅」を詠みこみ与謝野晶子に向けられた歌であることを考慮すると、戦争詩の一例として晶子による反戦詩「君死にたまふこと勿れ」（初出『明星』明治三七年九月）が意識下にあったと推測される。唱歌「廣瀬中佐」や「東京銅像唱歌」を日本人が口ずさむ時代に、王者と覇者「部をもって天下を治める者。正統でなくて世にはばかる者」（三好注釈）との違いを鷗外が意識化していること

が興味深い。つまり軍歌や戦争詩が人口に膾炙される戦時体制下を反映していると考えられる。唱歌「広瀬中佐」や「東京銅像唱歌」を日本人が口ずさむ時代に、王者と覇者との違いを鷗外が意識化していることが興味深い。この違いを上田は『うた日記』はおびただしい〈死者〉を追悼する詩歌集」と述べた上で「鷗外は『うた日記』を編集する過程」で「目覚めた」「二つの重大な事実」と位置づける。「牡丹の座」を中心に描いた〈晶子曼荼羅〉の図こそが〈王者〉の理想とする世界の関係を表している」と評する。そこで鷗外にとっての王とはどのような存在か、「阿育王事蹟」に描出された王権に注目したい。

三．「阿育王事蹟」に描出された王権

特に鷗外が執筆した壹・参・伍・拾貳・拾参・拾伍・拾陸・拾質・拾捌の章を注視すると、壹章は阿育王の治世以前の印度史、拾伍章から拾捌章までは阿育王の治世以後一九世紀までの印度史について記述されている。参章の内容は阿育王の刻文がある九基の石柱について、石柱の建立場所、状況それら七柱の刻文の紹介である。伍章の内容は帰仏の経緯とバラモン教・アジイキカ（バラモン教の新派）・ジャイナ教等の信教の自由を認めた理由についての説明である。拾貳は紀元前二五〇年頃の王による仏教遺跡巡礼の旅における各地での布施供養の様子についてである。拾参章の内容は王の眷属（家族）についての記述である。王妃微妙落起多が王の大切にしていた仏陀の象徴である菩提樹を枯らそうとしたこと、拘那羅太子に恋をし挑んだものの太子が応じなかったことを恨み太子の両眼を抉り取り放逐したことなど悪女としてのエピソードも収録される。

参・伍に関して「阿育王事蹟」原稿を見ると、鷗外 of 原稿の一部は大村によって削除の線が入れられ抹消されている。「森鷗外先生初めハルデイの『阿育王』を抄訳し、余に勸むるに、これを増補して同著となさむことを以てす。（中略）刻文を訳し、図画を加へ、以て全くその稿を改む」（『鷗外全集』第四巻後記「鷗外先生と父西崖との関係」収録「大村文夫氏所蔵校本」記載「西崖識」より）と大村は述べるが、大村の稿にも他者の朱筆が入っており、頁数が訂正されている。高楠に校閲してもらおう前に鷗外が大村執筆箇所にも眼を通し、修正していたと考えるのが自然である。鷗外は参の執筆・修正に関与していたと考えられる。参の中心は大村が訳出したと言う石柱の「刻文」である。「刻文」に描出された王権について以下に示す。

石柱刻文第一章には「達磨^{註5}の無上の帰依、無上の猛省、無上の従順、無上の怖畏、無上の勢力に依らでは、現世並びに後世を安固にすることいと難し」と前世後世の安定のもとに仏法をおき、自らの信仰を表現した。「達磨に合へる保護、達磨に依る規律、達

磨に依る福祉及び達磨に依る安固」を施策することの王による宣言が示された。石柱刻文第二章では「達磨とは」「慈悲、衆善業、憐愍、眞実、清浄を要す」ことを説明した上でこの教えに従う者は「当に善を為すべし」と、人々の行動や心情の理念が記された。摩崖刻文第三章には、諸侯、持縄者、地方官の行動に言及し、具体的には「父母に順なるは善なり。朋友、知己、親族、婆羅門及び沙門に仁なるは善なり、生命の神聖を重んずるは善なり、驕奢及び暴言を避くるは善なり」という「達磨を宣揚すべし」との指針が掲げられた。摩崖刻文第四章では、達磨の増長即ち「生物殺戮の停止、有情残害の禁断、親族に恭謹、婆羅門及び沙門に敬虔、父母に従、長者に順なることを増長す」ることを善とする宣言が示された。以上のように「達磨」の「増長」「宣揚」に関する宣言は摩崖刻文十四章及び石柱刻文七章に至る。その中で戦争について言及した摩崖刻文十三章について考察する。ここでは「縦令人ありて傷害を加へむとも、天愛は能く堪へらるべき限り堅耐忍辱せざるべからざることを持す。(中略)天愛以為へらく。達磨に依る征服はこれ最勝の征服なり」との王の考えが説明された。強国の王として他国を武力で征服し民を殺戮した反省に基づき、不殺生と達磨による国家の精神的統一を宣言したと言っても過言ではない。聖王による統治の理想的なあり方を阿育王の摩崖刻文及び石柱刻文に認めることができる。

おわりに

上記二の「うた日記 無名草」中の歌において表出された鷗外における王者と覇者との相違は、前者を三にて確認した阿育王に象徴される印度哲学による国家統一者、後者を一で一覧化した軍都東京に建立された忠臣・軍神銅像に象徴される戦時の武力行使者と考えることよって明確化した。鷗外がどちらの立場に共感を覚えたのかは、第一次世界大戦に従軍せず、大正五年に退官したその後の行動からも明らかである。

忠臣・軍神の時代に、「阿育王事蹟」の出版を意図したことは、日露戦争出征経験のある軍人鷗外にとって理想国家への希求と軍歌を作った自分への反省の結果、及び戦時体制下プロパガンダへのささやかな抵抗と考えることができる。荷風や漱石の忠臣・軍人像批判が都市の美観に着目した結果であるのに対し、鷗外は「阿育王」の刻文が刻まれた石柱の考証を通して、忠臣・軍人像の精神性の貧しさを暗に批判した。

静岡市所蔵中勘助関係資料内に中勘助が古書店で購入した『阿育王事蹟』初版(資料No.042A001)が存在する。鉛筆を用いた書

き入れは存在するが、中勘助の筆跡と断定し難い。しかし「阿育王事蹟」が中勘助の「阿育王」構想の原点となった点において、鷗外の思想を日清・日露・第一次世界大戦（・第二次世界大戦）と各戦時を生きた中勘助が、どのように作品取り込んだのか確認する必要がある。

後記 本論は平成二五年四月二八日（日）大阪市たかつガーデンにて開催された「楽しいO-gaiの会」における上田博先生のご発表「戦場のツイッター 鷗外『うた日記』の隙間から」に着想を得て執筆したものである。その際、上田先生は、廣瀬武夫中佐の戦死に伴う旅順港口閉塞作戦成功に関し「東郷平八郎二下シ給ヘル勅語」を始め、天皇が「戦争獣」ともいえる職業軍人に出す「詔勅・勅語」の内容と、「阿育王事蹟」に記された刻文とが対照的なことをご教示くださった。

註

1. 「校勘記」森潤三郎『鷗外全集』著作篇第九卷（岩波書店、昭和一二年七月）
2. 岩波書店、昭和四七年二月
3. 玉井哲雄編・石黒敬章企画・土居義岳他五名、『よみがえる明治の東京―東京十五区写真集―』角川書店、平成四年三月
4. 『鷗外全集』第一九卷、岩波書店、昭和四八年五月
5. 達磨とは、自然の現象と社会・人間の行為との総体を、根底から支え、各存在を本来の位置に固定・維持し、各々の在り方を決定するものであり、理法・世界秩序とともに、正義、社会規範としての法律、道徳律を指す。（『岩波 仏教辞典 第二版』中村元他四名編、岩波書店、平成二六年二月）

第二章 中勘助と同年代の文学者による仏教学並びに印度哲学受容

現在、日本における近代詩の出發は明治一五年の「新体詩抄」と考えるのが定説である。明治二〇年代には、個人詩集、詞華集、訳詩集の刊行が相次ぐとともに、新たに創刊された『帝國文学』『早稲田文学』『文学界』に新体詩が寄稿される等、社会的に認知されていった。明治二二年に『国民の友』付録として出された訳詩集「於母影」（森鷗外・井上通奏、落合直文、市村瓊次郎、小金井きみ子）は、日本に初めて浪漫主義的な抒情詩とその芸術性がもたらした。明治三三年に創刊された『明星』には西洋詩の浪漫性を感受した結果生まれた詩歌が発表された。これら近代詩の影響下で詩人を志向していった文学者の中に、石川啄木・秋田雨雀・中勘助を位置づけることができる。

明治一六年生誕の雨雀、明治一八年生誕の中勘助、明治一九年生誕の啄木は、新体詩の黎明期に生を受け、明治三八年前後に詩をめぐる人生上、第一の転機を迎えた。

雨雀は東京専門学校英文科在学中の明治三七年『黎明』（中野書店）によって、啄木は明治三八年『あこがれ』（小田島書房）によって、詩人としての地位を得た。また勘助は英詩への関心から明治三八年夏目漱石が講師を務める東京帝国大学英文科に入学する。

図らずも三者は、三様に漱石の庇護を受けた点で共通する。雨雀は明治三九年の結婚を機に、かつての漱石の養母を義母とした縁で、漱石一家と家族ぐるみの交流を持った。啄木は東京朝日新聞入社後、『二葉亭全集』編集を巡って漱石の知己を得、明治四四年、翌四五年に漱石は、病床にある啄木を経済的に支援した。中勘助の場合、処女小説「銀の匙」の東京朝日新聞連載は、大正二年漱石の推薦によるものだった。

「新体詩抄」の著者・外山正一・矢田部良吉、井上哲次郎、また漱石などの西洋近代学問を日本に移入させた学者兼文学者を明治第一世代と名付けると、啄木・雨雀・中勘助ら、その薫陶を青少年期に受けた文学者は明治第二世代と呼ぶことができよう。

本論では、中勘助と同年代の文学者による印度哲学受容の変遷をみていこうとする研究の一環として、啄木の「あこがれ」収録詩、雨雀の戯曲「仏陀と幼児の死」を取り上げた。

見理文周は「仏教は人間性を否定して、その超克を志向し、文学は人間性を肯定して、その真実を探って形象化するもの」^{註1}という認識に立脚し、「真に仏教にかかわった近代文学の作品は少く、したがって文学史の主流にはなりえなかった」と近代日本の仏教学成立自体を否定した。その背景には、「純粹に仏教に関わる近代文学とは、文学の宗教性を問いながら護教に陥らず、人間存在その

ものの根源に迫る内容の文学であるべき」との強い仏教文学への期待が存在する。

見理は高山樗牛の日蓮主義が文学界に及ぼした影響を認めた上で、近代日本の仏教的文学を「イ、仏教の史実から生まれた作品 ロ、仏教の教養から生まれた作品 ハ、仏教の思想から生まれた作品 ニ、仏教の体験から生まれた作品」に分類・分析・評価することを提案した。

見理も引用した伊藤整による「1、求道的実践者の文学 2、人間的認識者の文学」^{註2}という近代日本文学の二つの立場は、近代日本の仏教的文学にも当てはまり、「個」を超えた何ものかと「個」の関わりのある方が問い続けられてきた過程において、これらの立場は不離不即の関係を保ち続けてきたと言えよう。

その例として明治三五年、死を直前にして「日蓮上人とは如何なる人ぞ」「日蓮と基督」「日蓮上人と日本国」と日蓮に関する著作を残した高山樗牛を挙げるができる。

『世界歴史譚』『釈迦』（明治三二年）の著述がある一方で、樗牛は「日本主義」（初出『太陽』明治三〇年、『明治文学全集四〇』高山樗牛 姉崎嘲風 齋藤野の人 登張竹風』筑摩書房 昭和四五年七月）の冒頭で「吾等は我日本主義によりて現今我邦に於ける一切の宗教を排撃するものなり。即ち宗教を以て我国民の性情に反対し、我建国の精神に背戻し、我国家の発達を沮害するものとなす」と宣言し、「あはれ今日の仏教と称するものは、殆ど空虚なる形式主義に非ざるか。（中略）所詮仏教は決して是国民の性情の中に根據を有せるものに非ざるなり」と仏教を攻撃した。同様にキリスト教も攻撃し「由来宗教的民族」ではない我国民にはふさわしくない」と主張した。明治三四年の「文明批評家としての文学者」冒頭で、ニーチェを取り上げ「彼等は哲学者と謂はむよりは寧ろ大なる詩人也、而して詩人として大いなる所以は、実に彼が大いなる文明批評家たる所に存す」、「是の如く模範的人物は即ち天才也、超人也」とニーチェの文明批評家としての偉大なる人格を賛美した。更に「彼の説は是に到りて現時の民主平等主義根本的に否定し、極端にして、而かも最も純粹なる個人主義の本色を發揮し来りたるを見る。さはれ、歴史なく、心理なく、社会なく、国家なく、唯個人各自の『我』あるを認むるもの、十九世紀末の思想に対して何等の対比ぞや」と「個人主義」を定義した。

明治三四年「天才の出現」において樗牛は「我れは天才の出現を望む。嗚呼日蓮の如き、奈破翁一世の如き、詩人バイロンの如き、大聖仏陀の如き、哲学者シヨペンハウエルの如き、英雄豪傑は最や此世に出づる能はざる乎。久しい哉、我れの凡人に倦めることや」と、一転して、日蓮や仏陀への傾倒を公表した。この背景には、結核の発病によりドイツ留学をはじめ社会的活動を制限された樗牛の内面的変化と、田中智学の「宗門の維新」を読み感激、智学に導かれて日蓮信仰に入った影響があるようだ。

明治三五年の「日蓮上人と日本国」では「畢竟三界は悉く皆仏土たり、日本亦其の国土と神明と万民とを併せて、教主釈尊の一領域たるに過ぎず。苟も仏陀の悲願に適はず、真理の栄光に応へざるものは、其国土と民衆と、共に膺懲し、改造せられざるべからず。日蓮、釈尊の勅使として『国必ず亡ぶべし』と宣言せる、毫も怪むに足らざる也。」と蒙古襲来を日本への必罰として見ている。「彼れにとりては真理は常に国家よりも大也。是れを以て彼れは真理の為めには、国家の滅亡を是認せり。否、是の如くにして滅亡せる国家が、滅亡によりて再生すべしとは、彼れの動かすべからざる信念なりし也」とつまり仏陀の真理が示されるためには国家が亡ぶことも止む無しとする思想を表明した。「日本主義」時代と比較するならば、「我」を超えた日本国家への傾倒から、「個」を超えた真理・仏教への傾倒へと転換がなされたことは明らかである。樗牛はこのように、「個」を超えた真理への視座を持つことで日蓮上人に関する三作を死の直前に著した。

以上のような文学史相の中で、原始仏教への関心を持ち、特定宗教集団への護教や文壇での高い名声と離れた立場で、人間存在のあり方を求道的に追求した文学者も数少ないが存在した。

それらの代表として大正期に原始仏教資料に取材し創作に取り組んだ中勘助や久末淳が挙げられる。論者は中勘助のインド三部作における印度表象を調査する過程において、芥川龍之介の「アグニの神」、谷崎潤一郎の「人魚の嘆き」等の作品がエキゾチックな雰囲気、童話的神話的枠組みを作品に適用する目的で印度表象が用いられたことを明らかにした。^{註3}文壇の人気作家による文学素材としてのインドに対する関心が大正期に高まったという、時代背景を認めることができた。

寺族に生まれ一旦は文学を志し、中勘助と同時期に永井荷風や北原白秋ら文壇の大家に認められながらも、その地位を放棄し仏教僧へと戻った久末淳の作品における印度表象を考察する。久末の文学者としての活躍の時期は短く、文学辞典にその業績が、文学全集にその作品が掲載されたことはない。本論は、文学史に埋もれてしまった個性的な文学者久末の業績を再発見する意図も併せ持つ。

一 石川啄木

(一) 啄木の「あこがれ」における仏教的なもの

高淑玲は、「啄木の初期作品に関する一考察」^{註4}において、初期短歌中の仏教用語、また「あこがれ」中「白羽の鵜船」「電光」内

の仏教用語と共に、当時の啄木評論中の仏教的色彩のある表現を取り上げた。「彼の初期の作品に仏教思想の表現の特色がみられるのは、慣れている身近の仏教用語を以て自分のあこがれを表すと同時に、彼が置かれた環境によって考えさせられたため、人生の現実生活を裏付ける仏教の無常思想は自然に微妙に作用していると言えよう。」と、仏教表現に環境による影響が大きいことを指摘した。啄木詩中の「仏教用語」を「仏教思想の表現」として扱ってよいものか再検討したい。

(二) 「独絃哀歌」の中の仏教語に関する先行論文

啄木の「あこがれ」中のいくつかの詩が明治三六年刊蒲原有明の「独絃哀歌」の影響下にあることは、先学の指摘にある通りである。ここで仏教語「涅槃」が使用されている「独絃哀歌」収録詩である「蓮華幻境」に関する示唆的な論を紹介したい。

同詩に関して、関口宗念は「蒲原有明に於ける仏教的なるもの」^{註5}において、「涅槃」という仏教語が同詩に用いられているものの「詩全体の構想が、健康な内部生命の賛嘆ともいうべきもの」で「西欧的^{註5}の人生肯定の気分が濃」く、「涅槃」という仏教用語が「仏教特有の意味や情感を持っていない」と論じた。更に蒲原が詩中に仏教語を用いた理由として同氏は「この詩の世界と異質的に見える語によって、かえって深みと陰影を加えようとした」という効果狙いの可能性を指摘した。

(三) 「白羽の鵠船」における仏教語再検討

高が「仏教の生滅無常の思想」と論じた「白羽の鵠船」の「終焉は靈光無限の生の門出」を再検討する。

白羽の鵠船

かの空みなぎる光の淵を、魂の

白羽の鵠船しづかに、その青渦

夢なる權にて深うも漕ぎ入らばや。

と見れば、どよもす高潮音匂ひて、
樂声さまよふうてなの靄の帕を
透きてぞ浮きくる面影（百合姫なれ）
天華の生襷瑠々あけぼの染
常樂ここにと和らぐ愛の瞳

運命や、寂寥児遺れる、されど夜々の
ゆめ路のくしびに、今知る、哀愁世の
終焉は靈光無限の生の門出。
瑠璃水たたえよ、不滅の信の小壺。
さばこの地に照る日光は氷るとても
高歎久遠の座にこそ導かるれ。

『石川啄木』（日本近代文学大系二三、角川書店、昭和四四年一〇月）の今井泰子の注釈によると「天華」「久遠」が仏教語として指摘されている。そのうち「天華」のみ「極樂に咲く花」と解説が付された。

それら以外にも、「終焉は靈光無限の生の門出」について、「靈光」を「衆生に本来具わっている仏性。それが不思議な光明を放つものであると考え」た「沙石集」の語法と考えると、「人間の逝去の際には、仏性の光明に包まれるが、それは次の生の始まりである」と意味を解釈できる。「輪廻転生」「生死流転」の意味であろう。

次行の「瑠璃水たたえよ 不滅の信の小壺」の中に「不滅」の語が現れる。これは「滅したのではない。滅びない。消えない。すべて存在するものは根源的には空で、生ずることも滅することもない」という「般若心経」における「不滅」の解釈に一致する。「本来あらゆるものは不滅であるが、現象面においてのみ滅があるという」「不滅の滅」という解釈が仏教語にあるが、前行と併せて考えると、生命の永続性を象徴する二行と考えられる。最終行の「高歎久遠の座にこそ導かれる」という表現の中の、「久遠」だが、「法華経」に登場する「遠い過去、永遠の昔」の意味として捉えると、滅しても永遠の昔から存在する所に導かれるという、昇天を表すと考

『啄木全集 第二卷』筑摩書房、昭和四二年八月

えられる。

以上より、同詩の中の仏教語は、一応は仏教特有の意味を踏まえ、文脈上、意味の破綻はない。

しかし詩全体としてみると、「詩人啄木誕生」^{註6}における近藤典彦の指摘の通り詩全体としては「ワグナーの二大信条” Faith and Love” がうたわれている」内容で、「Wagner 中の Lohengrin」の章にある、a boat drawn by a white swan のイメージを借りたもの」と言える。

第一連が百合姫との濃厚な愛の世界を描いた一方で、第二連では仏教語を多用し哲学的イメージを演出している。これは、愛の世界の甘美さが強調される効果を考えた上での試みと言えよう。

以上のように、同詩において仏教語は「仏教特有の意味や情感」を際立たせているとは言い難い。神聖かつ荘厳な雰囲気や詩に付け加えるに相応しい語として仏教語が試用されたと考えるのが適当だろう。

(四) 「電光」における仏教語再検討

高は「電光」の「死なし、生なし、この世界、不滅ぞただに流るる」、「『今』こそは、とは」に「仏教の生滅無常の思想」を認めたが、(三)に引き続き、再検討する。

電光

暗をつんざく雷光の

花よ、光よ、またたきよ、

流れて消えてあと知らず、

暗の綻び跡とめず。

去りしを、遠く流れしを、
束の間、——ただ瞬きの閃めきの
はかなき影と、さなりよ、ただ『影』と
見もせば、如何に我等の此生
味さへほこる値さへ、
たのみ難なき約束の
空なる無なる夢ならし。

立てば、秋くる丘の上、
暗いくたびかつんざかれ
また縫ひあはされて、雷光の
花や、光の尾は長く
疾く冷やかに、縦横に
西に東にきらめきぬ。

見よ、鋼色の空深く
光孕むか、ああ暗は
光を生むか、あらずあらず。
死なし、生なし、この世界、
不滅ぞただに流るるよ。
ああ我が頭おのづと垂るるかな。
かの束の間の光だに
『永遠』の鎖よ、無限の大海の

岸なき波に泳げる『瞬間』よ。

影の上、また夢の上に

何か建つべき。来ん世の榮と云ふ

それさへ遂にあだなるかねごとか。

ただ今我等『今』こそは、

とはの、無限の、力なる、

影にしあらぬ光と思ほへば、

散りせぬ花も、落ち行く事のなき

日も、おのづから胸ふかく

にほひ耀き、笑み足りて、

跡なき跡を思ふにも

随喜の涙手にあまり、

足行き、眼むく所、

大いなる道はろばると

我等の前にひらくかな。

『啄木全集 第二卷』筑摩書房、昭和四二年八月

『石川啄木』（日本近代文学大系二三、角川書店、昭和四四年一〇月）の今井泰子の注釈によるとこの詩には仏教語と指摘される語句はない。

「死なし、生なし、この世界、不滅ぞただに流るる」は、前述の通り、「滅したのではない。滅びない。消えない。すべて存在するものは根源的には空で、生ずることも滅することもない」という「般若心経」における「不滅」の解釈に一致する。

高が問題とした『今』こそは、とは」は、同詩一三行目から一五行目にかけての「ただ今我等『今』こそは、とはの、夢幻の、力なる、影にしあらぬ光と思ほへば、」の中の句であるが、その直後の「散りせぬ花も、落ち行くことのなき日も、」との関連でいえば、「とはの、」は「永遠の、」と同意味と推測される。つまり、『今』が永遠の、無限の、光だと思えば」という大意であろう。ここに

「今」Ⅱ「永遠」「無限」という啄木の思想が表わされた。

本詩七行目から九行目にある「かの束の間の光だに『永遠』^{とは}の鎖よ、無限の大海の岸なき波に泳げる『瞬間』^{またたき}よ。」における時間認識は「束の間」と『瞬間』が『永遠』と「無限」を構成するといふものである。

戸塚隆子の「石川啄木の『永遠の生命』」^{註7}第二章では、『あこがれ』中の「我なりき」が取り上げられ、啄木の『永遠』即『瞬間』という時間認識が「永遠の生命」を説いた高山樗牛・姉崎嘲風の影響下で培われた可能性の高さが示された。戸塚氏は、姉崎の「清見潟の除夜」「戦へ、大に戦へ」の一節に、『永遠の生』の『今』を生きる姉崎嘲風の姿を認め、『永遠』と『瞬間』Ⅱ『今』を結びつけ、『永遠』の現前化として『今』を捉えようとする時間認識は、啄木が傾倒した姉崎嘲風の論説に既に顕著に表わされている」と論じた。

「清見潟の一夏」(『明治文学全集四〇 高山樗牛 姉崎嘲風 齋藤野の人 登張竹風』筑摩書房 昭和四五年七月)に「強大なる意志のあ所は即ち永久の生命のある所なればなり」という樗牛のありし日の言葉が登場する、ここでは高山樗牛の思想的影響が見受けられる。「戦へ、大いに戦へ」(『明治文学全集四〇 高山樗牛 姉崎嘲風 齋藤野の人 登張竹風』筑摩書房 昭和四五年七月)冒頭には「何れの日とも此一生は大切の一生である、前往未来幾何の生を享けたとしても、今の此一生は唯一の一生で、自分自らの存在の意義は此の一世の中に發揮しなければならぬ」というニーチェ著「教育者シヨペンハウエル」中のニーチェの主張を引用している。最後にまた「今の一生は前後只一度の此生ではないか、今の時は過去未来を包括したる『今』ではないか、此生に於て吾等は過去の光栄を体しなければならぬ、此一生は即ち未来の生々の源頭である、久遠の過去を此「今」に収め盡した吾等は悠久の未来をも此『今』の一瞬から生み出すべき必然の運命を有つておる」とあることから、「今」と「永久」を繋ぐ時間感覚は、むしろニーチェの思想によると考えられる。

以上より「電光」は、姉崎の思想の影響を色濃く受けた詩と言え、「般若心経」的「空」思想の表現とは言い難い。

しかし、高山・姉崎の説く「永遠の生命」の出所を探る際に、両者ともに東京帝国大学哲学科に学んだという共通点と共に、ニーチェ・シヨペンハウエルなど西洋哲学に通じていたことに加え、高山にはウパニシャッド・マヌー法典・ヒストパデーサ・リグヴェーダなどの印度思想を紹介した『古代印度思想概論』(明治二九年)の著書があること、明治三八年に帰国した姉崎には仏教史研究並びに宗教学研究のために留学しインドでヴェーダ研究に取り組んだ経歴があることを無視することはできない。

(五) まとめ

啄木の「あこがれ」所収「白羽鵠船」「電光」に啄木の仏教的世界観を認めることはできなかつた。詩中に仏教語は使用され、文脈上、仏教語の意味は不自然ではないが、詩全体の構想やイメージから見るとその語法に「仏教特有の意味や情感」が強いとは言い難い。また仏教語の使用の背景に啄木の仏教思想は示されなかつた。しかし、高山・姉崎の影響下で用いた詩語が、ニーチェの考えを含むものだった可能性が示された。

二 秋田雨雀

(一) 印度哲学受容前後の雨雀の伝記事項

『秋田雨雀日記』第一巻（未来社、昭和四〇年三月）によると大正四年から五年にかけての秋田雨雀の伝記は次のように時系列で整理することができる。

大正四年二月　ワシリイ・エロシエンコの訪問を受け、エスペラント語の勉強を開始。

同年四月　エロシエンコの紹介でバハイ教のアグネス・アレキサンダーを訪問。

同年八月　父・玄庵、業務上の非合法行為（墮胎殺人罪）の嫌疑で起訴される。

同年十一月　父、中野監獄に入獄（懲役一ケ年）。

大正五年二月　*Gospel of Buddha* と *Amitaba*（ミトラ阿弥陀論）読書。

同年六月　アレキサンダーを訪ねてきたポール・リシヤールに面会。タゴールを迎えに東京駅にゆく。木村学士の「ウパニシャ

ツドと仏陀^{ママ}」読書。

同年八月 次女あや子疫痢にて急死（享年四歳）。リシャールからのあや子追悼文に対する返礼として「法華経」と読売新聞を送る。

同年九月 「仏陀とクリシャ・ゴオタミ」執筆、後に「仏陀と幼児の死」と改題し『帝国文学』に送る。

同年一〇月 「仏陀と幼児の死」『帝国文学』掲載。

同年十一月 父が刑期を終えて中野監獄を出獄。

同年一二月 夏目漱石逝去、納棺に立ち会う。

大正九年四月 戯曲集『仏陀と幼児の死』叢文閣より刊行。

伝記事項により次のことが概観できた。

大正四年翌五年、雨雀は、ロシア人エスペランティストのエロシエンコ、バハイ教のアレクサンダー、フランス人神学者のリシャール、インドの詩聖タゴールらと出会い国際的視野を得る時期を迎えた。一方で、父の入獄、愛児の急死、漱石の死去など家庭周辺で悲劇に見舞われた。その激動期に、鈴木大拙訳で日本に紹介されていたポール・ケラーズの著書“Gospel of Buddha”の日本語版『仏陀の福音』、タゴール来日を期して発表された印度哲学研究者・木村泰賢によるウパニシャッド哲学と仏教との比較に関する論文を受容し、戯曲「仏陀と幼児の死」執筆に向かっていったようだ。

悲劇に対峙する心的状況とタゴール来日という環境的要因が共鳴する中で、印度哲学受容の結果、作品化されるに要した時間は、わずか七カ月であったと推測できる。

次に当時の受容内容について詳細を検討する。

(一) リシャールを通しての印度哲学の受容状況

大正五年のリシャールとの出会いから、雨雀が印度哲学を受容していった経緯は、前出の「秋田雨雀日記」(『秋田雨雀日記』第一

卷（未来社、昭和四〇年三月）によると次の通りである。

・「リシャールは細君と伝話のできる若い女といった。主人はテオソフイの人で、インドを経てきた人で、スウェデンボルグやアンナ・ベーゼントのことを話した。ぼくに日本の医薬（秘密薬法）のことを聞いた。オゾン^{オゾン}の薬のことを話していた。」（五月三一日）

・「仏人ポール・リシャール^{リシャール}氏と若い女の英語の通訳がきていた。『いま、ヨーロッパ人はまったく獣のようになっていっている。もはや東洋人はヨーロッパの思想界から何物も望むことができない。仏陀の精神を中心にした思想が行われなければならない。』』と書いていた。」（六月三日）

・「印度哲学を研究してみよう。東洋の新しい思想は、将来どうしても印度思想を根拠としなければいけない。リシャール氏のように、西洋思想は物質文明のために破壊されてしまっているようだ。大学のタゴールの公演は満員だといってことわってきた。明日すこし早くいって高楠博士にあってみよう。」（六月一〇日）

以上の記載より、リシャールは、印度哲学と西洋思想との比較を通して印度哲学の優位性を雨雀に説き、雨雀によるウパニシャッド哲学とタゴールへの関心を高める機縁をつくったことが分かる。

さらに雨雀を悲嘆にくれさせたあや子急死に関して、「秋田雨雀日記」記載の同年八月一六日付けリシャールから贈られたあや子追悼文は次の通りである。

All of us have suffered thus at one time or another of our lives, for the great angel of death
spears non-butone. I think you can believe that death is but transition and by no means an end.

Though in the first moment of our anguish, we can't look beyond the present suffering, gradually we become conscious of the
great love beyond all, who willed things thus, we say., it is best.

この追悼文に関して、雨雀は「きのうポール・リシャール氏からハジソンの手で親切な手紙がきた。あや子の死によって大きな愛が感ずるようになるだろうということであった。ぼくは最初は大きな悲哀を感じたけれども、だんだん大きな歓喜 *ananda* を感じはじめたと書いてやった。夜、雨のなかをリシャール氏を訪うた。(中略) リシャール氏は『永久に死なない生命がある』といった。あの人の思想はまったく印度思想だ。」(同年八月一九日)と、日記に肯定的に受け止めたことを記した。この記述より、印度哲学の受容を通して、あや子の死を乗り越える価値観の転換が図られたことがわかる。

また雨雀が東京帝国大学の印度学者・高楠順次郎博士と知己であったことが日記の記述から窺える。次項で述べる、高楠の弟子で原典による古代インド仏教の系統的研究を初めて成し遂げた木村泰賢の、論文受容に関わる情報である。

(三) ウパニシャッド哲学とタゴールの思想の受容状況

雨雀は日記の大正五年六月九日欄に「木村学士の『ウパニシャッドと仏陀^{ブダ}』を読んだ。」と記した。これは同年六月号の『中央公論』に掲載された当時東京帝国大学助教授の木村泰賢による論文「ウパニシャッドと仏教」の誤記と考えられる。木村論文の梗概は次の通りである。

タゴールの思想の原点にはウパニシャッド哲学と仏教思想が認められ、これら印度思想は表裏をなすものと考えられる。ウパニシャッドは梵や大我といった理論に重きをなし、仏教はこれを人格における働きとして捉える。両者の最高理想は梵涅槃でありその点で両者の軌跡は一致する。

雨雀は、木村論文の感想を同年六月九日の日記に、「梵と涅槃 (Brahma と Nirvana) と関係 (Brahma-atma-aikyam) 梵我一如説ウパニの如楽観音 (*ananda*) と仏教の慈悲 (*paramam sukham nirvanam*) 花上の安楽との関係。」と記した。

木村の論文は同号の『中央公論』掲載記事中では異例の印度学・仏教学の専門的内容であった。ウパニシャッド哲学から原始仏教を確認したもので、リシャールの示した西洋思想対印度哲学の比較宗教的理解のあり方から、印度哲学カテゴリー中の二つの思想を比較するという、一歩進んだ境地に雨雀が至ったことを示す事実である。

六月一日の日記における帝国大学におけるタゴール講演の記述は、「タゴールは白い着物に鼠色の帽子をかぶっていた。文明を二つに分けて精神的、物質的として、西洋文明は物質の文明で東洋の文明は精神的文明だといって、日本は両文明を調和させてい

る。日本人と印度人とは心と心が接近している。日本人は西洋の物質文明を真似する必要がないといった。」というものであった。

七月二日に慶応義塾大学でタゴールの講演「The spirit of Japan」を聞き、七月一三日には「タゴールの帝大の論文と慶応の」とを精読した。タゴールの西洋文明観にはある意味正しいところがある。」と、タゴールの思想を繰り返して検討しながら受容している。

この経験の後、八月一日には「今月から夏とたたかいながら今年度後半期の思想の統一をえなければならぬ。ウパニシャッドを読んで、ぼくの子供のころからの考えをほとんどいいつくしているように思う。」と、また八月六日には「ウパニシャッドの研究。自分の哲学はウパニシャッドから生れるかもしれない。」と日記に記し、雨雀は一層、ウパニシャッド哲学に傾倒していった。そこには六月の木村の論文及び六月七月のタゴール体験の影響が多であったと推測される。

(四) ポール・ケーラス著書 *The Gospel of Buddha* 及び *Amitabha* と「仏陀と幼児の死」との比較

前項(一)(二)(三)にて確認された印度哲学受容の影響により、大正五年九月執筆の戯曲に示された具体的内容を次に挙げる。

(ア) *The Gospel of Buddha*. LXXXVI *The Mustard Seed* (「芥子の種」) の梗概

Paul Carus, *The Gospel of Buddha*. Chicago & London, The Open Court Publishing Company. 1915 は、前書きによると、一八九四(明治二七)年にアメリカ合衆国において出版された。その直後、釈宗演の紹介で鈴木大拙(貞太郎)の翻訳により日本語版が世に出たという。『仏陀の福音』(佐藤茂信出版、明治二七年一二月)の緒言における釈宗演の解説並びに釈宗演の伝記によると、明治二六年にシカゴで開催された万国宗会議で釈とケーラスが出会ったことを端緒とし、大拙は渡米しケーラスのもとで研究生活を送る。

大正五年三月二七日の「秋田雨雀日記」において、*The Gospel of Buddha* 翻訳「仏陀の福音」との出会いが次のように記された。

八幡君が *The Gospel of Buddha* を丸善で買ってきた。千家君のところに訳文があったそうだ。鈴木大拙さんの訳だ。八幡君に翻訳することをすすめた。小泉君が洛陽堂から出してもいいといったそうだ。

雨雀は実際にリシャールに出会う五月三十一日以前の、二月五日 *The Gospel of Buddha* 及び *Amitabha* を読書(「秋田雨雀日記」によ

る)し、三月二十七日には翻訳書「仏陀の福音」に出会っていた。*The Gospel of Buddha*.LXXXVI *The Mustard Seed* (「芥子の種」)梗概は次の通りである。

富裕な人が持っていた黄金が木炭と化したので嘆いていたが、友人の勧めにより市でそれらを売ろうとしたところ、孤独貧苦の娘クリッシャ・ゴータミはそれらを触ると黄金に戻り妙智眼力を持つと讃えられた。

クリッシャ・ゴータミは、一人の男の子を産んだが、その子は程なくして死んだ。クリッシャ・ゴータミは死児を抱いて近所を起死回生の薬を求めてさまよった。その中の一人が釈尊を訪ねるようゴータミに勧めた。釈尊はゴータミに、「まだ一度もその家の子供や夫、父母、友人が死んだことのない家からもらった一握の芥子の種で子供を治せる。」と伝えた。町に出て芥子の種を求めたゴータミは、愛する者の死に出会わなかった家を見つけることができず夜を迎えたゴータミは、死は何者も避けることができなものと気づき、嘆くのを止め死児を葬った。釈尊のもとに戻ったゴータミは釈尊のことばの意味を悟り、釈尊の弟子となった。釈尊がその時説いた法は、以下の通りである。「此の世の人間の生涯は短く苦しい。生有るものは死を免れない。此の世は無常であり、いかに死んだものを嘆いたとしても死んだものは生き返らない。一切の悲苦を絶った者に福德は訪れる。」

(イ) 大正五年九月一七日脱稿の戯曲「仏陀と幼児の死」梗概

(第1節) ヒマラヤの山に臨んだインドのある町の郊外。小路に沿った泉の近く。夏の夕暮れ時。熱病も戦争も起きない平和な町の様子。夫を助ける働き者であり、将来を囑望された美しい子供アマアルの母である、クリッシャ・ゴータミは幸せ者として評判高いことが、泉の水をくむ2人の女の会話から明らかにになる。

(第2節) 第1節と同じ場所。真夜中ごろ。熱病で急死した七、八歳の男の子を抱いたクリッシャ・ゴータミが町の方から走ってきて、死児の額を泉の水に浸して冷やそうとする。それを見ていた仏陀はその子の病気を治してやりたいと思わないのか?とゴータミに声を掛ける。死んだ子を生きっていると主張するゴータミに、仏陀は自分はこの世で一番貧しい医者であり、一握りの芥子の実によつてアマアルの病は癒えると告げる。仏陀はゴータミに「死」を知らない家から芥子の実をもらってくるように告げ、一握りの芥子の実を町に探しに行かせる。

(第3節) 明け方近くの大森林の中、菩提樹の下に静かに座る仏陀は、子供の腐りかけた遺体を抱いて眠るゴータミに目を覚ますよう声を掛ける。仏陀は、ゴータミは信仰の中で「生」「死」の教えを聞いてきたが、「生」も「死」も実は考えて見たことがなかった

ことを指摘する。仏陀は、町の全ての家が「死」の運命を経験してきたこと、人間は「生」「老」「死」の「苦」を持つ一方で、「愛」「生」「永遠」の「喜び」を持つこと、「永遠」を感じるころには「アミタアバの光」があること、「死」は「生」の芽生えであることを説く。暁の光の中、永遠の喜びに入った子供を祝福するよう仏陀は、仏陀の話聞いて正気に戻り永遠の涙を流すゴオタミに声を掛ける。

(ウ) 考察

第1節における、第三者間の会話によるクリシヤ・ゴオタミの描写など戯曲的方法が用いられたが「仏陀と幼児の死」は *The Gospel of Buddha* 第八四節 *The Mustard Seed* (「芥子の種」) を下敷きとした作品であることが初めて明らかとなった。

第3節には、原話を離れ、印度哲学の影響が色濃く認められる。それは人間は「生」「老」「死」の「苦」を持つ一方で、「愛」「生」「永遠」の「喜び」を持つと説く点と、「死」は「生」の芽生えであると説く点である。

永遠の喜びがある西方浄土に「アミタアバの光」すなわち無量光菩薩(阿弥陀仏)を見る点は、雨雀が読んだケーラスの *Amitabha* の影響と考えられるが、*Amitabha* でも「愛」「生」「永遠」は説かれない。「死」と「生」が「永遠」の生命の中で循環していると考えるウパニシャッド哲学の影響が認められる。

(五) まとめ

大正四年、翌五年の印度哲学受容を背景とした創作活動への深い満足感が、同九年単行本出版された戯曲集『仏陀と幼児の死』序文における「私といふ一個の人生の使徒の、気質と体質とを見て呉れる人があるならば、それは、私の最もいい読者であり、また最もいい友人であると思ふ。」という言葉説に反映されたと考えられる。国際時代と雨雀が自称した時期において、親日、新印の外国人との交際が、印度哲学への関心、ひいては創作の一背景をなすこととなった。当時、高楠、木村ら東京帝国大学所属学者によるタゴールの紹介を始め印度学及び仏教学の啓蒙活動が盛んであったことも影響する。

雨雀の日記及び当時を回顧する文章^註によって明らかかなように、家族の死を乗り越える体験が印度哲学受容の原点にあったことは否めない。

三 久末淳

(一) 久末淳の文学的業績

久末の一七回忌を以て出版された遺稿集『久末淳集』^{註9}（私家版）巻末「久末淳略年譜」と福井中学における一年後輩の加藤恂二郎による同書「跋」内の久末の長男・純美からの聞き書きによると、久末の生涯は以下のように記す事ができる。

久末は明治二五年八月五日に福井県坂井郡細呂木村清王（現あわら市清王）照厳寺に生まれ、福井中学校において久末蒼愁の筆名で回読雑誌『陽炎』（後に『波羅鞞層』に名称変更）を発行し文学活動を開始した。明治四四年に慶応義塾文科予科に入学、文科予科で荷風の教えを受けたが、二年在学後、退学し、比叡山にのぼり約半年間滞在した。久末は『三田文学』と共に白秋主催の『地上巡礼』に作品を発表した。大正一〇年一月『三田文学』第一二巻新年号掲載「宝蔵秘夢」を最後に文壇を離れた。

その後、趣味的に翻訳や戯曲創作に筆を執ったものの、照厳寺第二四世住職として仏道に専念し、昭和二七年七月一五日逝去、という生涯を送った。

発表順に記すと作品の一覧は以下ようになる（発表年月、文学ジャンル「作品名」、『掲載誌』巻号、発行元、特記事項の順で記載）。

- ①大正元年十一月、戯曲「キルウダカの叛逆」・小品「PARLERIE」、『黒耀』創刊号、モンスター社、久末純夫の筆名
- ②大正二年十二月、翻訳「SAKUNTALAの初演」、『三田文学』第四卷一二号、三田文学会
- ③大正三年十二月、随筆「僧院尺牘」、『地上巡礼』第一卷四号、巡礼詩社 律師彰淳の筆名
- ④大正五年三月、翻訳「梵劇概観」、『三田文学』第七卷三号、三田文学会
- ⑤大正八年三月、小説「黎明」、『三田文学』第一〇卷三号、三田文学会
- ⑥大正八年月、随筆「草菴閑窓」、『三田文選』、三田文学会編 玄文社
- ⑦大正九年一〇月、小説「光触」、『三田文学』第一一巻一〇号（但し同号は発禁処分）、三田文学会
- ⑧大正九年一二月、随筆「幽草幽花」、『三田文学』第一一巻一二号、三田文学会

⑨大正一〇年一月、小説「宝蔵秘夢」、『三田文学』第一二巻新年号、三田文学会

次に以上の作品発表誌と久末の関係を以下に記す。

①の『黒耀』に関して、巻末の「楽屋落」末尾「モンスター社同人」の一覧に「久末純夫」「小澤愛園」^{註10}ら慶応義塾関係者の名前が掲載されており、「消息」欄「小網町の小集」に小網町メゾン・鴻ノ巣において開催された「三田文学会」で話された内容など詳細な記事があることから、久末の②④⑤⑥⑦⑧⑨の作品を発表した三田文学会の関係者も関わった同人誌であったようだ。

同誌は大正二年三月まで全六冊刊行され、編集兼発行人は植松貞雄、モンスター社（後に黒耀社に改名）、東雲堂書店発売、「火の様な、燃ゆる様な芸術の愛好心を持った」人々が戯曲、小説、随筆、翻訳、詩歌を発表。尾竹紅吉、野口米次郎、馬場孤蝶らも執筆している。

②④⑤⑥⑦⑧⑨に関して、明治四三年五月創刊時より大正四年二月編集に小澤愛園が編集に参加し、発行人が石田新太郎に変更となるまで、編集兼発行人永井壯吉（荷風）、編集担当井川滋、発売所靱川書店であった。

前出の加藤は「久末淳集」において、『荷風全集』中「毎月見聞録」大正五年九月中旬の項の「久末淳、目下福井県坂井郡細呂木村清王、照嚴寺にあり」との記載を、荷風による久末注目の事実を示すものと挙げている。

前出遺稿集「解説」で則武三雄は荷風と久末の関係を小島政二郎の筆による「永井荷風先生」（『文芸春秋』昭和二六年三月号）内の「先生の相手役は、いつも山崎俊夫と同級の久末淳と云ふ越前の由緒のあるお寺の跡取り息子だった。久末が旨く永井先生を掴まへてくれることを、私は毎週祈ったものだ。そんな時には、私も人のうしろから、先生の文学談を拝聴することが出来た。」という箇所に認めた。

加藤と則武の指摘により、荷風にとって久末は、文学談の相手に成り得る注目すべき教え子の一人であったことが明らかとなった。沢木四方吉が三田文学主幹を務めた大正五年六月からの九年間を評する「荷風時代のはなやかさと声価は号を追って落ちた。しかし新人育成に力を入れたので荷風時代より多く輩出」^{註11}との文章にあるよう、荷風の教え子であると同時に、小澤と①のモンスター社で同人であった久末は、荷風の息のかかった実力ある新人の一人として『三田文学』に投稿していたことが分かる。

⑥の『三田文選』は、『三田文学』創刊一〇周年の記念出版物であり当時の代表的執筆者が寄稿しているが、荷風に並び久末も作品を掲載している。

③の『地上巡礼』は、大正三年九月から大正四年三月まで全六号が刊行された白秋主催の巡礼詩社の機関誌である。巡礼詩社は白

秋が小笠原から帰京し松下俊子と共に三浦市三崎の見桃寺に仮寓した大正二年一月に興した詩歌結社であり、当時は東京市麻布坂下町一三番の白秋転居地に住所を置いた。大正四年四月に白秋が実弟鉄雄と阿蘭陀書房を開業し『ARS』を創刊するに至り巡礼詩社及び『地上巡礼』は発展的に解消された。

各号巻頭に掲げられた「巡礼詩社の言葉」には「敬虔なる地上巡礼の心を持ってわれらは遙か悲しき向上の一路を辿らむとす。(略)わがささやかなる正規は彌高く彌寂しきわれらが遍路の門出に言葉無くして立てたるただ一つの道標なり。」とあり、奥付頁の「正規」には「巡礼詩社は純一無垢なる日本詩歌の結社にして、深く芸術の精髓を究め、常に権威ある詩壇の新声たらんとするものなり。」と記す。詩歌を究める過程を弘法大師の修行道を巡拝する遍路に例え、信仰にも近い詩歌道精進の心得が提示された。

ここに集ったのは室生犀星、萩原朔太郎、矢野峰人、山村暮鳥を始めとする詩人たちと、齊藤茂吉、中村憲吉、島木赤彦ら『アララギ』の歌人たちであった。

③掲載号巻末「社報 加盟新社友」欄に特別社友諸氏の先頭に「久末淳(東京)」とある。

当時の『地上巡礼』にはタゴールの訳詩「ギタンチャリ三章」(第一巻三号)の翻訳者であり印度のウパニシャッド哲学を解説する『優波尼沙土』断章(第一巻四号)の作者・増野三良、「安居録」(第一巻四号)中「暗室の王」でタゴールの戯曲を、同中「印度神話」で神話の神々を解説した桑原隆人が寄稿者として名を連ねていた。

白秋の仏教的境地を描いた詩「寸金」・小品「梁塵秘抄より」・詩「白金独語」(いずれも創刊号)、詩「白金の独楽」(第一巻三号)等の作品が掲載される中、仏教的要素や印度学的要素は歓迎されていたようだ。

更に『地上巡礼』第二巻一号より版形・装丁が改まり、印度古畫「天上行楽」(表紙)「仏陀」(裏表紙)「舞踏」(挿絵)「摩耶」(扉絵)が用いられ、主宰者・白秋による印度の文物を嗜好する傾向は挿絵等視覚的媒体を通しても現れた。

(二) 作品の内容と考察

①の戯曲「キルウダカの叛逆」は、釈尊在世時代の印度憍薩羅国の青年太子毘盧擇迦を主人公とする。両親の帰依に基づき、仏教に一旦は帰依した太子が、青春の楽しみを奪われたこと、出生の秘密を知らされたことを理由に釈種への復讐心に燃え、釈種の滅亡を愛人の菴摩羅と共に企画する。仏伝に基づく戯曲である。

①の小品「PARLERIE」は、PとEとの対話形式の中で、Pが出会った彫刻家と共にアトリエと公園におかれた彫刻を見て回るといふ夢が語られる。

②の翻訳「SAKUNTALAの初演」は、E.P.Horwitzの*Indian Theater*（作中「梵劇概論」と久末は翻訳）から、毗訖羅摩阿迭多 Vikramaditya 王朝時代に印度鄔闍耶尼 Ujayani の宮廷劇場にて迦利陀沙 Kalidasa が莎君哆羅 Sakuntala を初めて上演した際の光景を翻訳したものである。

③の随筆「僧院尺牘」は、北原白秋宛書簡の形式をとり、その中で「放逸懶怠の仏弟子迦留陀夷尊者」に親近感を感じる若き僧「小納しょうのう（論者註 仏教用語で 一人称の私を意味する）」は老僧から湖畔の骨董店にある商品ではない「白玉の仏像」に恋するあまり、毎日舟で拝みに通うという話を聞き、その際の老僧の面持ちに De Regnier の小篇の表現を重ね合わせる。

イタリア動乱に対する Gabriele Dannunzio による憂国の詩や「戒因縁経」等の經典に描かれた迦留陀夷尊者に親近感を覚える理由など、文学的教養を有する僧侶の感慨が綴られた。

白秋の「東京景物詩 及其他」（大正二年七月）中「雨」にもその名前が登場するフランス象徴派詩人の Henri de Regnier や、「邪宗門」中「耽溺」に上田敏訳「楽声」を通して影響を及ぼした Gabriele Dannunzio への言及から、久末が白秋の詩に親しんでいたことが認められる。

この作品には直接的な印度表象は現れないが、仏教經典に仏弟子迦留陀夷尊者の記事を求めるといふ記述があり、印度表象の原典についての示唆があったと言えよう。

④の翻訳「梵劇概観」には、副題に「A.A.Macdonell『梵文学史』第拾三章に拠る。」とある。白秋が興じた阿蘭陀書房から出版された『印度文学講話』（松村武雄著 大正四年一〇月）にも「マクドネル氏」による印度文学評が度々記されるように、当時著名であったサンスクリット学者の Arthur Anthony Macdonell による *A History of Sanskrit Literature* の部分翻訳である。

Sakuntala を始めサンスクリット語の戯曲の解説が記される。稿末に「訳者の知れる梵劇研究の参考書」として H.H.Wilson: Select Specimens of the Theatre of the Hindus, 2 vols. London へ Sylvain Lévi: Theatre Indian. Paris, E.P.Horwitz: The Indian Theatre が挙げられた。

これらは久末の読書遍歴と作品の典拠を語る。

⑤の小説「黎明」は、狗尺那揭羅の婆羅門である須跋陀羅の悉達多喬答摩入涅槃直前の出家を描いた作品である。寂漠さをまぎらわすため酒色に溺れる須跋陀羅の甥のエピソードと対比的に悉達多の教えを聞く事ができた須跋陀羅の喜びが記された。

⑥の随筆「草菴閑窓」では、比叡山東塔無動谷を中心に秋の自然の様子と比叡山の靈蹟の由来や伝説、回峰行を解説し、そこで出会った人々との交流の様を描いた。

この随筆中ほどに、久末の古代印度に惹かれる理由が説明される。

「眞の芸術とは、眞純なる生命の漲り溢れて感激高潮に達し、現はさざらむと欲しても能はざるの時、絶妙無比の技巧を以て、些の余裕間隙なく勇猛精進之を表現したるを言ふなり。かかる時宗教的信念は自づと湧起りて、崇高莊嚴の靈氣期せずして其作品に満ち来るなり。されば宗教と芸術とはその根源に於て、同一不離のものにてあるなり。これ即ち、古代印度の宗教哲学美術文学がすべて渾然として融合調和し、差別分類すること甚だ難き所以なり。世界最高の文献たる彼の吠陀の諸聖典が幽玄なる哲学宗教の書となると共に、其の美しき讃頌の傑出せる韻文なるは言はずもがな、優婆尼沙土、梵書より深秘雄大なる大乘諸仏典に到りて益々此の感と深くすべく、之を美術の方面に見るに、希臘芸術の影響を蒙りて一新機軸を出したる犍陀羅佛教美術の崇敬礼拝すべき宗教的対象たると同時に、また不朽の芸術なること論を俟たず。」

以上から読み取れる久末の考えは次の通りである。一に眞の芸術には創作者の宗教的信念の発露が伴うので、崇高莊嚴の靈氣が自然と漂うものである。

二に宗教と芸術とはその根源が同一不離なので、古代印度の宗教哲学美術文学がすべて渾然として融合調和している。例えばヴェーダの聖典、ウパニシャッド書、大乘仏典は優れた宗教哲学書であると同時に優れた詩歌の文学書であり、ガンダーラ佛教美術は信仰対象であると同時に芸術作品であることが挙げられる。

⑦の小説「光触」は、仏弟子阿難陀の迷いと悟りを描いた作品である。祇園精舎を出た阿難陀はそこで出会った宝石工の老人による煩惱即生命との主張と法友である阿菟樓陀の死を覚悟しながら精進する姿、それぞれの思想に肯定すべき点を認め苦悩する。自分で解決しようとする内に、宝石工の姪である摩騰祇によつて愛欲に囚われて行く。破戒した罪惡觀と混乱から入水自殺を図る阿難陀の前に「煩惱のなかに生きよ。恋のなかに情のなかに、歡喜のなかに悦樂のなかに、争鬪のなかに憤怒のなかに、而して悔恨のなかに悲悩のなかに、汝は専念に生きねばならぬ。眞に生きるものは福なるかな。病魔が老衰が、汝の形骸を奪ひ去つても、生命に徹した靈は生きて居る。永遠に輝く者は汝の生命である。」と説く仏陀が現れ、悟りを得る。

煩惱即菩提を説く大乘仏典的な阿難陀伝を創作した。(一)⑦で示したようにこの作品は掲載された『三田文学』発禁処分によって結果的に未発表となった。

⑧の随筆「幽草幽花」は、『無憂宿日乗』抜萃」の副題をとる。⑥で提唱された宗教と芸術との融合⑦で提唱された「真に生きるもの」の思想的展開を見せた作品である。

冒頭に源空聖人の『漢語燈録』を掲げ「真に宗教に生くる者は、應て芸術に生くるものなり。聖人の法悦境は、単なる譬喩にはあらずして、芸術三昧に我を忘れたる詩人の心境と相照するものありて存するなきか。」と宗教と芸術の近似を説く。

さらに言語と思想の関係を西田幾多郎の言葉の中に考察し、翻訳の困難さに言及する。

印度文学史上、一大叙事詩として高く評価された馬鳴の佛所行讚經の他に、華嚴經法華經維摩經無量壽經等の大乘諸經典を宗教的天才による芸術的創作とし、大乘仏教の隆盛を哲学的思索、宗教的信仰だけでなく芸術の力に拠るものと位置づけた。

Jean Christophe の最後の一節「聖 Christophe は河を渡れり。」に關し、「人間性を離脱して枯木寒厳に生くる小乗的聖者の謂にはあらず。人間性の深秘に味刻して、『生は嬉しく死もまた嬉し』と、最後の沈黙に莞爾として微笑したる極めて大乘的なる第一義的風光の内容を指すなり。」と評した。ここにおいても大乘仏教への傾倒が窺える。

更に梨俱吠陀時代の印度古代民族が、太陽を蘇利耶とするなど畏怖心を元に自然現象を神格化し、吠陀神話を生成したことに触れ「純直素朴なる不断の驚異こそ、偉大なる芸術宗教を孕み、科学哲学を生める母胎」であるという。

最後に久末は、音楽芸術に言及し「豊なる芸術的教養あり音楽に対する深き愛と理解とを有する人が、優秀なる音楽に恍惚たる時、時間空間因果の繫縛を離れたる先験的世界に於て、彼の心と音楽とは融合して唯一無二のものとなるなり。象徴の第一義、芸術的表現の究極は茲に存す。」と、その象徴主義における重要性を主張する。

⑨の小説「宝蔵秘夢」は、「A Fairy tale.」との副題を有する未完の作品である。未完であるために、作品冒頭に描かれた王妃の見た不思議な夢の謎は解かれない。

音楽で王家に代々仕える家の娘であった王妃は父の犯した殺人罪を赦すよう香陰国王に訴え、聞き入れられた代りに王へ嫁ぐ。献身的な王へ心許すことができない王妃は、祖父の代より家に伝わる天才的音楽家に相応しい七絃の豎琴を取り出し弾き始める。すると、日没の金色の日光を受けて水平線上に銀色の蓮華と金色の蓮華を帆に掲げた白黒二槽の船が現れ、それぞれ炎を蓮から吐いていた帆布は一つとなり大紅蓮となる幻が現れる。

⑧における音楽の魅力を表現した「静謐なる黄昏の薄明のなかに、瞑目しつつ低聲に諷誦し来る時、朦朧として髣髴するは螺鈿の光彩眩き衣装を着し、寶石の如き瞳を輝かしつつ常に舞踏するが如く澁澗たる、熱帯地方の妖艶なる美女なり。」という記述を小説の中に表したような、⑨の王妃について「極めて敏捷に絃の上を走る、真珠の爪を並べた繊麗な指先に、不可思議な魔力が籠つて、指先が絃か絃が指先か、琴が彼女か彼女が琴か、縹緲たる生命の韻律が、真実無碍に歎歎して居た。乱れるがままにまかせて、半身を蔽ふばかり豊かな緑髪は、純情の波動に極めて繊細に顫へて居る。端嚴な麗容に恋に酔う処女のやうな嬌羞と度しい歎びを漂はせ、聖者の心をも蕩かすやうな蠱惑的の輝きを帯びた黒瞳を睜り比丘尼のやうな白衣の裳裾を長々と絨毯の上に曳いて落日の金光を斜に浴びた凄艶な立姿は、塵寰を遠く離れた深山の奥に住む妖しき麗姫のやうである。」という描写が認められる。

⑨は⑧での主張の具体的な作品化と言つても良いだろう。

(三) まとめ

(二)で確認した久末の印度表象が現れた作品は、作品の設定及び作品内容の観点で、①戯曲「キルウダカの叛逆」②「SAKUNTALAの初演」④翻訳「梵劇概観」⑤小説「黎明」⑦小説「光触」⑨小説「宝蔵秘夢」であった。

更に印度哲学や印度学に言及したという意味では、③随筆「僧院尺牘」⑥随筆「草菴閑窓」⑧随筆「幽草幽花」も印度表象が現れた作品に該当する。

これらの作品の典拠として、E.P.Horowitzの*Indian Theater*、Arthur Anthony Macdonellの*A History of Sanskrit Literature*、H.H.Wilsonの*Select Specimens of the Theatre of the Hindus*、Sylvain Leviの*Theatre Indian*、Jean Christopheの*戒因縁経*、佛所行讚経、華嚴経、法華経、維摩経、無量寿経、源空聖人の『漢語燈録』、ヴェーダの聖典、ウパニシャッド書が挙げられる。

久末が原始仏教と古代印度に関心を示した理由として、一つに「古代印度の宗教哲学美術文学がすべて渾然として融合調和し、差別分類すること甚だ難き所」、二つに吠陀神話を生成した印度古代民族に「純直素朴なる不断の驚異こそ、偉大なる芸術宗教を孕み、科学哲学を生める母胎」を認めたことが挙げられよう。

久末の文学が、近代の仏教文学として成立し得るか否かに関して、久末が浄土真宗の寺族に生れたことを背景に、原始仏教の考えに則り人間性を深く考察したことを考えると、成立し得たと考えられよう。

(一)⑧の作品における、大乘諸經典を宗教的天才による芸術的創作とする考えと、「人間性を離脱して枯木寒巖に生くる小乗的聖者の謂にはあらず。人間性の深秘に味刻して、『生は嬉しく死もまた嬉し』と、最後の沈黙に莞爾として微笑したる極めて大乘的なる第一義的風光の内容を指すなり。」とこうJean Christopheの最後に関わる言及から、大乘仏教に心惹かれていた事が分かる。

(二)⑦の作品中の阿難陀の迷いには、小乗仏教的生き方対大乘仏教的生き方の対立構造が認められる。釋尊の会話中の「煩惱のなかに生きよ。恋のなかに情のなかに、歡喜のなかに悦樂のなかに、争鬪のなかに憤怒のなかに、而して悔恨のなかに悲惱のなかに、汝は専念に生きねばならぬ。真に生きるものは福なるかな。病魔が老衰が、汝の形骸を奪ひ去つても、生命に徹した靈は生きて居る。永遠に輝く者は汝の生命である。」という徹底した生の肯定に、久末は行きついた。原始仏教をフィクションナルに描こうとした久末の意図があつたと考えられる。

後記 「SAKUNTALAの初演」(『三田文学』第四卷一二号、大正二年一二月、三田文学会) をご教示くださった堀部功夫先生と久末淳氏の蔵書調査をご許可くださったご令息久末純美氏に深謝申し上げます。

註

- 1、「近代日本の文学と仏教」『岩波講座 日本文学と仏教 第十卷 近代文学と仏教』岩波書店、平成七年五月
- 2、『求道者と認識者』新潮社、昭和三七年一月
- 3、「中勘助の『犬』の典拠に関する一考察」『小田原女子短期大学研究紀要』平成二三年三月
- 4、『解釈』平成一三年二月
- 5、『文芸研究』二二集 昭和三十一年一月
- 6、『国際啄木学会 東京支部会報』一五号 平成一九年四月
- 7、『日本研究』二三号 平成一三年三月
- 8、「私達一家が最も貧困を極めた時、私がまた非常な懷疑に囚はれてゐた時、突然幼児の死に逢つて、筆を執つて私の妻に与へたものであつた。『仏陀と幼児の死』序文
- 9、久末純美・則武三雄、照巖寺北荘文庫、昭和四四年八月

10. 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第一卷、講談社、昭和五二年二月「小沢愛園おざわよしくに」の項目より要約（明治二〇年沼津市香貫に生誕。演劇研究家。明治四四年慶応義塾文学科卒。人形芝居の研究家として著名。
11. 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』第五卷、講談社、昭和五二年一月「三田文学」の項目より

第二部 インド三部作論

第一章 「提婆達多」

中勘助の『提婆達多』の初版は大正一〇年五月一日新潮社版であり、これが中勘助の作家として初めての単行本出版となった。(以下、本論では昭和一二年に出版された岩波書店版と区別する場合にのみ、新潮社版と略称する。) 脱稿日は大正九年四月一七日と稿末に記されている。実際は、大正一〇年五月四日付和辻照子宛書簡にて『提婆達多』は多分来月十日頃にならうかと思えます」と六月十日ごろの出版であったことが推測される。「著想は『銀の匙』と同じ頃かと思ふが古い事で記憶に自信がない。著筆は『銀の匙』発表の後である」と角川書店版『中勘助全集』第二巻「あとがき」において中勘助が記すように、「銀の匙」後篇脱稿(大正三年一〇月)から約六年経過後、満を持って発表された作品である。

一 「提婆達多」における仏伝

中勘助が、度重なる寺社への仮寓と、和辻哲郎・宇井伯寿との交流によって、経典と印度哲学関連資料に触れていたことは既に拙稿^{註1}において指摘した通りである。中勘助は新潮社版巻末に参考資料として経典三一種と印度哲学書及び仏教書一五冊を挙げた。「提婆達多」に関する先行論文の中で、堀部功夫^{註2}は、小説の前篇三十、後篇五の場面と参考資料との対応関係を考察した。

本論では、新潮社版の表紙カバー写真の解説、和辻による「提婆達多」評再読、作者自筆書き入れ本の内容の確認を通して、「提婆達多」における仏伝の位置づけを探る。中勘助によって参考資料に挙げられ「提婆達多」本文への大きな影響が認められる『仏弟子傳』(山邊習學著 大ニ・四 無我山房)における表現と比較し、中勘助の創作内容とその意図を考察したい。

(一) 表紙カバー写真解説

新潮社版巻末の参考資料に掲げられた資料との対比により、表紙カバー写真は、堀謙徳編『美術上の釈迦』^{註3}の口絵「印度バルフト仏塔彫刻(西暦紀元前第三世紀作品)」と「T.W.RHYS DAVIDSのBUDDHIST INDIA p.99 Fig.23 ANATHA PINDIKAS GIFT OF THE JETAVANA PARKからの引用であることがわかる。前書の写真は、一七五ページに再掲された際の注

記及び巻末「引用書類」によると Alexander Cunningham *The Stupa of Bharhut* Pl. 57 から取られたという。

両書の解説にもあるように、このレリーフは、須達多長者が仏陀の教団に祇園精舎を建立寄進した物語を表わしている。その物語を次に記す。

須達多長者が祇多太子の所有地を購入し教団に寄進しようとしたところ、祇多太子はその土地一面に黄金を敷き詰めることができたならばその黄金と引き換えに売ることを条件とし、須達多長者はそれを受け入れ寄進を果たした。レリーフ中央の急須状の瓶を持つ人物が須達多長者であり、瓶の水によって精舎献納の儀式を行う場面である。中央下の人物は、長者の商売における支配人であり、牛車によって運搬した金貨を計算し、横向きの従僕四人に四角い金貨を土地に敷き詰めさせている。レリーフ左側の合掌する人物は、臣下を従えた祇多太子である。

このレリーフにおける仏陀の不在を、中村元は「支配人の左側に玉垣でかこった菩提樹が見えるが、それは、釈尊の存在を暗示しているのである。これも、当時仏像のなかったことを示す。」^{註4}と説明する。

中勘助は、交流のあった和辻による「インドの古芸術と仏像の出現」(『思潮』大七年五月号掲載)^{註5}の受容を通して、中村が示したと同様の理解を得ていたと推測される。

その論文における、バルフトのレリーフに関する和辻の主張は左記の通りである。

仏陀伽耶やバルハットの石欄には奇古な手法を以て、神話的な仏伝や本生譚が浮き彫りにせられている。それは經典が芸術製作の目的を以て造られたのではないと同じく、純粹に裝飾の目的で造られたものではない。ただ言葉によって仏の奇蹟を物語る代わりに、図像を以て物語ろうとしたに過ぎぬ。従って、經典が文学的作品として有するような欠点は、浮き彫りの作品にも同様に認められる。即ち物語ろうとする材料に圧迫せられて、その材料のより深い把握や、それを表現する形の美を閑却していることである。(中略)

仏陀の像は經典の内には詳細に描写せられている。しかしバルハット等の浮き彫りの仏伝には、決してその姿を現わさない。菩提樹下、金剛座上、帝釈窟内、——すべて仏陀の像の収まるべき所には意味ありげに、何物も刻まれていない。それはなにゆえであるか。(中略) 初期仏身観に一つの解案を求めてみよう。ここでは肉身滅すれども法身存すという思想が力説せられている。法身とは法を以て身とするものの意で、釈迦の姿は新しくこの具体的な形において認められるのである。即ち肉

身の代わりに法身を置き換えることが当時の説教者の関心事であった。人々は色相によらずして法身仏を見ることを教えられた。仏伝の浮き彫りを見る時にも仏の像のみは心中に幻の如く思い浮かべて、自ら凶像の欠けたる所を補わなくてはならなかったのである。

引用前半において、仏伝をテーマにした文学作品及びバルフトの浮き彫りには、経典理解の浅さと表現様式における美の欠如が共通するという、和辻の芸術論が表された。後半において和辻は、バルフトの浮き彫りに仏陀の姿がない理由として、当時の仏身観を挙げ、見る人が心中に仏像を想像して凶像を完成させたことを指摘する。

なお、「提婆達多」中、このレリーフが由来を伝えるところの祇園精舎が登場する場面は二か所ある。その一方は、後篇一、提婆達多の出家後の生活に言及した場面で「彼が日々の行乞から帰るにあたって彼をまつところのものは、よしそれが祇園精舎や竹林精舎のごとき宏壮なる精舎であつたにせよ、些の温みも潤ひもないただの空室であつた。」とあり、他方は、後篇三、仏陀の教団の遊行生活の場に言及した場面で「それらの止住地のうちには摩伽陀の竹林、憍薩羅の逝多林に於けるごとき宏壮なる精舎もあつた。実にこの二つは仏陀が生涯幾十の雨期の最も多くを過したところであつたであろう。これらの苑林は大都城の郊外にあつて市中の塵煙に遠ざかり、閑雅寂静にして修道に好適の地であつた。そこにはいろいろの蓮華花さき、檬果樹はかをり、棕櫚はそよぎ、竹葉は翠をしたたらす。そしてひとたび仏陀の足をとどむるところ、貴賤僧俗のわかちなく皆この大聖をしたひて来り集り、また招待供養をした。」とある。

新潮社版では論者傍線箇所「祇園精舎」及び「逝多林」に「ぢえーたわな」と振り仮名が振られており、それより参考資料 *BUDDHIST INDIA* に記載された元来の土地の所有者であつた祇多太子の英語名 *JETAVANA* の読みを祇園精舎の振り仮名に採用したと考えられる。

またいずれも竹林精舎と並ぶ「宏壮なる精舎」として描写され、祇園精舎そのものが「提婆達多」中、大きな意味を持つとは考えにくい。しかし、その一方で祇園精舎同様、仏陀が雨安居をした耆婆伽の菴没羅園が後篇に登場し、阿闍多設咄路の悉達多との初対面の場面（後篇二十五・二十六）と結末場面（後篇三十一・三十二）の背景となっている。結末において、菴没羅園で釈迦の教団が自恣を行っている傍ら、提婆達多は同園の菩提樹下で入寂しその死に救いがあると中勘助は解説している。

これより中勘助は、祇園精舎だけではなく仏伝に頻繁に登場する精舎全般と、菩提樹下にしかるべき人物が描かれないという仏

伝レリーフの方法に興味を抱き、「印度バルフト仏塔彫刻」を表紙カバー写真に選んだと考えられる。

(二) 和辻哲郎「提婆達多」の作者に」再読

渡辺外喜三郎^{註6}によって昭和四一年までの「提婆達多」評は整理され、提婆達多を中勘助自身と見るか否か、結末に記された解説の意味、提婆達多の嫉妬と人間性、がしばしば論じられてきた。

ここでは同時代評として当中勘助と交流が深かった和辻の評を再読したい。『読売新聞』大正一〇年六月二日から二三日まで、三回に亘って連載された和辻による同時代評「提婆達多」の作者に^{註7}は、中勘助が書簡において、同評で指摘された欠点に関し回答していることから、作品の構想とテーマを探究する際、言及を避けられない重要な評となっている。

和辻が賞賛した点は、力強くかつ詩的な文体、部分としては古代インドの自然や生活の描写、人間の感覚的な描写の中からそこに動いている人間の心が浮かび上がる描写、全体としては題材の正面から取り扱う姿勢、提婆達多と当時の民衆の立場から悉達多を外面的に描く方法、全体の構図、前篇後篇の結末であった。

中でも和辻の絶賛は、耶輸陀羅の描写に集中する。「ことに耶輸陀羅姫の描写に至っては実に敬服の至りです。君は姫の頸や手に巻いている真珠の感触を教えてくれる。その小さな臍の下の薄赤い玉珮のあとを教えてくれる。ほどよく温んだインドの水が姫の肌と髪をひたしている心持ちを教えてくれる。」「王族の一切の奢侈やその感覚的な陶醉が、畢竟耶輸陀羅姫の恋心を浮き彫りにする。ことに美しく描かれたのは、家を出た悉達多太子を恋慕うて宮殿の望楼にのぼり、そこからインドの平野をのぞんで泣きくずれている耶輸陀羅姫、―仏陀となった悉達多が昔の都城に帰ってくると聞いて、夜もすがらひとり子を愛撫して泣いている耶輸陀羅姫、―そこにはほとんど心理描写はなくして、しかも姫の心が底まで表されている」「作者が騒がずに落ちついて描いた耶輸陀羅姫の最後は、恐らく篇中の白眉でしょう。」

不満足な点としては、後篇の阿闍多説咄路挿話と全体とのバランス、作者が提婆達多の視点からその行動原理を表した「復讐」という言葉と、実際に作者によって描かれた提婆達多の行動原理との齟齬の二点が挙げられた。

和辻宛、中勘助による大正一〇年六月二四日付書簡から、「阿闍世に付ては提婆達多に著手する前に独立したものとて書かうといふ気があつたので、私の頭の中では自然已成の別物をくつつける様な具合になつたからです。小宮はあまり力こぶを入れすぎて他との調和がとれないといつてきたのでした。がそれはさうしなければ私の虫が納まらなかつたのです。特にその当時の私の気持ちでは。」と、「提婆達多」構想前に独立して阿闍多設咄路の話が構想されていたこと、中勘助には強調してその話を書きたいという強い思いがあつたことが分かる。本論では、和辻が賞賛した耶輸陀羅の描写と中勘助が固執した阿闍多設咄路の挿話を手掛かりに「提婆達多」における仏伝の位置づけを考えたい。

(三) 耶輸陀羅の描写

① 作者書き入れ本より

『銀の匙』改訂版に関する拙稿^註において、中勘助は「末子様」宛献呈本に書き入れを加え、作品の改訂に繋げていた仮説を示した。

その『銀の匙』と同様に、「末子様」との献呈相手名と「中」という作者名が内表紙に記されている新潮社版の第六版(大一一・三・二五)には、三か所書き入れ箇所(47頁 別表1)がある。いずれも赤色鉛筆による傍線である。

書き入れ箇所の内容を要約すると、別表1①の箇所は、悉達多による耶輸陀羅への愛を耶輸陀羅の視点から形容した表現、②は、羅睺羅の外見に悉達多との類似点を無理に重ねて見ようとする耶輸陀羅の悉達多を恋慕する心理表現、③は不倫を行う耶輸陀羅による悉達多への罪悪感の表現、である。

この書き入れ箇所から推測されるのは、中勘助は耶輸陀羅の心理描写に重きをおいて、改訂の思案を巡らせていたという事である。この傍線箇所は、夫である悉達多に捨てられた悲嘆にくれる妻として、提婆達多との恋愛関係と世間的な立場との間で煩悶する女として、設定されている。

ここに新しい耶輸陀羅像を認め、一女性として描かれた耶輸陀羅の意味を考えたい。

② 悉達多、耶輸陀羅、提婆達多の三角関係に言及した仏伝等

悉達多、耶輸陀羅、提婆達多の三角関係に言及する仏伝及び仏伝に基づいた文学は、「提婆達多」以前にも存在する。

『仏弟子傳』「第二十二提婆達多傳」には、『根本説一切有部毘奈耶出来事』と Rockhill による『西藏仏傳』*The Life of Buddha* に基づく左のような説が紹介されている。

更に傳ふる所によれば、彼（論者註 提婆達多）は沙門として最勝者になることが出来ないのを見て、今度は方向を轉じて迦毗羅城に行き、再び俗に還りて其国を支配せんことを企てた。彼は先ず妃耶輸多羅を口説き落して己の室になさんと思つた。さすれば幾分なりとも釋尊に對する怨を霽すことも出来る道理である。

この時恰も釋種の人々は、王妃耶輸多羅を王位に即けたいといふ希望をもつてゐた。提婆は之を聞いて、直に耶妃を訪れて、彼女の手を執り、共に一国を支配しやうではないかと、云うた。耶妃は驚き瞋りて提婆の手を振り拂ひ「妾の夫は只一人在はします。家にゐては四天下を領する人、今は出家して如来世尊となつてゐらせらるる。汝の如き愚の無頼漢は、手を触れるだにけがらはし」と女の一念、流石の提婆を地上に投げたといふことである。

三井光彌は『独逸文学に於ける仏陀及び仏教』^註において、二〇世紀初頭のドイツにおいて成立した、悉達多・提婆達多・耶輸陀羅の三角関係を描いた戯曲を紹介した。仏伝の歌劇化を果たしたマックス・フォークグリヒの『仏陀』（明三四）の特徴に言及した際、中勘助の「提婆達多」にも次のように触れている。但し、前出の渡辺が整理した「提婆達多」評の中で三井の論は触れられなかった。

この曲に於て最も注意すべき作者の働きは、仏陀の従弟デーヴァダッタを讐役として登場せしめ、これに重大な役割を演ぜしめたことである。仏伝に於ては単に仏陀の法敵である彼をして、ヤシヨードラに對する熱烈な横恋慕に燃え立たせ、仏陀との間に一種の三角関係を形成する事によつて劇的葛藤を作らうとする技巧は、この次のゲレロプの『覺者の妻』の先驅をなす

ものである。我が国では、中勘助氏の小説「提婆達多」（大正九年）^{マヤ}が、デーヴアの熱烈執拗を極むる愛と嫉妬と復讐心を心理的に描写し、深刻を極めてゐる。

このように『根本説一切有部毘奈耶出家事』と『西藏伝』だけでなく、仏伝に着想を得たマックス・フォアグリヒの『仏陀』及びカール・グレロプの『覚者の妻』等、耶輸陀羅を主たる登場人物に置き耶輸陀羅と提婆達多との関係を描いたものは珍しくなかった。

しかし、これらの作品では、耶輸陀羅は提婆達多の目的を知り提婆達多を拒み仏陀に帰依するという結末を迎える。この点で中勘助の耶輸陀羅像と大きく異なる。

③ 中勘助による独創的耶輸陀羅像

『仏弟子傳』「第八羅睺羅傳」に「普通の人間生活の上から云へば耶輸陀羅姫ほど悲惨の女性は少ないと云はねばならぬ。夫にも棄てられ、子にも見離され、身は寄邊なき孤独を守らねばならぬ。そしてこの不幸を持ち来した者は誰であるかと云へば、大聖釋尊に帰せねばならぬ。これが一般の人情である。」とあるように、従来、捨てられた悉達多の妻、羅睺羅の母として無性格に描かれてきたのとは対照的に、和辻も指摘したように「提婆達多」における耶輸陀羅は、自分のもとを去った夫を恋慕するあまり子どもを溺愛する貞節と慈愛にあふれた若妻、母親として、一旦、提婆達多の情人となつては愛人との逢瀬に胸をときめかす生き生きとした女性として描かれた。

この設定が男女間と親子間の愛の相違に言及するために必要だったことが、左記作品中の引用から分かる。

親の愛、子の愛、それはいかに深くとも異性に對する愛とは本質的にちがつたものである。そして此は彼を代償し得るとも彼は此を代償することができない。そこに消しがたい悲があつた。寂寥があつた。空虚があつた。そしてそれがまた一層彼女の心を愛人の形見にして二人の愛の結晶なる羅睺羅に對する溺愛に轉ぜしめた。（中略）『提婆達多、このまあ口もとをごらんなさい。悉達多に生きうつしではありませんか。そしてこの小さな耳朵の形は私に似てはゐませんか』羅睺羅は母そのまま

父の倂などは微塵もなかった。それにもかかはらず彼女は無理にもそこに悉達多を見出さうとした。といふよりは寧ろ拵へてみた。

『いつまでもみすてずに：私はもうなにもかもすててしまったのですもの：』（中略）ただかやうな恋がしたならば凡てのものは理不尽に彼女を棄てるであらう。恐らくは羅睺羅さへも。彼女はそれを思ふだけでもたまらなかつた。彼女はあらゆる周囲の不興と敵意に身をさらすのかと思へばなんともいへぬ寂しい情ない気持がした。そしてさう思へば思ふほど生憎に提婆達多が恋しかつた。今や彼は彼女の頼みうる唯一の凡てのものであつた。彼女の恋は命がけであつた。

以上より、男女間の愛情の欠損を子どもへの溺愛で補おうとする努力空しく、子どもを捨てる覚悟と命を賭けた提婆達多との恋愛に陥っていった耶輸陀羅の恋の必然性が説明された。作者は、耶輸陀羅の人生において異性への愛情を母性愛より上に置き、魅力的な異性との恋に生きる意味を見出す女性像を描こうとしていたことがわかる。

次に耶輸陀羅の死に付与された意味について考察したい。

自刃という行動が意志的である半面、耶輸陀羅の死に至る心理描写はなく、「貞操に関する因襲的思想と恋との二つの手に引き裂かれた」という作者によるその解説のみにその理由が記された。その細かな心理は、その前日前夜の「耶輸陀羅はこの日片時も羅睺羅をなさず終日部屋に閉ぢこもつて誰にも顔をあはさなかつた。（中略）彼女はひと夜を羅睺羅の寝顔をうちまもりつつ泣き明した」という行動と、翌朝「この時、迦毗羅婆蘇都の市民たちは、摩伽陀の大王をしも跪かしめたる人の、鉢を持し、目を伏せ、黙然として佇みつつ、家より家へと食を乞ひ歩くのを見た。この耶輸陀羅もまた宮殿の窓を開き、涙にくれる眼をもつて、さがなき羅睺羅の怪訝を受けつつその姿を見守つた。」という行動、釋尊帰城の折、羅睺羅に「お弟子にしてください。お弟子にしてください。」と仏陀の法衣にすがつて言うよう教えた行動のみから、推測するほかない。

耶輸陀羅が一乞食僧となった悉達多に羅睺羅を託すことは、さながら羅睺羅も同じ乞食僧にさせることである。客観的にはこれを母として子の幸せを願う行為として考え難いが、王城での生活より出家を選んだ悉達多の生き方を耶輸陀羅が認めたと理解されよう。これより母としての責任を果たすと同時に一女性としての人生を自らの意志によって終結させるという中勘助の設定が認められる。

既出の『仏弟子傳』における耶輸陀羅は次のような人生を送る。

帰城の折、羅睺羅に父である釋尊から、眼に見えない遺産をもらうように伝え、釋尊の後を追い出家する羅睺羅を見送る。羅睺羅を失った耶輸陀羅は釋尊の教えに触れ、容易に無執着の法味を味わうことは出来なかったが、終には羅睺羅の後を追い出家する。

「提婆達多」では、釋尊の教えに触れることなく、自らの生を絶つところに耶輸陀羅の罪の意識の重さが浮き彫りにされた。そこに、「提婆達多」後篇の阿闍多設咄路の挿話において親子間の愛と男女間の愛との相違が説明される際に言及される罪悪や嫌悪など悪感情との共通性が認められる。

(四) 提婆達多の最期

小宮豊隆(「解説」角川文庫版『菩提樹の蔭・提婆達多』、昭和二七年三月)、河盛好蔵(「解説 中勘助集」『中勘助 内田百閒集』、筑摩書房、昭和三二年六月)によって指摘が重ねられている通り、小説前篇における耶輸陀羅の役割として「彼女はこの悪病に悩める者に、姉妹となり、母となり、凡のものとなった。日は耀いた。提婆達多は生れた。彼女は餓ゑたる彼に醍醐となり、生の力となった。」と提婆達多を新生させる力と、提婆達多に改心の機縁をもたらす誠実な愛を与えたことが挙げられる。

後篇における提婆達多の回想の中にも耶輸陀羅は登場する。先人による指摘は未見だが、その中で特に重要な役割を果たすと考える後篇二十九の引用を左に記す。

彼(論者注 提婆達多)の渴愛する凡てが彼を見棄て、今や命までが彼を見棄てんとしてゐるこの絶体絶命の時にあたつて、提婆達多が恋うてやまぬところはものは耶輸陀羅であつた。(中略)

「耶輸陀羅よ、卿は私を置いて何処へ行つた」

彼は彼女が何処へ行つたかを知らない。はた己が何処へ行くかをも知らない。

かかる苦悩のうちに彼の命は燈火の明滅するが如くにしてやうやく終りに近づいてきた。彼は愈決心した。

「私は決して悉達多にひとり勝利者の日を楽ませはせぬ」(中略)

「私は悉達多に告別のため明日早暁曷羅闍姑利晒へ行く。轎の用意をしておくやうに」(中略)

提婆達多は人目をぬすんで手ばやく剃刀を法衣のしたにかくした。彼は三閻達多と瞿利迦にたすけられてからうじて立ちあがった。そしてうす暗い燭火に照されたみすばらしい部屋——それはこの時までも恐しい火宅であったところの——に最後の一瞥を与へたのち、蹠きながら戸口のはうへ力ない足をはこんだ。轎夫のもつ炬火の光をうけて病みほうけたその顔がまつかに見えた。彼は轎に乗らうとした。

「提婆達多」

提婆達多はよろよろとした。そして死人のやうな顔をして何物かを捜すやうに庵室のなかを凝視した。彼は悄然として轎にのせられた。それは忘れもせぬ耶輸陀羅の声であつた。

以上は、提婆達多が悉達多を殺害する意図をもつて告別の旅に出かける折、既に亡くなった耶輸陀羅が自分の名を呼ぶ声を聞く。提婆達多が耶輸陀羅の声に気づき姿を捜す行為のみ描かれ、その声をどのように受け止めたのかに関する心理描写はないが、耶輸陀羅が提婆達多を見守っていることが暗示された。地上にあつて提婆達多に良心と誠実を教えた耶輸陀羅の無私の愛が、天上的な愛に昇華したことを示す場面と言えよう。

この場面があるため、結末における提婆達多の末期の描写とその解説、「彼は水を呼ぼうとしたがすでに遅かつた。彼はひとつふたつ魚のやうに喘いだ。そして苦しい長い一生をへた。もしそこに我々に救があるならば、提婆達多こそまことに救はれるであろう。提婆達多が救はれずば、我々の誰が救はれるであろうか。」という中の表現は生きてくる。

昭和四〇年春、川路重之氏がこの箇所について悪人正機説に基づいた解釈を認め、中勘助に書簡を送つたところ「そうではありません。あれは、あのまま読まなくてはいけません」という内容の返書があつたという。^{註10}

問題箇所を素直に読めば、作者を含む一般の凡夫と提婆達多にとって一切の悩みから解放される死が救だということになる。川路氏は「それでは、彼が救われる理由はどこに求められるか。耶輸陀羅への『愛』ゆえと考えることもできる。」と述べる。死に際して尚、提婆達多が求めてやまぬ、天上の愛で提婆達多の魂を見守る、聖母的な耶輸陀羅の存在が、川路氏を始め私たちをして提婆達多に共感させる要因となっているのは確かである。

提婆達多最期の場面の時代設定は、耆婆伽の菴没羅園にて、雨安居最終日の七月一五日、釋尊と千二百五十人の比丘が身口意の所作における過ちを確認し合う受歳を行った時のことである。後篇三十において次に掲げる釋尊と比丘を称える偈文によって場面は最

高潮を迎える。

浄き十五日の日

集るもの千二百

煩惱の岸べをはなれ

生死の海をこえぬ

世尊は大導師

如来は大船頭

慈悲の御手をのべて

あまねく衆生を度したまふ

千二百五十人

みなこれ真仏子

よく愛慾の刺を断ち

みづから歸命し奉る

これは、『仏弟子傳』『第五舍利弗傳』中「自恣の一日」に記載された左記の詩から着想されたと分かる。同書によると「雑阿含經」第四五、「増一阿含經」第二四の竹林精舎における自恣の聖日を教団唯一の詩人婆耆舎が詠んだ詩と解説されている。

清浄き十五日の日

集るもの五百人

みな煩惱の汚れを離れ

廣き解脱を獲て

生死の縛は已に絶えぬ。

五蓋の雲はれて
愛慾の刺なく
林中の師子王の如く
畏るものはなし。
有漏の敵を拂ひ
有為の境も越えぬ。
かの輪王の眷属を奈懷ふ如く
慈心廣く世を愍みて
海内の人盡く歸しぬ。
ああ無上の導師
眞の法王子
三明圓にして
老死の悩みなく
輪廻の患なき
聖衆を敬禮し奉る。

中勘助の詩文の方が短く内容にまとまりがあり意味が分かりやすい。

この詩文に詠まれた釋尊の教団の教えが、直前の章、後篇二十九における提婆達多の悉達多への嫉妬と瞋恚、耶輸陀羅への愛慕の心と対照的であることがわかる。煩惱と愛慾を絶つことのできない提婆達多が教団にとって仏陀の教えから外れた異端であったことが強調される場面の配置である。

(五) 阿闍多設咄路の挿話

①肉親への愛憎というテーマ

『仏弟子傳』「第二十二提婆達多傳」における阿闍多設咄路の逸話を要約すると、次のようになる。

提婆達多に唆された阿闍多設咄路は、父王頻毗娑羅を退位させ、王位を揺るぎないものにすべく餓死させようと幽閉した。愛児優陀耶の指先にできた腫物の治療を機に、愛児に対する自分の愛と父王による自分への愛に違いがないことに気づき、罪のない父王を死に至らしめた罪悪感に苦しんだ。この時、忠臣耆婆伽の勧めで、耆婆伽の菴沒羅園にて雨安居中の仏陀に面会し、懺悔し帰依した。これによって、提婆達多の教団は最後の援護者を失った。

小説では、子供を巡る価値観の違いを巡って、阿闍多設咄路と頻毗娑羅は対峙し、緊迫感溢れる対話が繰り広げられる。頻毗娑羅は親の立場から、子供を夫婦の愛情の記念物、所有物として説明し、親の恩を掲げて阿闍多設咄路に改心を迫った。

それに対し、阿闍多設咄路は子供の立場として独立した人格として扱われる正当性を挙げ、頻毗娑羅と耆提希夫人間の性慾行為の記念物として自身が生の苦痛を感じていることを説明した。

しかし、その一方で阿闍多設咄路は自分の妻子に対して父王への説明に用いた思想感情を適用することができない矛盾を感じている。つまり優陀耶跋陀羅を自分と夫人との性慾行為の最初の貴い記念物として認めることができないのである。また、同時に両親に対する情愛を自覚しているのである。以上のように「肉親愛に対する否定的意思と肯定的感情が烈しく対立する」構図の中、論理的思弁において自らの矛盾に悩んでいる点が、中勘助による阿闍多設咄路像の独創である。

そして、釋尊への帰依も「彼を苦しめたところの矛盾は仏陀の教誡によつてすこしも解かれはしなかった。ただ、その矛盾をそのままに彼をして人の子の常道にかへらせたものは仏陀の偉大なる人格の力であつた。」と、帰依してもなお、阿闍多設咄路の矛盾は解消できなかったことが示された。

②テーマ設定の背景

阿闍多設咄路は両親からの愛情に対する報恩を説く頻毗娑羅へ「私はさやうな情愛に対して深い厭悪と軽蔑とを抱かざるを得ない。最後に、私は見られるとほり現世の幸福を擅にし得る境涯にあり、現に存分それに耽溺してゐる。それにもかかはらず私はいかにしてもうち消すことのできぬ生の苦痛を覚える。私は生を呪ふ。飽くまでも呪ふ」と厭世的な心境を吐露する。これは、前作『銀の匙』と日記体随筆「孟宗の蔭」の次のような記述と重なる。

私は学校へあがってから「孝行」という言葉をきかされたことは百万遍にもなつたろう。さりながら彼らの孝道は畢竟かくのごとくに生を享け、かくのごとくに生をつづけることをもつて無上の幸福とする感謝のうえにおかれている。そんなものが私のように既にはやく生苦の味をおぼえはじめた子供にとつてなんの権威があるうか。私はどうかしてよく訳がききたいと思ひある時みんなが悪性の腫物のように触れることを憚つて頭から鵜呑みにしている孝行についてこんな質問をした。

「先生、人はなぜ孝行しなければならぬんです」
先生は眼を丸くしたが

「おなかのへつた時ごはんがたべられるのも、あんばいの悪い時お菓ののめるのも。みんなお父様やお母様のおかげです」という。私

「でも僕はそんなに生きてたいとは思いません」

『銀の匙』後篇一〇

私は絶えず「自殺」と「出家」を思つてゐる

〔孟宗の蔭〕大正三年六月二六日付け文章より

以上のような自己の生を否定する表現が、中勘助の文学には多く表れる。後者の引用からは、自殺と出家が中勘助の関心事であり、「提婆達多」でこれらが扱われたことには深い意図があるとわかる。兄との不和を中心とする中勘助の伝記的問題と関連して厭世感を解説する先行論文が多く認められる中、中勘助の心的傾向の反映として、阿闍多設咄路の挿話にも厭世感が色濃く表れたと考えることが自然であろう。

(六) まとめ

一度は仏陀の教団で悟りを求めたものの、五慾に迷い嫉妬に苦しむ我執の人・提婆達多、そこに中勘助は人間の本性を、普遍的人間性を重ね合わせ観た。提婆達多の心が悉達多と悪念という内外の敵に敗れていく過程において、死は悪念を停止させる救いとして

描かれた。その救いは悉達多の教えによる救いではない。自然の摂理による救いである。「提婆達多」では、耶輸陀羅も仏陀の救いからもれた人として描かれる。新潮社版表紙カバー写真であるバルフトの浮き彫りには、女性が登場しない。当時のインド社会において布施の基となる経済や政治を司っていたのが男性に限られたからであろう。仏陀の救いや慈悲から遠い人の象徴として、作中仏陀の救いや慈悲に与らなかつた外道・提婆達多と女性・耶輸陀羅が描写された想定できる。

提婆達多が死の直前に耶輸陀羅の声を聞く後篇二十九によつて、「提婆達多」は愛の奇蹟を描いた文学と位置づけられる。

また、後篇の阿闍多設咄路の挿話結末に、論理的思弁において自らの矛盾に悩み悪行を行う若者に対し、矛盾はそのままに、人道に帰らせることを優先させる仏陀の現実的な方便が描かれたが、それを解説せずにはいられない点に作者の強い意図が感じられる。

耶輸陀羅の挿話において子への愛と愛人への愛が対立し引き裂かれる様を悲劇的に描いたこと、仏伝中の悪人の象徴、提婆達多の「野獣的な悪性のうちに野獣的なうぶな正直」が秘された性格を描いたこと、阿闍多設咄路の「肉親愛に対する否定的意思と肯定的感情が烈しく対立する」心情を描いたこと、結末において仏陀の慈悲や悟りに与らずとも男女間の愛と、死という自然による救いを提示したこと、これらの点から、中勘助は「悉達多 対 提婆達多」という、大きな構図の内に、一個人の性格における矛盾と対立、そして救いの価値観における矛盾と対立を描いたと言える。それは同時に、仏伝に登場する一個人の性格中の多様性と、救いの多様性を示すことに繋がる。中勘助は仏伝を現実的に解釈したのである。

提婆達多の伝承を基に、仏教学的視点からその行動様式の是非を考察する研究論文が多い中、中村元は、「原始仏教の成立」^{註11}において、原始仏教における提婆達多の位置づけについて興味深い見解を示している。それは、古代インドにおいて、仏陀と称された人物によつて説かれた仏陀になるための教えは、後代まで伝承されなかつたものの、釈尊が説いた教え以外にも複数存在する、その点から釈尊と教義を異にした提婆達多とその思想も再評価されるべきだ、というものである。

釈舎幸紀は「彼（論者注 提婆達多）が異端視されたのは教団分裂よりも、正統派の妬みや反発があつたためであり、彼に対する悪者視は釈尊の神聖化と平行していることによるのであろう」^{註12}と提婆達多を擁護する。

「提婆達多」初版刊行当時、中勘助と交流のあつた宇井伯寿は、『印度哲学研究』にまとめられることになつた釈尊の生没年や弥勒が実在したかなど、仏教説話に登場する仏陀と仏弟子の行跡と思想を文献学的に研究していた。

提婆達多を悪者に位置づける要因となつた釈尊とその教団を謙虚に描きつつも、中勘助が「提婆達多」において、提婆達多の陰影に富んだ性格と悲劇的な人生を描いた点は、提婆達多再評価の道をひらいたのである。

別表
1

③	②	①	No.
八六頁・四〜五行	五四頁・一二行	四六頁・一行	新潮社第六版「提婆達多」の頁・行
六二頁・六〜七行	四〇頁・一三行	三四頁・一〇行	岩波書店版『中勘助全集』第二卷「提婆達多」中の頁・行
悉達多の名はいつしか二人のあひだの禁句となつてしまった	といふよりは寧ろ拵へてゐた	それは風に似て捕へやうもない愛であつた	赤鉛筆による傍線箇所

二、中勘助の「銀の匙」から「提婆達多」に至る救済の思想

前節とのつながりから、本論において次の先行研究から解明された、作品末尾の提婆達多の「苦しい長い一生をおえた」臨終場面に伴う「もしそこに我々に救があるならば、提婆達多こそはまことに救われるであろう。提婆達多が救われずば、我々の誰が救われるであろうか」という救済のテーマに関し、「銀の匙」後篇執筆時における源信（恵心僧都）の思想から、「提婆達多」における原始仏教思想への展開を論じる。

(一) 先行研究から導き出された諸点

先行研究として「提婆達多」の「苦しみ」と「救済」に言及したものを次に挙げる。

① 和辻哲郎「提婆達多」の作者に『読売新聞』、大正一〇年六月二二―二三日掲載

「提婆達多を自分の心によって内から照らし」たことで、「提婆達多の——我々と同じ増上慢心の持ち主の——苦しみの深さを明らかにした」と描写の視点を評価し、提婆達多の「仏陀に打ち克とうとする心」が「悲劇的な没落に導く」ことを指摘した。

② 小宮豊隆「解説」角川文庫版『菩提樹の蔭・提婆達多』、昭和二七年三月

提婆達多の救いは「耶輸陀羅に対する変化によって示唆されている」奇跡と言うべきものであり「奇跡というものが元来外から来るものではなく、実は内から来るものである以上、提婆達多の救いの可能性は、既に提婆達多の内に含まれていた」と論じた。後半の阿闍多設咄路の挿話についても「我から解放され、更に悉達多に帰依することによって、真の救の道に足を踏み入れる」と内面からの救いに言及した。

③ 小宮豊隆「中勘助の作品」『中勘助 内田百閒集』、筑摩書房、昭和三一年六月

「人間固有の『嫉妬』もしくは『我』が「観察」された作品であり、これは「中のなかの『嫉妬』、中のなかの『我』、或は中のなかの『煩惱』、中のなかの『地獄』を、覆い隠すところなく、赤裸々に告白しようとしたものである」「中が、中を含めた我々のなかに提婆達多が住んでいることを、深刻に反省している」と、提婆達多と作者を始めとする普遍的人間の内面との近似を示した。作品が人間存在にとつての「地獄」即ち提婆達多にとつての「地獄」を描いていると指摘した点が②に加えて新しい。

④河盛好蔵「解説 中勘助集」『中勘助 内田百閒集』、筑摩書房、昭和三十一年六月

②の小宮説を継承する。

⑤関口宗念『銀の匙』におけるペシミズム』『聖和』二号、昭和三十二年九月、「提婆達多」における悪『聖和』三号、昭和三十六年一月、『仏陀の慈悲』—中勘助と仏教』『聖和』四号、昭和三十八年二月（『中勘助研究』創業出版、平成一六年五月に収録された。）

「銀の匙」で「心ゆくまで追懐」した後、「次の作品『提婆達多』『犬』に於て、本格的フィクションの中に、人間の『地獄』や『生活』を追求して行く」と、「銀の匙」と「提婆達多」のテーマの相違を浮き彫りにしている。「デーバダッタ」を通じて描かれた「人間悪の縮図」「地獄図絵」を描き出していると指摘した。また中が「原始仏教説話」をもとに「提婆達多」を創作しながらも嫂の影響下、「浄土門に関する知識の豊富さ」を「みちをしへ」の詩文に発見した。

⑥藤原久八「提婆達多」考、「提婆達多」の主題『中勘助の文学と境涯』、金喜書店、昭和三十八年五月

「銀の匙」が「漂う美の情緒の世界」を描いたのに対し「提婆達多」は前篇に「醜悪たる嫉妬心」、後篇に「人間の性欲」を主題としておいた「人間のなかの醜悪なるもの」を描いた作品として位置付けた。「提婆達多」の末文を中勘助の「悲願」とし、提婆の「生きながらの救い」は耶輸陀羅との恋にあったとする②の小宮説を踏んだもの。

⑦山室静「中勘助の世界」『法政一五七号、昭和四〇年

『銀の匙』だけでは中勘助を理解するのは不十分で、少なくとも「提婆達多」と『犬』を読まなくてはならない」と述べた上で、「提婆達多」と『犬』二作の共通点として、「愛欲の妄執の深さ、女をめぐる嫉妬の生む迷いと狂乱の救いがたさ、そして憐れさ」という主題を挙げる。これらの主題の背景にある、当時の中勘助が抱えていた義姉との関係に言及した。

⑧奥山和子「提婆達多」考—卒論ノート抜粋『静岡女子大学 国文研究』創刊号、昭和四三年六月（日本女子大学国文学科に昭和四二年に提出した卒論をもとにした論考。昭和四四年頃私家版『中勘助の思想』（四）提婆達多」（八）三作における救い」に収録された。）

バラモン教・原始仏教における「救い」を「輪廻よりの解脱」とした上で、「提婆達多」登場人物それぞれの「救い」について論じた。提婆達多の「救い」に関して「愛憎の苦悩の中の覚醒に人間の成長を見ることで、その人間の生き方を肯定したのが、救いである」と述べ、「彼は癩に崩れた者がもとの姿にこがれるやうに出来るならばこの苦しい記憶を忘却の海に投じて今一度清浄無垢な提婆達多として生れかへつてきたいとねがった」という自己中心的な性格が悲劇の根源であるとした点では①の和辻説を継ぐ。

⑨ 渡辺外喜三郎「小説から童話へ」「提婆達多」「提婆達多」をめぐって『中勘助の文学』、桜楓社、昭和四六年一〇月

「提婆達多」を「人間のこころの暗黒部分」と位置づけ、「嫉妬のあくなき狂乱」を主題と指摘した。嫂への恋情と道徳のはざまに苦悩する中勘助像を提婆達多に投影し、「希求憧憬の『銀の匙』の時代は過ぎ、自ら求めて求め得ざる愛と平和の禍根を自己のなかに見出した」とする。また先述した①⑦の先行論文の解題を行った。本論では取り上げなかったが、嘉村礒多の安倍能成宛書簡『嘉村礒多全集』下巻 南雲堂桜楓社 昭和四〇年九月二五日 収録)における、嘉村の「提婆達多」へ対する不満を、絶対帰依の仏陀を信仰する立場ならではのものと先行する論として挙げた。

⑩ 荒松雄「解説」岩波文庫版「提婆達多」、昭和六〇年四月

インド・イスラム史家。愛憎共存の微妙な人間感情を「仏教興起時代の異国の人物に仮託して」作者を代表とする普遍的な人間の愛憎の境地を描いたと③の小宮説を継ぐ。

⑪ 三好行雄「中勘助・人と作品」『昭和文学全集』第七巻、小学館、平成元年五月

「悉達多はついに耶輸陀羅を救えなかった」ことから、「中勘助の描く悉達多はむしろ無力においてきわだち、提婆達多の破滅は救済を拒む人間の無明を髣髴する」と論じた。末尾の表現に関しても「ひとの説くほど重くは響かない」と否定的である。

⑫ 川路重之「中野新井町」岩波書店版『中勘助全集』月報三、平成元年一月

作品末尾の悪人正機の解釈（「提婆達多は悪人である。もし彼が救われないならば、他にも仏性から遠いゆえに救われない人々が残るだろう。それでは仏陀の慈悲に限りがあることになる。それゆえ提婆達多こそ救われなくてはならない」）を中勘助に尋ねたところ、「そうではありません。あれは、あのまま読まなくてはいけないのです」と回答があったことを記した。「耶輸陀羅への『愛』ゆえに」「光明への希求ゆえ」と救われる理由に言及する。

作品の典拠や他作家への影響に関する論について以下に挙げる。

⑬ 堀部功夫「提婆達多」の参考書」岩波書店版『中勘助全集』月報三、平成元年一月

仏書『仏弟子伝』（山辺習学 無我山房 大正二年四月）とその原拠漢訳経典「増耆阿含経」、『美術上の釈迦』（堀謙徳 博文館 明治四三年九月）とその原拠漢訳経典「本行集経」と本文（後編五と前編三十、そして新潮社版単行本表紙カバー写真）から「提婆達多」への影響を論じた。

⑭ 平山城児「中勘助「提婆達多」」『国文学 解釈と鑑賞』五五巻一二号、平成二年一二月

典拠となった仏典、⑩で示された『仏弟子伝』等の借用、引用部分と創作部分を指摘した論。五分律、未生兔経、観無量寿経を「提婆達多」後篇阿闍多設咄路物語の典拠と位置付けた。

⑮市川浩昭「中勘助「提婆達多」とシェイクスピア『オセロ』」『上智大学国文学論集』三九巻、平成一八年一月八日

和辻が評価した「仏典上の悪人を我執に囚われた人間として再構築した」「提婆達多」の描写と造形の手法に注目し、中勘助が漱石を通じて受容したシェイクスピアの「オセロ」における「イアゴーとオセロの嫉妬の性質」として「自分にはないものに対するねたみ」「自身が所有するものを失くしたり、奪われたりすることへの恨みと怒り」の二種を挙げ、「提婆達多」における「嫉妬に囚われた主人公の造型」への影響の可能性を探ったもの。

「嫉妬に囚われた人間の地獄絵図」という主題理解は同氏による「中勘助の嫉妬観」『国文学』平成二〇年六月号に引き継がれている。

⑯工藤哲夫「土神と狐の物語」『女子大國文』一三六号、京都女子大学国文学会、平成一六年一二月

宮沢賢治の作品への「提婆達多」からの影響を論じた。

⑰木内英実「中勘助の「提婆達多」における仏伝」『密教美術と歴史文化』真鍋俊照編、法蔵館、平成二三年五月

⑱⑲の論を再考し、新潮社版単行本表紙カバー写真をT.W. Rhys Davids の Buddhist India に典拠し、本文中の地名フリガナに同書英語表記の地名の音が採択されていることを指摘した。また和辻が評価した耶輸陀羅の描写に着目し、手沢本の書入れ箇所との照合により作者が耶輸陀羅の心理描写に苦心していたことを解明した。また仏陀・耶輸陀羅・提婆達多の三角関係を描いた二〇世紀初頭のドイツ戯曲と本作との相違点を示した。悪念が停止する「死」が提婆達多にとって「救い」となる「救い」の多様性について言及した。

以上の先行論文の確認により判明した課題を次に示す。

先行研究の大部分が「銀の匙」と「提婆達多」は趣の異なる対照的な作品として位置付けており、救済のテーマについて「銀の匙」から「提婆達多」への連続性や発展性を示した論を発見することはできなかった。

⑤の関口論において中勘助による原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解が指摘されたが、具体的な思想並びに源信（恵心僧都）の思想受容についての言及を認めることができなかった。

③⑤⑮の論が述べる提婆達多の「地獄」について、中勘助の思想における「地獄」のイメージとの照応を認めることができなかった。

た。

以上を研究の観点とし、中勘助の経験や受容した思想の文献研究を中心に論じていく。

(二) 比叡山横川の恵心堂における中勘助と安倍能成の体験

先述したとおり。本作が構想されたのは『銀の匙』と同じ頃で「上野の山内にいる間に天台宗大学の蔵経を借りたりして準備」したという。「銀の匙」後篇が、中勘助が上野寛永寺山内真如院にいた頃、「同宿の坊さんから山内の他の坊さんに伝はり（中略）話が都合よくすすんで横川の恵心堂においてもらふことにきまつた」^{註13}という経過の中で、大正三年の夏「数十日」を過ごした横川の恵心堂で書かれたことは「水尾寂暁師と三千院」「鶴林寺」等、京阪見学の感想に併せて当時、横川で交流を持った水尾寂暁師、渋谷慈鑑師を回顧する「古国の詩」に詳しい。ちなみに横川の恵心堂は「円融天皇の永観元年に摂政太政大臣兼家公が慈恵大師のために創建」し、「恵心僧都が念仏三昧を修し給うふた旧蹟」と『比叡山史の研究』^{註14}に記される。

その際、中勘助が安倍能成と同行していたことは安倍による中勘助逝去の際の追悼文「中勘助の死」^{註15}に詳しい。そこには「大正三年、叡山横川の恵心堂に同居した時、私の畳を掃くのを見て、彼が『どんなに僕に気に入られようと思つたつてだめだよ』といった詞に対しては、私は実に生意気野郎だと思つて、怒り心頭に発したことがある」とあり、いつも円満だったとは言い難い滞在の様子が窺える。

しかしその際、山寺で二人の印象に残ったものは二人の作品から、共通する事が分かる。「鶴林寺」^{註16}に収録された中勘助の詩「みちをしへ」を次に記す。

みちをしへ

若い日の思い出はうらさびしくまたほほゑましい

わたしはなにもかも思い棄てうつろの胸を抱いてさまよひあるいた

霧まよふ横川の路

そのときいづくともなくひとりの童女

目もあやな花ずり衣きて
さきにたつてふりかへり
さきにたつてふりかへり
さすがに人なつかしくついてゆく私を
とある御堂にみちびいて姿をけした
目のまへに立つ石ぶみ

極重悪人無他方便
唯称弥陀得生極樂
それから四十年
美しいみちをしへよ
おまへはどこへいった

安倍能成の「山中雜記」^{註17}における恵心堂に関連した箇所を次に記す。

恵心院門前の石に、「極重悪人、無他方便、唯称念仏、得生極樂」の十六文字を濃くしてある。その何経にあるのかは私は知らないが、有難い詞だとは前から思つて居た。しかし私は思う。極重悪人をして能く極樂に生るるを得せしめるこの唯称念仏の心は、非常に深重なものでなければならぬ。「善人尚もて往生す、況んや悪人をや」という歎異抄の詞を、前後のコンテキストを離れて、今ここに私一人で考えて見ると、悪人の往生し得る力は、悪人の悪が罪悪の自覚を一層深重ならしめるののではないか。深重さる罪悪の自覚は即ち救済である。これ蓋し厳肅なる否定がやがてその超越たる所以である。唯称念仏の心はやがて深重なる罪悪の自覚でなければならぬ。もしこの自覚を外にして、徒らに極樂を好餌として往生を説くならば、それはもう宗教の墮落である。私はかくの如き人心の弱点に乗じて、その結果はむしろ罪悪の奨励となる如き宗教の弘通を呪はざるを得ない。恵心僧都の真精神は固よりかくの如きものではあるまい。親鸞聖人の精神も亦。

盆の十五日に岳麓の来迎寺へ宝物を見に行つた。中に巨勢金岡の筆と伝へられる十界の図がある。絵は随分旨いものである。筆

力もある。しかし私はこれを見て何等の宗教的情熱を触発されなかつた。唯一種の気味悪き不快（尤も真筆は四幅見ただけであつて、後は写しであつた。中に「畜生道」の図の如きはむしろ軽快なものである）を感じただけである。この絵は恵心僧都の『往生要集』によつて描かれたものだときいて、寺へ歸つてその書物を借りて少し読みかけたけれども、四、五枚も読むうちに唯不快ばかりを感じて止めてしまつた。後にその事を或友人に話した時に、彼は「往生要集の地獄は寄せ集め物である上に、感覺描写があるばかりで、一つもポエトリーがない。ダンテの地獄などとその点が違ふ」といつた。私はそれを聞いて成程さうもあらうかと思つた。

（大正七年八月の脱稿年月記載有 初出『思潮』二卷一〇号 大正七年一〇月一日）

中勘助が安倍の文章を読んでいた可能性は、「山中雜記」掲載『思潮』同号に奈良国立博物館で中勘助と出会つたことを記した「古寺巡礼」を和辻哲郎が連載してしたことから極めて高いと言える。同号の「古寺巡礼」冒頭には、「博物館を午前中に見てしまおうなどというのは無理な話である。一度にせいぜい二体か三体ぐらい、それも静かに落ちついた心持ちで、胸の奥に沁み込むまでながめたい。N君はそれをやっているらしい。入り口でバツタリ逢つた時に、N君はもう見おえて帰るところだった」とN君として中勘助が登場する^{註18}。



写真1 恵心堂門前の石柱（全体） 平成二六年一〇月一二日論者撮影

写真2 恵心堂門前の石柱（下部分アップ）「極重悪人 無他方便 唯称弥陀 得生極楽」



『比叡山諸堂史の研究』（武覚超著、法蔵館、平成二〇年三月）によると中勘助が滞在した恵心堂は昭和四〇年に焼失し現在の堂宇は山麓坂本の生源寺横にあった別当大師堂を移築したものであるという。平成二七年一月二九日付比叡山延暦寺水尾寂芳師の書簡により、写真1・同2について「石柱の裏面には、昔明治十八年乙酉中秋とあるようです。（中略）昭和三〇年代、恵心院は横川中堂（昭和一七年焼失）の仮堂とされ、現在の清原大僧正が輪番として勤めたことがあるとのこと、大僧正からも、この石柱は焼失以前の恵心堂前に在ったと仰っていました」と、写真1・同2の石柱は、中勘助と安倍が見たものと同じ石柱であるとの教示を得た。

写真1・同2の通り、恵心堂門前の石柱に刻まれた法語は正しくは中勘助の著にある通り「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」であった。

「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」は、源信が永観二年から寛和元年にかけて撰述した『往生要集』（西教寺本）大文第八「念仏証拠門」の偈文である。一般的な『往生要集』（岩波書店『日本思想体系六 源信』昭和四五年九月）には「四観経（云）、極重悪人無他方便、唯称念仏得生極楽」と記され、安倍が記した「極重悪人無他方便、唯称念仏得生極楽」書き下し文は「極重の悪人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極楽に生ずることを得。」として知られる。同書の石田瑞麿による校注には「この文は観無量寿経、下下品（正蔵一・二ノ三四六上）の取意と見られる。」とある。

観無量寿経、下下品（岩波文庫版『浄土三部経（下）』中村元・早島鏡正・紀野一義訳昭和三九年九月一六日）には「仏告阿難及

韋提希、下品下生者、或有衆生、作不善業、五逆十惡、具諸不善。如此愚人、以惡行故、應墮惡道、經歷多劫、受苦無窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識、種種安慰、為說妙法、教令念仏。此人苦逼、不遑念仏。善友告言、汝若不能念者、応称無量寿仏。如是至心、令声不絶、具足十念、称南無阿彌陀仏。称仏名故、於念念中、除八十億劫、生死之罪、命終之時、見金蓮華、猶如日輪、住其前。如一念頃、即得往生、極樂世界、於蓮華中、滿十二大劫、蓮華方開。觀世音大勢至、以大悲音声、為其広説、諸法実相、除滅罪法。聞已歡喜、応時即發、菩提之心。是名下品下生者。是名下輩生想、名第十六觀。」

早島による漢文和訳は以下の通りである。

仏はアーナンダとヴァイデーヒーに告げられた。——「〈下品下生の者〉とは、生ける者どもの中で、不善な行為である五逆罪と十種の悪行を犯し、(その他)さまざまに不善を行ない、このような悪しき行為の結果、悪しき道に墮ち、長い間くり返しくり返し苦悩を受けて止むことのない愚かな者の命が終ろうとするとき、この者を種々に慰め励まし、この者のためにすぐれた教法を説き教え、仏を念じさせる指導者に会う。そこで指導者が言うのに、『お前がもし仏を念ずることができないのなら、無量寿仏よ、と称えなさい。』と。このようにしてこの者は心から、声を絶やさぬようにし、十念を具えて、南無アマタ仏と称える。仏の名を称えるのであるから、一念一念と称える中に、八十億劫の間かれを生と死に結びつける罪から免れるのだ。命の終るとき、日輪に似た黄金の蓮華がかれの眼の前にあらわれ、一瞬のうちに〈幸あるところ〉という世界に生まれる。蓮花の中にあること十二大劫を過ぎて蓮花は花開く。アヴァローキテーシヴァアラとマハースターマプラープタは、大悲の音声でこの者のために広く存在の实相と罪を除き滅ぼす法を説く。この者は聞き終って歡喜し、たちまち覺りに向かう心をおこすのだ。これを〈下品下生の者〉と名づけ、これを〈下位の者の往生の觀想〉(下輩生想)と名づけ、〈第十六の冥想〉と名づけるのだ。」と。

⑭の先行論文で紹介したように觀無量寿経は「提婆達多」後篇の阿闍多設咄路王の話の典拠であり、中勘助自身も初版本の末尾に参考諸書の一つとして掲載している。

大正三年夏期の中勘助の恵心堂滞在には一つの理由があった。

「叡山恵心堂」『我が生ひ立ち 自叙伝』^{註19}には安倍による「その前年友人山田又吉が、私の留守宅で自殺したが、二人して叡山

に居た間に、大阪市中の山田の家と一緒に尋ねたことがある。(中略) 山田は中をラヴして居たと思ふが、中の本質の善い所は、私などよりよく見て居たらしい。山田の死んだことは中にとつては大きな打撃であつたらう」と、大正二年三月二十九日に自殺し、中勘助が後始末に奔走した山田又吉の実家に弔間に行ったとの記録がある。

中勘助、安倍、岩波茂雄が編集し大正五年三月二十九日に岩波書店から上梓した『山田又吉遺稿』収録「山田又吉年譜」には、明治一六年三月九日大阪生まれ、同三五年第一高等学校第一部入学、同三八年九月病に罹り休学、同三九年末、復学、同四〇年七月東京大学文科大学哲学科入学、西洋哲学を修し同四三年卒業、大正二年三月二十九日逝去とある。山田の逝去は安倍の前掲書によると「古い大きなナイフで首筋を切り」という自殺であつた。

山田の大正元年一二月一二日付岩波宛書簡には「かつて愛静館を出て君の家へ行つたあの数日間の怖ろしかつた事を思ひ出すと今は大変幸福で居る、あの時は昼間日光が怖ろしくて戸をあけ得なかつた。然し今は生きようとの覚悟を少くとも予期して居る」と、自殺の兆候が窺える。

また大正元年日付不明(一〇月三日〜一二月一二日) 安倍宛書簡では、八月に中が大内生の署名で『新小説』に発表した「夢日記」に關し、「中の夢日記は誰れか評をした人があつたが、面白い評をした人でもあつたか」と、世間の反応を尋ねている。

当時は大正二年四月八日からの『東京朝日新聞』に「銀の匙」(前篇)連載開始直前であつた。「岩波と山田の骨をもつて大阪へいつてからもう三十年にもなる」と昭和二〇年四月二六日付随筆「羽鳥」で回顧する中であつたが、その後始末を含め安倍の推測通り「山田は中をラヴして居たと思ふが、中の本質の善い所は、私などよりよく見て居たらしい。」と評される親友を失つたことは「大きな打撃」であつたと考えられる。

山田が明治三四年四月に提出した卒業論文(英文)は同書(『山田又吉遺稿』)に「エックハルト研究」(中勘助・久保勉・安倍能成翻訳)として収録されている。「第一章 神性」「第二章 三一神」「第三章 創造」「第四章 被造物」「第五章 心理学」「第六章 人間の自由」「第七章 徳」「第八章 生誕と神化」「第九章 人生の理想的状态」という構成であり、卒論指導者のラファエル・フォン・ケーベルのコメントが付され、末尾に「君のこの論述は極めて根本的でそしてよい。然し今後君がこれを更に役に立たせようと思へば、余は君にその内在的に偏する點を改めることを薦めたい。即ちエックハルトと彼に似た人々との関係をも示すといふことである。換言すれば君の論文を歴史的・哲学的なモノグラフィに形作るやうに試み給へ。」という総評も記されている。論文題名と論文構成から理解されるように、中世ドイツの神学者・神秘家であるエックハルトの思想を考察した論文である。

「第九章 人生の理想的状態」において「生誕」即ち「遠離は我々の空虚を生じ、魂の本質はこの空虚へ現はれる」「殆ど肉体の死」である状況下で、「内面的業が全く、神の業になり、外面的業が毫も人間の努力を要せぬ」ことを、「霊の向上」「徳の道」に努めることによって繰り返すというエックハルトの思想を引用し、最後に次のようにまとめた。

我々が大苦の中にあつて恩寵の助を要する時に、其本質に於て永遠だけでもこの現象界に於ては束の間なるところの生誕が起る。かくの如きは人生の果しなき道である。

中村元は『中世思想 上』（春秋社 昭和五一年七月）において「最も深く最も真実なる真理」を「一般民衆に伝達しよう」と「ゲルマンのことば（論者註 地方語）で記したエックハルトの業績にふれ、民衆に分かるよう和語で著作をなした鎌倉仏教の創始者との近似性や、「神は何物でもなく『無』であるという」思想を紹介している。

山田も卒論の中で「本質の有様について考えることは、彼に於てはそのままに道徳的行為であった。例へば仏陀の教理の中に屢ば見受くる様に、無宇宙論的の言葉はエックハルトが現象世界に対して強く憎悪を抱いて居ることの証拠である。」（第二章 三一神）と、エックハルト思想と仏教思想を比較した。

山田が卒論の中で述べた「仏陀の教理」を中勘助はどのような資料を通して受容したのか、という疑問が生じる。先述したように「提婆達多」初版本末尾に記した参考諸書の他、(一)⑧の奥山による「中夫人の話によれば、資料の一つに大蔵経があるという事である」を裏付けるように、静岡市が中勘助遺族より寄贈を受け管理保管する静岡市所蔵中勘助関係資料内の蔵書（以下、静岡市資料と呼称する）には、東京弘教書院『大日本校訂大蔵経』（資料 No.098A001～003 099A001～003 100A001～003 101A001～003 102A001～003 103A001 104A001～006 105A001～006 106A001～006 107A001～006）を中心は大蔵経典が数多く存在する。中には『大正新脩大蔵経』一二巻（静岡市資料 No.044A018）が所蔵され、その他『山家學報 第二號 恵心僧都記念號』（静岡市資料 No.051A016）も所蔵されている。

（三）「銀の匙」に描かれた「救済」

源信の「往生要集」の根本思想は、その冒頭で「一には厭離穢土、二には欣求浄土、三には極樂の証拠、四には正修念仏、五には助念の方法、六には別時念仏、七には念仏の利益、八には念仏の証拠、九には往生の諸業、十には問答料簡なり」と「十門」が挙げられている。

「厭離穢土」とは「汚れた世界を厭い離れるべきこと」であり穢土即ち「迷いの領域」を「一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には阿修羅、五には人、六には天」とし、「特に地獄の解説が、歴史的に有名である」と中村元は『往生要集』（岩波書店 昭和五八年五月）において解説する。

「欣求浄土」とは『岩波仏教辞典 第二版』^{註20}によると、「極樂浄土に生まれることを願ひ求めること」であり、「厭離穢土の自覚が欣求浄土の前提になること」が示唆されている。

大正三年に横川恵心堂で執筆された「銀の匙」後篇収録の『銀の匙』（仮綴じ本）^{註21}における該当箇所を次に挙げる。

後篇七において、兄に釣り堀に連れていかれた帰途の場面、

その時の不愉快と不平……のなかに唯そればかりの命と夕べの空に一つ二つ白々と輝きはじめる星、それは伯母さんが神様や仏様のおいでする所だと教へたその星に嬉しく懐かしく見とれてゐれば、兄は私のおくれるのに腹を立てて

「何をぐづぐづしてる」

といふ。はつと気がついて

「お星さまを見てたんです」

といふのを皆までいはず

「馬鹿。星ついでいへ」

と一喝をくはず。あの清らかな天の笑顔は私に母よりもやさしく見える。隣れる人よ。何かの縁あつて地獄の道づれとなつたこの人を兄さんと呼ぶ様に、何の罪もない子供の憧憬が、空をめぐる冷たい石をお星さまと名に呼ぶのがそんなに悪いことであつたであらうか。

「隣れる人よ。何かの縁あつて地獄の道づれとなつたこの人を兄さんと呼ぶ様に、何の罪もない子供の憧憬が、空をめぐる冷

たい石をお星さまと名に呼ぶのがそんなに悪いことであつたであらうか」という引用末尾は、「私」を擁護する大人の視点が認められる。「地獄の道づれ」と釣り堀行きの同行と兄弟の縁をもって人生を送ることを二重に比喻する中で、「星」を「神様や仏様のおいでなる所」「清らかな天の笑顔」と憧憬する一方で、人間の世を「地獄」と見なす厭世感が窺えよう。

前篇から既に伯母さんは念仏者として登場する。前篇十七の寝間における行燈の燈火の場面で「油の中へ羽虫の死骸が真黒に沈んでいる」のを処理する際に「焼け死んだ虫たちの後生の為にお念仏を申す」と虫の魂を想う篤い仏性の持ち主として描かれた。

前篇三十四で、小学校入学を拒む「私」が兄に頬、をはられた上、仏様のお供物を食べ発熱した場面では、「伯母さんは念仏を繰り返しつつ夜の目もねずに看病してくれた」と他力本願で病氣平癒を願う姿が描写される。

後篇十六、蚕の飼育の場面で、孵った蚕種の半分が裏庭に捨てられた。それを憐れむ「私」に対し、「仏性の伯母さんはどうぞしたいのは山々なだけれどどうしようもないものでお念仏をくり返しつつやうやく賺して連れ帰つた」とままならないことに対する無念さを念仏で昇華させる描写がある。

後篇三十五、故郷に戻り身体を弱らせた伯母さんを「今生の暇乞ひのつもり」で尋ねた場面では、「お阿弥陀様に御礼を申上げる」といつて仏壇前に座りお経を上げる姿が描写される。「そののち程なく亡くなつた。死に際にはひどく苦しんだのを菩提所の和尚様が深切に見舞つて枕元で法華経を読んでくれたらば忘れたやうに楽になつて、お念仏を繰り返しつつやすやすと息をひきとつたといふ。伯母さんはながいこと夢みてゐたお阿弥陀様の前に坐つて、あの晩のやうな敬虔な様子で御礼を申上げてゐるのであらう。」と、念仏による往生を願う温かな視点で描かれた。

(一)⑤の関口論では、原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解が指摘されたが、この伯母さんの臨終場面からは「朝題目夕念仏」という「朝には法華経を読み、夕方には念仏を唱える」^{註22}天台宗の勤行の様子と共に天台教学における「称念」^{註23}即ち「仏に見えることを目的とする念仏」「仏の真理そのものを観察するものや仏の形相・世界を観察するもの」を伯母さんが志向していたことが分かる。

後篇二十六〜三十は近所に越してきた独逸人の宣教師夫婦とその通訳の女性皆川さんと「私」との関わりが中心となる。皆川さんとのやり取りで「救い」を求める場面は次の通りである。

「僕——神様が——救はれるかしらん」といつた。彼方は一寸合点のゆかぬ様子をしたが「ええ、ええ、神様はどなたでも救つ

て下さいます。けどあなたはどうしてそんな——私はさつと耳朶まで赤くなつて足をぶらぶらさせたりおるがんをそつと鳴らしたりしてごまかしながら「僕——悲しいことがあるから」皆川さんは愈驚いてもしや生意気からそんなことをいつてみるのぢやないかと半信半疑の様子ゆゑ私は熱心に繰返し繰返ししてやつとそれが本当の心からだといふことを呑みこませそして今度のくりすますには必ず一緒に教会へゆくといふ約束をして帰つたがそんなこといつたらどんなに叱られるかと思ひ殊に自分の願ひが真面目であるだけなほさらいひ出しかねてとうとうその日までとつおいつ思案はしながら誰にも話さずにしまつた。(後篇二十八)

結果的にクリスマス当日兄から詰問され行かなくなった「私」は、宣教師一家の転居を知り「異人さんにもよく申訳をして出来ることならどうぞして信者になりたいと思つてゐたのに。唯一の頼みの綱もふつりと切れてしまつた」と、悲しい気持ちをどうにかしたい、救われたいと思う気持ちはあるものの、縁に与れなかつた様子が描写された。

また後篇三十七において友達の別荘で一夏を過ごした際に、世話をしてくれた婆さんとの会話では主人公が仏縁の深さにもかかわらず出家の縁に与れない理由が次のように示された。

ばあやは私を一目見て

「ああ御仏縁の深い方だにお坊様におなり遊ばいたらよかつたになあ」と思つたといふ。(中略)

私は仏縁は深いけれど人が邪魔したため坊さんにもなれずこれからも邪魔されるといふので

「それぢや仏縁が深くて駄目かなあ」

と嘆息するやうにいへばま顔になつて

「なにあんたそれだてこれから一心に御信心なされれば、あんた仏様の力は廣大だでなあ」

と何もかも忘れて力をこめた。そして

「わしらとちがつて目がお見えになるでお経文をお読みなされ」

といひながら手の筋を見て

「小さな邪魔の筋はみんな消えとりますかな」

「もうはいちやんと本願を頂いておいでだにちつとばかりの自力をお棄てなさいで、あんたは悪いお方だなもや」

傍線部は浄土三部経に示される「阿弥陀如来の本願」つまり「阿弥陀如来がすべての衆生を済度するという本願を立てられたからには、われわれはそれを絶対的に信じることで救われる。小さな自力の計らいは捨てなさい」^{註24}という浄土真宗教義が説明された。

(四) 原始仏教の死生観

中勘助が新潮社版初版本の末尾に参考諸書の一つに挙げた『オルデンベルグ氏 仏陀』^{註25}では舍利弗の言葉として「我れは死を欲せず、又生を欲せず。我れは時の来るを待つこと猶ほ其賃金を待てる奴隷の如し。我れは生を欲せず、我れ死を欲せず。我れは時の来る迄、覚醒、留意して待たん」が掲載されている。また続いて、無常の存在として地上の執着を離れた場合、「若し今疾く現世を辞せんと欲せば之をなすも可なり。大多数の者は自然が其目的点に達するまで現世に留まるなり」という舍利弗の言葉も同所には記されている。

同書及び同箇所を中勘助が受容したことは、「私は死を望んではゐない。生を望んでもゐない。私が心から望むのは「私」が存在しなかったことである」(大正一二年六月某日「沼のほとり」『思想』大正一三年一月号初出)との箴言の冒頭二文章に引用されていることから明らかである。

また中勘助が同書の末尾に参考諸書の一つに挙げた『ケルン氏 仏教大綱』^{註26}の「第三編 仏の教法」には「聖者の目的は涅槃に達するにある。(中略) 実際涅槃と云ふは再生の恐れのない幸福なる死滅の意である。若し然りとすれば仏は魔羅に勝つたと云ふことが如何してできるか。之は仏は實際有形の死に勝つたのではなくして卑しむべき死の恐怖に勝つたからである。この結果に達する手段は死を極めて多幸なるものとして示すにある」と記されている。

つまり、原始仏教における死生観は、無常の現世への執着と苦悩を絶ち涅槃に入ることを第一義とし、悟りの状態では生死の別を殊更意識しないことである。その上で「若し今疾く現世を辞せんと欲せば之をなすも可なり」と舍利弗は自殺を容認している。それ

は、『ケルン氏 仏教大綱』によると「鍛工は米飯菓子豚肉の食事を準備した。世尊来つて座に着かるるや自ら豚肉を取り弟子等には他の食物を薦められた。供養の後世尊は准陀に豚肉の残りは埋めて貰ひたいと仰せられた、是れ斯る食物はこの世で世尊のほか何人も食ひこなすことの出来ぬからである。この後間もなく世尊は激烈なる赤痢病に罹られた」と仏陀の最期が意図的に毒を食した結果であると説かれるからである。

自殺者に対する位置づけが、原始仏教と源信の思想では大きく異なる。

先述した通り、悟りを開き死の恐怖に勝つたものには生死の別は関係なく、他を利用するためには自死もやむを得ないとする考えである。それに対し『往生要集』上巻には「間違つた見解、思想によって」自殺した者が落ちる「等喚受苦処」地獄が次の様に描かれた。

復有異処、名等喚受苦処、謂举在嶮岸無量由旬、熱炎黑繩束縛、繫己、然後推之、墮利鉄刀熱地之上、鉄炎牙狗之所噉食、一切身分、分分分離、唱声吼喚、無有救者、昔説法依惡見論、一切不実、不顧一切、投岸自殺者、墮此、

石田瑞磨による書き下しは「また異処あり。等喚受苦処と名づく。謂く、嶮しき岸の無量由旬なるに挙げ在き、熱炎の黒繩にて束ね縛り、繋ぎ已りて、しかして後にこれを推して、利き鉄刀の熱地の上に墮す。鉄炎の牙の狗に噉み食はれ、一切の身分、分分に分離す。声を唱へて吼え喚へども、救ふ者あることなし。昔、法を説くに悪見の論に依り、一切不実にして一切、岸に投げて自殺せるを顧みざる者、ここに墮つ」である。

源信の思想で地獄が人間の犯した罪によって諸相あることに関し、中村は「特に源信の属していた天台宗の教義によると、地獄は人間を離れてあるものではなくて、人間の一つの側面なのである。地獄の描写のうちに人間の諸相を見出したのも、極めて当然のことであった」^{註27}と解説する。

塩入法道は「天台が説く心」(『大法輪』平成二〇年五月)において、「天台止観」を「本来、日常のあらゆる場面でカツとなる心、欲望にもえる心、ふと和む心、その瞬間の心をとらえて行われる修行法」であり、「どちらの心も私でしかないということ」を悟って、懺悔すべきは懺悔しそれが私の心に具わっている菩薩や仏にまで自己を高めていこうとすること」が「中道観」と示した。このように「地獄」は天台大師智頭の著した「魔訶止観」という人間の心のあり様を追求した書に著された「地獄も餓鬼も畜生もある

いは仏も菩薩も衆生の一瞬一瞬の心にある」註₂₈という天台思想に基づき解釈される。

(五) 「提婆達多」に描かれた救済

(一)⑬の堀部論において指摘された山辺による『仏弟子伝』、他に『釈尊之生涯及其教理』^{註29}等単行本を典拠とする説法を一覧とすると、前頁の表1の通りである。

中勘助自身、先掲の和辻照子宛書簡にて「色々不満なところもありますが特に仏陀の説法に関して随分物足らなく思つてゐます。併し説法を創作する気にもなりません」と気のないことを告白している。それは表1のように典拠本の影響が強いことから、その言説は裏づけられる。

後篇八に千五百余りの比丘衆に対する提婆達多の説法が次のように描写された。

(前略) 私は汝等を憐んで微妙の法を説く。然るに汝等愚痴の者よ、汝等は耳聾して鼓の声をきかず、目盲ひて慧日の光を見ず、罪業の糞泥にまみれ、淫樂の悪臭をはなちつつ蛆のごとくに人界を匍匐ひまはる。汝等は猿のごとくに交尾み、猿のごとくに生み、猿のごとくに群居する。而して色慾の肉縄につながれたる互を夫とよび、妻とよび、親とよび、子とよぶ。汝等は五欲の糧を得んがために媚び、諂ひ、匿し、偽り、欺き、誑し、謗り、罵り、憎み、嫉み、悲み、怒り、吝み、貪り、盗み、殺し、……ありとある罪惡を犯す。汝等の愛欲に皺める顔はさらに狡智に歪む。汝等はまことに猿よりも醜惡に、猿よりも奸惡である。汝等我唾を啗ふにも足らざる奴輩よ、汝等は生死に輪廻してやまぬであらう。汝等はまさに畜生道に墮ちるであらう。汝等は餓鬼道に墮ちるであらう。汝等は大紅蓮の氷に凍え、大焦熱の焰に焼かれ、阿鼻の底に叫喚しつづその時はじめて私を思ふであらう……

前半の「色慾」に関する説法は、後篇九から二十八までの阿闍多設咄路王の挿話における、王が提婆達多から影響を受けた思想内容である。後半の傍線部は、まさに源信の「往生要集」冒頭に描かれた「厭離穢土」の次の箇所を典拠としていることが分かる。

大文第一、厭離穢土者、夫三界無安、最可厭離、今明其相、惣有七種、一地獄、二餓鬼、三畜生、四阿修羅、五人、六天、七惣結

七、大焦熱地獄者、在焦熱下、縦広同前、苦相亦同(大論瑜伽論)但前)六地獄根本別処一切諸苦、十倍具受、不可具説、其寿

半中劫、偷盜淫飲酒妄語邪見、并汗淨戒尼之者、墮此中、(中略) 有大火聚 其聚拳高五百由旬、其量寬広二百由旬、炎燃燭盛、彼人所作惡業勢力、急擲其身、墮彼火聚、如大山岸推在險岸(己上、正法念經略抄)

八、阿鼻地獄者、在大焦熱之下欲界最低之處、罪人趣向彼時、先中有位、啼哭説偈言、一切唯火炎、遍空無中間、四方及四維、地界無空處、一切地界處、惡人皆遍滿、我今無所歸、孤独無同伴、在惡處闇中、人大火炎聚、我於虛空中、不見日月星、時閻羅人以瞋怒心答曰、或增劫或減劫、大火燒汝身、癡人已作惡、今何用生悔、非是天修羅、健達婆竜鬼、業羅所繫縛、無人能救汝、如於大海中、唯取一掬水、此苦如一掬、後苦如大海、既呵責已、將向地獄、去彼二万五千由旬、聞彼地獄啼哭之声、十倍悶絕、頭面在下、足在於上、遙二千年、皆向下行(正法念經略抄)

また紅蓮地獄とは「大毘婆沙論」では八寒地獄中の第七。鉢特摩(はどま)は深紅の蓮華を意味するサンスクリット語の音写。ここに落ちた者は酷い寒さにより皮膚が裂けて流血し、紅色の蓮の花に似るといふ。(前出中村元他四名編『岩波 仏教辞典 第二版』平成一四年一二月による)

以上のように、後世、玄奘が編んだ「大毘婆沙論」や源信が撰述した「往生要集」に描かれた地獄道、餓鬼道、畜生道のイメージを提婆達多の説法には利用している。原始仏教時代ではありえない説法内容であるが、仏陀の説法を創作する気がなかった分、提婆達多の説法には中勘助が受容した源信の思想の影響が認められる。

「まことに耶輸陀羅は彼(論者註 提婆達多)が真実の心を捧げ得たる最初のものであった。そして最後のものとなるであらう」(前篇 四十一)と耶輸陀羅臨終の場面で、提婆達多にとつての唯一の女性としての耶輸陀羅の存在を中勘助は印象付けている。

⑰の拙稿で確認したように、手沢本の書入れ箇所との照合により中勘助は耶輸陀羅の描写に苦心していた。耶輸陀羅造型には、中勘助が受容した安倍による「山中雜記」中、ダンテ「神曲」の影響を確認したい。

「提婆達多」上梓の大正一〇年は「ダンテ没後六〇〇年に当たり、日本における学究的なダンテ研究の一つの頂点をなす黒田正利『ダンテとその時代』が現れた」と解説されるように文芸雑誌がダンテ特集号を組むような、ダンテ顕彰年であった。

「山中雜記」に記された「往生要集註の地獄は寄せ集め物である上に、感覚描写があるばかりで、一つもポエトリーがない。ダンテの地獄などとその点が違ふ」との安倍の友人の評価は、「往生要集」巻頭の「夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也、道俗貴賤、誰不歸者、但頭密教法、其文非一、事理業因、其行惟多、利智精進之人、未為難、如予頑魯之者、豈敢矣、是故依念仏一門、聊集經論

【要文】 坡之修之、易覚易行」の部分を読み「濁り汚れた末世では（念仏の教えにたよるのでなければ凡夫は救われない）」という趣旨によって、諸々の經典の文句を集めた」^{註31}という同書成立の趣意を理解していたと言えよう。經典に対する深い関心とダンテ「神曲」のポエトリーを評価できる安倍の友人を推測するならば、「山中雜記」には名前こそ現れないが、共に恵心堂で一夏を過ごした中勘助と考えられよう。

ダンテ「神曲」において、地獄及び煉獄を巡るダンテを見守り天国に導く役目を果たすのは、ダンテ伝記上において、ダンテ九歳並びに一八歳で出会い、二三歳で没したベアトリーチェである。

「神曲 煉獄篇」第三一歌においてダンテが悔悛し、「人の罪の記憶を奪う力」を持つ「レーテ」川の水を飲んで清められる場面は、次のように描かれる。

彼女（論者註 貴婦人）は私を喉まで川の中に浸していたのだった。

そして私を後ろに引きずりながら

軽々とまるで平底船のように水の面を滑っていた。

私が祝福の岸に近づいた時に、

「私を清めてください」、それが無上のさわやかさで聞こえた。

それを思い出すことは、書き記すことなども無論だが、私にはできない。

美しい貴婦人は腕を広げた。

私の頭を抱いて私を沈め、

そのために私は水を飲むことになった。

それから私を引き上げると、濡れた私を

四人の美しい貴婦人が舞う中に置いた。

すると皆それぞれが腕をかざして私を隠した。

「私たちはここではニンフ、そして空では星なのです。

ベアトリーチェが地上世界に降臨される前から、

私達はあの方の侍女となるよう定められていました。

あの方の瞳の前まであなたを連れていきましよう。けれども瞳が宿す

歓喜の光の中で、あなたの視力を鋭くするのは

向こうにいる三人。彼女達はもつと深く見通せるのです。」

ダンテ・アリギエリ著・原基晶訳『神曲 煉獄編』講談社学術文庫、平成二六年七月、四六五〜四六六頁

このように川の水を飲んで清められたダンテは一〇年前に亡くなった麗人ベアトリーチェと再会し、罪を償う。一方、「提婆達多」の場合、自刃した耶輸陀羅は、後篇提婆達多の心身が末期の苦しみに苛まれても「私は決して悉達多にひとり勝利者の日を楽ませはせぬ」と悉達多殺害の企てをもつて告別の度に出る際に現れる。

「提婆達多」

提婆達多はよろよろとした。そして死人のやうな顔をして何物かを捜すやうに庵室のなかを凝視した。彼は悄然として轎にのせられた。それは忘れもせぬ耶輸陀羅の声であった。(中略)

彼は水を呼ぼうとしたがすでに遅かった。彼はひとつふたつ魚のやうに喘いだ。そして苦しい長い一生ををへた。

(「提婆達多」三二)

死してもなお提婆達多に寄り添い導こうとする至高の存在として耶輸陀羅は描かれる。それはダンテ「神曲」における地獄・煉獄を巡るダンテを守護する「恵みを与える女性」ベアトリーチェと重なる。しかし、「神曲」において川の水で清められベアトリーチェに再会し、罪を償ったダンテと異なり、「提婆達多」における提婆達多は、耶輸陀羅との再会が叶わないだけでなく末期の水を飲むことができない。

さらにダンテ「神曲」を「提婆達多」の参考図書の一つと判断する要因として表2の通り、提婆達多の想念としての地獄の描写による。表2中の傍線部は図1及び図2の通り、「神曲」の地獄めぐり・煉獄めぐりのテーマである「暴食」「色欲」「傲慢」「怠惰」「嫉妬」「強欲」「憤り」という七つの大罪と重なる。

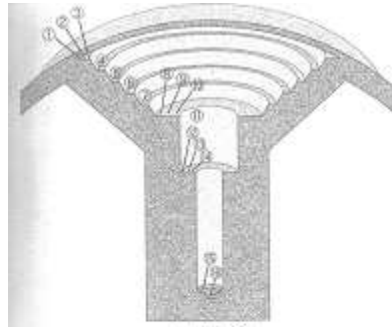


図1 煉獄全図

①地獄門	⑥第六層、異端者
②第一層、淫乱者	⑦第七層、暴死者
③第二層、強姦者	⑧第八層、殺人者、強盗
④第三層、強姦者	⑨第九層、背教、家畜虐待
⑤第四層、強姦者	⑩第十層、背教、神を罵った者、同性愛者、銀行家
⑥第五層、強姦者	⑪第十一層、マレボルジョ、他人を罵った者
⑦第六層、強姦者	⑫第十二層、コキュートス、無明死者
⑧第七層、強姦者	
⑨第八層、強姦者	
⑩第九層、強姦者	

(ダンテ・アリギエリ、『神曲』煉獄篇を参考に作成)

図1

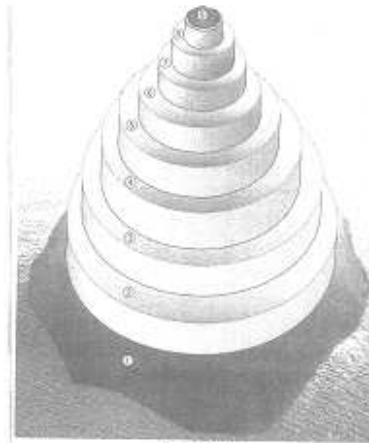


図2 煉獄全図

①地獄門	⑥第六層、異端者
②第一層、淫乱者	⑦第七層、暴死者
③第二層、強姦者	⑧第八層、殺人者、強盗
④第三層、強姦者	⑨第九層、背教、家畜虐待
⑤第四層、強姦者	⑩第十層、背教、神を罵った者、同性愛者、銀行家
⑥第五層、強姦者	⑪第十一層、マレボルジョ、他人を罵った者
⑦第六層、強姦者	⑫第十二層、コキュートス、無明死者
⑧第七層、強姦者	
⑨第八層、強姦者	
⑩第九層、強姦者	

(ダンテ・アリギエリ、『神曲』煉獄篇を参考に作成)

図2

図1 ダンテ・アリギエリ著・原基晶訳『神曲 地獄篇』講談社学術文庫、平成二六年六月、五四六頁より

図2 ダンテ・アリギエリ著・原基晶訳『神曲 煉獄編』講談社学術文庫、平成二六年七月、五六三頁より

⑥	⑤	④	③	②	①
後篇四	後篇三	後篇一	前篇三七	前篇一八	前篇九
<p>にもあまり高き評価しないのを安からぬことになった。そして終にいか</p> <p>増長した。彼は仏陀が彼を大弟子たちの下におき、彼らもまた彼を</p> <p>かやうにして「尊者提婆達多の名が高まるとともに彼の驕慢は忽に</p>	<p>かねたか。</p> <p>いかにまた尼僧に対して劣情をおこし、みめよき女の門を立ち去り</p> <p>略）彼はいかに他人の受けた一鉢の美食、一枚の新衣を妬んだか。</p> <p>精神生活を我にもあらず羨望する気持になるやうになつた。（中</p> <p>の地獄ともいふべき自分の生活にひきくらべて、仏陀の澄明平穩な</p> <p>を得ずに隠忍して年月をへるうち、いつとはなしに折々生きながら</p> <p>提婆達多は夢寢にも復讐を忘れなかつたけれど、折々生きながら</p>	<p>て浄められた。姦淫によつて蘇つた。彼はいはば罪によつ</p> <p>提婆達多が耶輸陀羅に對する怨恨は深かつた。彼はいはば罪によつ</p>	<p>眼をまはされれるであらう。獅子の卵に孔雀の舌料理では流石の仏陀も</p> <p>一段と面白い趣向ぢや。獅子の卵に孔雀の舌料理では流石の仏陀も</p> <p>るんだ高調子で話しかけた。（中略）「なに獅子の卵。これはまた</p> <p>ある提婆達多のうへに充血したけだるさうな眼をすゑながらのゆ</p> <p>彼は大きな杯から葡萄酒をぐつと飲んで、卓をへだてて向き合つて</p>	<p>の苦みも結句かへつて一種の張合となつた。さう思へばこの地獄</p> <p>の苦みも結句かへつて一種の張合となつた。さう思へばこの地獄</p> <p>憎悪を感じた。「よしよし今のうちはどうなりとするがよい。併し</p> <p>とほして自分の幸福をひけらかすかのやうに悉達多に對して、烈しい</p> <p>があだかも悉達多が謀つて殊更彼をかやうな地位において、彼女を</p> <p>つてきいてゐる。（中略）提婆達多は煮えかへる胸のうち、顔を</p>	<p>まざまざと同じ苦痛、憤怒、憎悪、嫉妬を喚起した。のごとく彼に</p> <p>そしてそれはさながら同じ事実が眼前に繰返されるかのごとく彼に</p> <p>過度の試練に疲れはてた。彼は眠ることも食ふことも出来なかつた。</p> <p>た。彼の頭には絶えず一つ事が水車のやうに廻つてゐた。（中略）</p> <p>さうとしたが何のかひもなかつた。彼は殆ど凶暴な狩獵に氣をまぎら</p> <p>提婆達多は地獄の苦惱をうけた。彼は殆ど凶暴な狩獵に氣をまぎら</p>

表 2

(六) まとめ

「銀の匙」から「提婆達多」への連続性や発展性に関して、「銀の匙」後篇が比叡山横川の恵心堂で執筆された思想的影響が両作品の共通点として見出された。前者の後篇三十五、天台門下の「朝題目夕念仏」勤行と「称念」による伯母さんの往生について、好意的ではあるが前時代的なものとして描かれた。また主人公は、気の合わない兄を「地獄の道連れ」と評する「厭離穢土」の思想と、「神様や仏様のおいでなる所」「清らかな天の笑顔」に憧憬する「欣求浄土」の心を持ちながらも、後篇三十七に登場する伯母さんを髣髴とさせる老婆から、阿弥陀如来の「本願」に任せず「ちつとばかりの自力」を捨てないことが出家の障りであると諭される、救いを求めても自我へのこだわりを捨てきれない人物として造型される。この主人公像は後者の「仏陀の澄明平穏な精神生活を我にもあらず羨望する気持ち」を持つ一方で「己」が生み出す「生きながらの地獄」に身を沈める「提婆達多」像に繋がっている。

(一) ⑤の関口論で示された中勘助による原始仏教への志向性と併せて浄土門への理解は、本論によって、阿弥陀如来の「本願」等浄土真宗教学が含まれるものの、大まかには天台門であることが判明した。また具体的に中勘助が受容した源信(恵心僧都)の思想について、『往生要集』における「厭離穢土・欣求浄土」「念仏の功德」であることが分かる。特に『往生要集』大文第八「念仏証拋門」の偈文「極重悪人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽」の出典を観無量寿経に遡ることによって、「提婆達多」後篇の阿闍多設咄路王の話に至ることから、「提婆達多」成立に果たした役割は大きい。

(一) ③⑤⑬で示唆された提婆達多の「地獄」のイメージであるが、仏経典や教本では「往生要集」「大毘婆沙論」、文学作品ではダントの「神曲」における地獄のイメージを参考にしたものと考えられる。

中勘助の青年期は山田又吉の卒業論文「エックハルト研究」が示すように西洋哲学や「神曲」に現れたヨーロッパ中世期の思想が日本に大きな影響を与えた。そこから考慮すると中勘助が天台宗や浄土真宗など既存の日本の仏教宗派に限定された思想や原始仏教思想に影響を受けたことは極めてまれな状況であった。

一見すると、原始仏教に触れた結果が反映しない状況だが、世間によく知られた仏陀の説教を改めて創作することは避ける一方で、提婆達多の説法をはじめ人となりについて原始仏教を離れて自由に造型した。創作のアイデアを原始仏教に求めて印度学・仏教学への傾倒を深める端的な作品として本作は位置づけられる。

後記 「二、中勘助の「銀の匙」から「提婆達多」に至る救済の思想」執筆に当たり、大正大学図書館長・天台学研究室の塩入法道先生に天台教学についてご指導いただいたことをここに深謝申し上げます。

註

- 1、「中勘助と仏教童話」『印度学仏教学研究』第五六卷第二号、平成二〇年三月
- 2、『中勘助全集 月報3』「提婆達多」の参考書」岩波書店、昭和六四年一月
- 3、表紙カバー写真が堀謙徳『美術上の釈迦』博文館、明治四三年九月からの引用であるとの指摘は、堀部功夫（註2）の論においてなされた。但し、T.W.RHYS DAVIDS の *BUDDHIST INDIA* 中同レリーフ写真に関する指摘はない。

左図は堀謙徳『美術上の釈迦』口絵写真による。



- 4、『古代インド』講談社学術文庫、平成一六年九月
- 5、『和辻哲郎全集』第二二卷、岩波書店、平成三年三月
- 6、『中勘助の文学』桜楓社、昭和四六年一〇月
- 7、5に同じ

- 8、『銀の匙』改訂版に関する諸点』『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第一四号、平成二〇年三月
- 9、第一書房、昭和一〇年二月
- 10、『中勘助全集 月報3』『中野新井町』岩波書店、昭和六四年一月
- 11、『中村元選集決定版』第一四卷、春秋社、平成四年一月
- 12、「破僧伽における二、三の問題」『印度学仏教学研究』第三六卷第一号、昭和六二年一月
- 13、「私の処女出版」『東京新聞』昭和三〇年一月
- 14、山村光敏編集、比叡山学会出版、昭和一二二年三月
- 15、『心』生成会、昭和四〇年七月
- 16、角川書店版『中勘助全集』一二卷、昭和三八年一月、「古国の詩」収録
- 17、『思潮』二卷一〇号 岩波書店 大正七年一月一日 初出、後に『安倍能成選集』一卷 小山書店 昭和二三年四月二五日収録
- 18、大正七年五月二二日付和辻哲郎より妻照子宛書簡に「今朝博物館の入り口でバッタリ中さんに遇った。明日の朝は中さんに逢ひに行かうと思ふ。(後略)」と中勘助と奈良国立博物館で偶然会ったことが報告された。
- 19、岩波書店、昭和四一年
- 20、中村元他四名編、岩波書店、平成一四年一月
- 21、岩波書店、大正一〇年
- 22、比叡山延暦寺校閲「天台宗における『勤行』について」『天台宗檀信徒勤行経典』、日本仏教普及会、平成七年一月
- 23、木越康・山田恵文「知っておきたい浄土真宗の基礎知識」『大法輪』、平成二四年五月
- 24、平成二七年一月二七日付論者宛書簡における大正大学塩入法道先生のご教示による。
- 25、オルデンベルグ・三並良訳、梁江堂、明治四三年一月
- 26、ケルン・立花俊道訳・南條文雄校閲、東亜堂、大正三年八月
- 27、中村元『往生要集』岩波書店、昭和五八年五月
- 28、註24と同じく塩入法道先生のご教示による

- 29、リス・デキズ・文学博士南條文雄序文・赤沼智善訳、無我山房、明治四四年九月
- 30、日本近代文学館小田切進編『日本近代文学大事典』四卷、講談社、昭和五二年一月
- 31、註15.の中村元の著作に同じ

第二章「犬」

一 「犬」の成立をめぐって

(一) 「犬」の問題点

「犬」の初出本文は当時和辻哲郎が編集を務めた岩波書店の『思想』第七号（大正一一年四月一日発行）に掲載された。但し題名の下に「（未定稿）」との記載がある。初版としては、「島守」を巻頭に掲載し『犬』として岩波書店より大正一三年五月一〇日発行されている。

角川書店版全集と岩波書店版全集との間での本文の相違、特に伏せ字の有無に大きな違いがある。岩波書店版全集第二卷「後記」に、初出における伏せ字箇所¹の列記と底本とした単行本と角川書店版全集本文との校合結果が掲載されている。静岡市に中勘助遺族によって寄贈された資料（これ以降、静岡市資料と省略）の調査より「犬」稿の変遷経過が更に判明したので、ここに報告する。

「犬」論には、作品に描かれた内容やテーマに関わる論考に比し、方法論についての論考が少ないことが挙げられる。

「提婆達多」創作において漱石を意識していたとの指摘が市川浩昭^{註1}によってなされた。大正十三年の秋から昭和六年まで中勘助の身の回りの世話をを行った中島まんの証言^{註2}によると、「又度々きかされました事は、私は私の師と仰ぐ人をほしい、師と仰ぐ人は一人もないと云ふ事は、お仕事のなさる度毎にきかされました」と、中勘助は師による作品批評を求めていたということが分かった。

論者は「提婆達多」脱稿の約二年後に初稿脱稿した「犬」も漱石を意識した作品と考え、擬人化の方法をとる「吾輩は猫である」（以下、「猫」と省略）との比較において方法を探る。

(二) 本文異同の経過

角川書店版全集第二卷収録「犬」の底本について、同書「後記」では触れられていない。しかし、静岡市資料No.013F003（初出への書き入れ稿）の確認から、その資料が底本と確定された。静岡市資料No.013F017（二校）と校正が重なるにつれ漢字の訂正と振り

仮名が書き加えられていったことが分かる。また、静岡市資料 No.019E002 角川書店版全集第二巻（初刷）本文にも更に校正が加えられている。

岩波書店版全集第二巻収録「犬」の底本は初出と「扉に『三二、八、七再稿』とある中家蔵の著者書き入れ本」と同書後記「犬」解説に記載されている。しかし、底本の一冊になったと推測される書き入れ本の指摘は正確でない。同書口絵に「単行本『犬』著者書き入れ」と解説された頁写真に相当する書き入れが残るのは静岡市資料の書籍（大正一三年五月一〇日、岩波書店刊の単行本『犬』書き入れ本）である。同書の扉には黒字で「昭和三十年誤字、句読等調べ済」その横に赤字で「犬モ句読等調べ済三十二年五月十八日 島守 犬 原稿紙に書きかへる」と三行に亘って書き入れられ、「犬」の題字頁（五六頁と五七頁の間）に「三二、八、七 再校 写シカヘノ時尚忘不句読改良スルコト」と赤字で書き入れがある。同書を包んでいた岩波書店名入り茶封筒から岩波書店編集部とやり取りがあったことが分かる。

これより、「犬」本文の変遷の経過は、中存命中に校正可能だったと想定できる範囲で、①初出（未定稿）『思想』第七号（大正一一年四月一日刊）掲載↓②岩波書店版単行本『犬』（大正一三年五月一〇日刊）↓③「句読等調べ済 三二年五月一八日」「三二、八。七、再校」稿↓④角川書店版全集への収録を目的とした初出への書き入れ（角川書店版全集「犬」初稿）↓⑤角川書店版全集「犬」初刷（昭和三六年一月三〇日刊）↓⑥角川書店版全集「犬」二刷↓⑦角川書店版全集「犬」三刷（昭和四〇年八月三〇日刊）と考えることができる。

昭和三二年五月当時、中勘助は親しい人への書簡に、角川書店版全集の準備で多忙であることを綴っている。つまり③は角川書店版全集への収録を目的とした下調べであり、③と④は時期的に極めて近いと考えられる。

中勘助も予測していた風俗壊乱による発禁処分を受け、①は性描写を大幅に伏字した結果、公刊された。伏せ字復元の観点では、③には②の伏せ字部分に復元の書き入れが認められる。④には①の伏せ字部分に復元の書き入れが認められるも、その部分はさらに二重線で消され伏せ字にされている。結果的に伏せ字部分は①よりも増えている。⑤・⑥においても伏せ字部分は復元されなかった。中勘助は、作者の編集意図が多く反映された角川書店版全集において、伏せ字部分を復元させた稿を意図的に世に出さなかった、と言えよう。

中勘助逝去後に伏せ字復元稿を底本とする単行本が岩波書店より発刊された。その変遷は次のように整理される。①・③↓⑧岩波

書店版単行本『犬』第二刷(昭和五八年六月三日刊)↓⑨岩波文庫『犬 他一篇』(昭和六〇年二月一八日刊)↓⑩岩波書店版全集「犬」(昭和六四年一月二二日刊)

⑩に関して、後記「犬」解説に「角川書店版全集に従って振仮名を適宜補った」とあるので、参照した角川書店版全集の刷は不明だが⑤・⑥・⑦いずれかを参照したものと考えられる。

定稿としては、作者の構想通りの表現であるという点では、中勘助が伏せ字を復元した③と考えられる。しかし、自らが編集した全集において、別表のように、多くの部分に校正の手入れを行い④を出したことから、中勘助は伏せ字の存在を作品の完成度と切り離して考えていたようだ。「犬」の場合、もと人間であった犬に夫婦生活を語らせるという内容であり、昭和三〇年に発行者・訳者共に有罪の最高裁判決が出た「チャタレー裁判」の問題点とは一線を画す。時代背景を考慮しても、その当時、中勘助が伏せ字復元稿を世に出すことは可能であった。④ではそれをしなかったばかりか、「あとがき」において「この人騒がせな作品は自分ではよく出来たと思つてゐる」と作品への満足を表している。これらの点から④も作者本位の定稿と評価できる。

(三) 角川書店版全集本文の特徴

岩波書店版全集第二巻後記には底本とした岩波書店版単行本(前節の②)と角川書店版全集本文との校合結果が記されている。この度、④の角川書店版本文初稿(初出への書き入れ)と⑤への書き入れ本の存在が判明したので、前節①と⑥との校合結果について以下に述べる。まず数多い校正箇所として以下の①～⑥が挙げられる。

- ①句読点の削除
- ②漢字への振り仮名・送り仮名の加筆、漢字のひらがなへの、旧仮名の新仮名への書き換え
- ③繰り返し記号「ゞ」「ゝ」、踊り文字「」の文字への置換
- ④「ゐた」↓「た」、「ゐる」↓「る」、「であった」↓「だった」、「である」↓「だ」の置換
- ⑤「が」↓「けれど」、「とはいえ」、「そして」、「とはいえ」↓「しかし」、「けれども」の置換と削除
- ⑥会話部分のカギカッコの削除と行詰め(但し、会話文の前後は一字分空白)

- ⑦ 伏せ字復元後の二重線での削除・更なる伏せ字指示
- ⑧ 助詞「て」「も」「を」「と」の削除
- ⑨ 強調記号の削除
- ⑩ 主語の削除

右の特徴的な箇所を除いた校合結果を次頁に別表1として示す。

⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	No.	
一六四・五	二七・二〇・一六 二一・一〇・一三 二〇・二二・一三 一九七・二二 一九三・二五 一九二・二二 一九〇・一一 一六五・八 一六四・一	一六三・一三	一六三・一〇	一六三・九	一六三・七	一六二・一二 一六二・一三	一六二・一〇 一六二・一一	一六二・五	二一八・一〇 二二二・一三 一六二・三	一六一・九	一六一・二	頁・行（角川版）	別表1
ことに	身體	ごく幼少の頃から	そして暫くするとは	なるとはかならず	厚ぼつたいだぶだぶした	くひあつてゐる様子が、なんだか汚らしい手足と胴體とが絡みあつてゐる様な	椽果樹があつてあたりには枝をひろげてゐる。その逞しい幹におそろしく太い葛籬が這ひあがつて	蘇らすためのだと	とうとう	咀つてゐた	掠略することをもつて	初出への書き入れ箇所	
殊に	體	幼少の頃から	暫くすると	なるとかならず	厚ぼつたくだぶだぶした	くひあつてゐる様子が、なんだか汚らしい手足と胴體とが絡みあつたやうな	椽果樹があたりには枝をひろげ、その逞しい幹に這ひあがつたおそろしく太い葛籬が	蘇らすためだと	たうとう	咀つてゐた	掠略することを	角川版	

③2	一七六・一二	宿営することになった。	宿営することになり
③1	一七六・九 二〇二・一二	そして	さうして
③0	一七六・六 七	忘れようなどとは露ほど思ひはしなかつた	忘れようなどとは露ほど思はなかつた
②9	一七五・七	水がはひつて、一本の	水をいれて
②8	一七四・六	せうことなしに	不承不承に
②7	一七四・三	身重になつているといふこと	身重になつたこと
②6	一七四・二 二一四・四	一伍一什 どうかを気づかふのであつた	一部始終 どうかを気づかはれた
②5	一七三・一四	どうかを気づかふのであつた	どうかを気づかはれた
②4	一七一・一〇	手をとつて	手をとる
②3	一七一・二	とはかぎらなかつたけれど	ではなかつたが
②2	一六九・一二	殆ど宙に浮いて	宙にういて
②1	一六九・二	ことに對する羞恥・ことに對する愛惜	ことの羞恥・ことの愛惜
②0	一六八・五	そして落ちついた濁つた	そして濁つた
①9	一六七・七	とつぷり暮れた。	とつぷり暮れて
①8	一六五・一三	そらしてゐたが、	そらしてた彼女は
①7	一六五・一一	見すゑだが	見すゑながら
①6	一六五・五	ふるはせながら	ふるはせて
①5	一六四・一三	坐	座
①4	一六四・一一	とはいへ聖者は	聖者は
①3	一六四・六	神の寵幸とを	神の寵幸を

54	二二三・一	それとともに	同時に
53	二一七・一〇	本然の傾向に戻った	本然の傾向に悖った
52	二一三・一五	見るばかりである。	見るばかり。
51	二一三・九	藪のなかを	藪を
50	二一三・五	匂がしてごちゃごちゃに互に	匂がごちゃごちゃに
49	二一二・五	噛みついて無茶苦茶にがりがり	噛みつき無茶苦茶に
48	二一二・一	歩いたのだけれど	歩いたのに
47	二一一・一五	ともかく相應の	相當の
46	二一一・一三	運悪くとうとう出会はなかつた	運悪く出会はなかつた
45	二一一・一〇	きゅんきゅんと啼いた	啼いた
44	二〇五・一一	私は逃げそくなつてしまった	逃げそこなつた
43	二〇五・七	後ろのほう	後ろに
42	二〇五・六	間違はず	違はず
41	二〇五・三	間違なく方面を	間違ひなく方向を
40	一九八・七	爪をもつたお仲間うちとして	爪をもつた仲間として
39	一九八・五、六	灰燼のなかにまつ黒になつた死骸がちらばつて、それを	灰燼のなかにちらばつたまつ黒な死骸を
38	一九七・一五	速に	はやく
37	一八四・一二	貴様は何者だ	何者だ
36	一八二・一〇	つぶつた目	くわつとあけ放つた目
35	一八二・七	ことはどうしても出来なかつた	ことは出来なかつた
34	一七九・六	虎のごとくに	虎のやうに
33	一七九・二	特別乱暴な企もしなかつた	特別乱暴もしなかつた

(四) 方法論について

中勘助は、一高・東京帝国大学英文科時代の恩師・漱石の推薦により「銀の匙」とその後篇「つむじまがり」が東京朝日新聞に掲載された幸運な作家である。中勘助自身、漱石から「銀の匙」絶賛の書簡を生前大切にしており、現在静岡市によって保管管理されている。しかし中勘助による漱石の作品に対する評価は決して高くはない。大正六年六月号の『三田文学』に掲載された「夏目先生と私」では、漱石の「猫」に関する中勘助の回想は他の作品に比し多い。猫」が評判になった頃は「併しその頃の私は詩歌ばかりを愛読して散文といふものは見向きもしなかった」、「吾輩は猫である」はその表題からして顔をそむけさせるに十分であつた」と関心外であり、大学入学後も「はじめて『猫』を手にとつてみたが、はじめの百頁内外で厭きてしまったきりいまだにその先を知らない」と述べた。大学の講義中の漱石による、次のような「猫」にまつわる言動もそこには記録された。

また別の先生が「猫」を評して 自分はある中の人物や事件を知つてゐるから面白いがさうでない人にはさほどでないだらうといふようなことをいつたといふ話をして

「そんなんぢやない」

といつた。また遠方の知らない人がそつくり「猫」のまねをして書いたものを送つてよこしたといつた。そして

「なるほどよくまねてあつたが、そんなことをしたつてつまらないぢやありませんか」

といふやうなことをいつた。先生は独創がなくてはいけないといふことを度たびいつた。

これより当時の「猫」の模倣作を漱石自身が「独創がなくてはいけない」と批判していたことが分かる。

その漱石が「銀の匙」に独創性を認めていたことを中勘助自身が同稿で記述している。

先生はまた 子供の時のことを書いたものといへばトム ブラウンやバッド ボーイがあるが書いてある方面がちがふ。谷崎氏の「少年」はああいふもので「銀の匙」とは少しがちがふし「銀の匙」のやうなものを見たことがない といつた。先生は綺麗だ といつた。細い描写 といつた。また 独創がある といつた。私は「独創」といふ言葉をきいて 大学以来だな と思

った。

「猫」受容者による「追随作」約百二十作は日比嘉高^{註3}により「同工異曲もの 飼い猫の視点から主人の家を観察し語るという趣向を借りて、別の世界で同趣の物語を行う」作品、「続編 『猫』の吾輩や他の人物の後日談を語る」作品、「手引き書 専門的な知識を普及させるために、当の知識の対象（養蚕なら蚕、映画ならばフィルムなど）が一人称『吾輩』となって叙述を行う」作品、「タイトル（のみ）の参照 内容は『猫』と直接関係ないが、『吾輩はくである』というタイトルをもつ」作品に四分類され、中勘助同様、漱石山脈の一端を担う内田百閒の代表作『贗作 吾輩は猫である』はそれらの中に含まれる。日比の挙げる追随作の中に「犬」は含まれないが、「猫」を換骨奪胎した「犬」こそ漱石の影響を受けた中勘助が、独創性を駆使した自信作と言えよう。

「犬」と「猫」の作品構造を対照すると次頁の表2の通りである。

⑧権力者	⑦主人公の最後	⑥主人公が体験する暴力	⑤食の記録	④語りの内容	③主人公	②初出時	①作品内の時代
実業家・男爵・軍人	溺死（「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と唱えながらの「大往生」）		猫が行う「蠅螂狩り」「蟬取」と云ふ運動（「鼠狩り」）	猫が見聞きした苦沙弥ら「太平の逸民」の言動	一人称の語り手の猫（「吾輩」）	明治三十八年一月	日露戦争下（明治三十七年六月頃～明治三十八年十一月頃）
「強さ」と「智慧」（犬において）	征服者（娘・僧ら現地人に対し）・主人（孤児である娘に対し）・宗教者（カースト下位の娘に対し）	僧犬・・・嗜殺 娘・・・元の人間の姿に裂けた大地の奈落へ落ちる（涅槃神への祈りの結果）	娘犬・・・死産した嬰兒・人間の壘丸・大きな魚の頭	娘の恋の結末・娘犬が体験した僧犬との望まぬ夫婦生活・僧の破戒と異教徒殺害の経緯・僧犬が望んだ娘犬との夫婦生活	ヒンズー教の僧・娘（共に名前が記されず、犬へと変身を遂げる）	大正十一年四月	ガーンジーのサルタン・マームードのインド侵略下（一九〇一年八月十月頃～一九〇九年）

表2

表2内、項目①について、山田有策^{註4}の指摘を始め、A「猫」では、日露戦争に関する言説が多数認められ、漱石の文明観を窺い知ることが出来る。

中でも小森陽一^{註5}は、「⑥主人公が体験する暴力」にあるような猫によって「運動」と評される種類の狩を戦争のメタファーとして漱石が表現した箇所に注目した。小森は、「鼠狩り」の『吾輩』は自らを『東郷大将』になぞらえ、鼠軍団を『バルチック艦隊』と称し、鼠が姿を隠している『戸棚』を『旅順砲』と呼んでいる。『大運動』としての『鼠狩り』は、日露戦争なのだ」と述べた上で、「大運動でない代りにそれ程の危険がない」「蟻螂狩り」と「蟬取と云ふ運動」の描写に触れ、『吾輩』の語りからは、他者を殺傷する欲望と、強姦における暴力への欲望とが等質であることが見えてくる。「その語りの中にも、性的欲望と連動した描写があらわれてくる」と、作品の時代背景としての戦争と主人公の性暴力への傾倒を「欲望」というキーワードのもと関連付ける。

「猫」では隠喩として表現された戦争と性暴力との関係を顕在化したのが、「犬」と言えよう。「猫」では蟻螂・蟬に暴力を行使する「吾輩」の視点から描写されたものが、「犬」においては被害者である娘（娘犬）の体験として描かれる所に大きな相違がある。

表2内、B「犬」項目①⑥の部分を確認すると、時代背景としての「征服者」サルタン・マームードの軍隊が印度に侵入し、現地人「偶像崇拜者」の文化を破壊していったという大きな暴力が描かれる。その過程で「征服者」である回教徒の青年士官から「現地人」の娘が強姦されるという事件が物語の発端にある。娘が宿した胎児の父親に一目会いたいと神に願掛けに通う途中で出会ったヒンズー教の僧から、異教徒と通じた事を非難され墮胎を強要された上に、さらに強姦される。同民族間での心身両面に及ぶセカンドレイプは、性的執着から僧が自らと娘を呪法によって犬と変身させた後には、夫婦間におけるドメスチックバイオレンスと形を変える。当初はカーストの上位者による下位者に対しての、犬の夫婦になつてからは夫による妻に対しての性暴力が描かれる。

その間に僧は呪法によって恋敵の青年士官を殺し、その報復としてマームードによって町が焼き払われるという事件が起こる。僧犬との間に産まれた子犬を豺に殺された娘犬は逃亡の末、僧犬を噛み殺す。

異民族間の戦争という暴力と、同民族間、同種間、夫婦間の暴力が連鎖して物語は進展する。

表2内、B「犬」項目⑤「人間の牽丸」のように戦争下、飢えた犬がマームード軍により焼き討ちにあった町で犠牲者の肉を食す場面が描写される。これより、「猫」発表と同時期に漱石が『帝国文学』明治三九年一月号に発表した「趣味の遺伝」冒頭の「陽気の所為で神も気違になる。『人を屠りて飢えたる犬を救え』と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満州の果まで響き渡った時、日人と露人ははつと応えて百里に余る一大屠場を朔北の野に開いた」という表現を中勘助が意識下においていたと推測される。この文章中の「犬」を「漱石が忌み嫌った『天下の犬ども』すなわち無教養で傲慢な実業家や役人」^{註6}と比喩表現として捉える説もあるが、言葉どおりに受け止めるならば、飢えた犬が犠牲者の死体を食べる場面は、戦争の醜悪で残酷な実態の象徴表現と言えるよう。

「猫」では「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊つてゐる」と子供に言われるような、餅に食い込ませた歯が取れなくなるという、人

間の食べ物を食べたことによる滑稽が描かれる。それに対し「犬」の場合、恐ろしいカニバリズムが描かれる。堀部功夫は「銀の匙」の表現上の特徴の一つを「視・聴覚だけでなく、嗅・味・触覚をふくめ五官全体へ戦慄的に訴える表現」と述べた。「犬」の表現にもこれは当てはまる。次にそれらの表現を挙げる。

そこで彼女は胎児をぱくりと口にくはへた。で、舌を手伝はせながら首をひとつ大きくふつて奥歯のはうへくはへこんだ。そして二つ三つびゅつと噛んでその汁けを味つたのちごくりと呑み込んでしまった。

それはぬらめいて渋みのある、こりこりしやきしやきした物だった。彼女はあたまし噛み砕いて苦勞して呑みこんだ。むつとする嘔気が出た。

で、大急ぎでぐわつと噛みついて無茶苦茶にがりがり噛み砕いてのみこんだ。彼女は幾度も喉に骨をたててはぎやつと吐き出した。

これらの表現には、「びゅつと噛んで」「ごくりと呑み込んで」「こりこりしやきしやきした」「むつとする嘔気」「ぐわつと噛みついて」「がりがり噛み砕いて」「ぎやつと吐き出した」と、オノマトペが嗅・味・触覚の表現に活用されている。

(五) 三人称の語り

表2内、B「犬」項目③のように、中が「猫」追隨作の多くが採用した一人称ではなく三人称を選んだ理由について、漱石の「文学論」第四編第八章「間隔論」Ivanhoeにおける佳人Rebeccaによる戦況報告場面を例にあげ、説明を試みたい。

漱石の解説を要約すると、通常記―著―読（記は記事、著は作家、読は読者）であるが、作品の幻惑度が高いと著者の存在が読者が忘れて記―読となる。Rebeccaによる戦況報告場面のように、叙述者の語りが生き生きとしている場合、著者と叙述者が入れ替わり、記―著―読となる。さらに幻惑度が高いと記―読となり、著者が疎外視され記―読―著となる。

原子朗は「猫」の一人称の語りを「文体論的には、そうした『神』の立場に近い猫の視点で、たえず作者の精神の構造を読者に感じさせずにはいない。が、そのことは文学としてプラスなのかマイナスなのか、にわかには決めがたい。（中略）私たち読者は

『猫』にひきずりこまれて、たしかに記―読となることもできるものの、指摘してきたように著である漱石の眼光や精神の構造を圏外に放つことはできないからである。猫の姿はあくまで仮の姿であって、そこに著者の生な精神を^{なま}読み取らされることを余儀なくされ

る」^註と論じる。

三人称の語りを採用しながらも、**記** **僧・著** **読** もしくは**記読** **僧・著**という効果を上げている「犬」の表現の一例を次に挙げる。

彼は背面の隅の地面に近いところに明りの漏れる小孔を見つけて、そこへいやな恰好に四つ這ひになつて腹をひどく波たせながら覗きはじめた。

それとは知らず娘は一心不乱に祈願をこめてゐる。うす暗い燈明の光がこちらから半裸の半面を照らしてふんわりした輪廓を空に画いてゐる。しつかりと肉づいてのびのびした身体が屈んだり伸びたりする。むりむりした筋肉が尺攫のやうに屈伸する。彼はその一挙一動、あらゆる部分のあらゆる形、あらゆる運動をひとつも見逃すまいとする。娘はつましく膝をとぢ、跪いてじつと神像を見つめたのち、祈願の言葉を小声にくりかへしながら上体をまげて、両眩と額を地につけて敬虔に平伏する。うなじから背筋へかけて強い弓のやうに撓んで、やや鋭い角をなしたゐしきがふたつ並んだ踵からわづかにはなれる。娘は起きあがる。顔が美しく上気してゐる。今度はかた膝をふみ出し左手を土について身を支へながら、及び腰に右手をのぼして神像に浄水をふりかける。丸丸した長い腕、くぼんだ肱、肉のもりあがつた肩、甘い果のやうにふくらんだ乳房、水水しい股や脛、きゅつと括れた豊かな臀……その色と、光沢と、あらゆる曲線と、それは日々生氣と芳醇を野の日光と草木の薫から吸ひとつて蒸すやうな匂をはなつ一匹の香鬢のやうに見える。

燈明が消えかかつたので娘はかたよせた着物をとつてぐるぐると身につけはじめた。韻律正しい詩がこはれて平板な散文になつた。彼は非常な努力をもつてそこをはなれた。

娘が全裸で祈る姿を僧が覗く場面だが、煽情的というよりも美しい気品が漂う裸体描写である。「ふんわりした輪廓」「しつかりと肉づいてのびのびした」「むりむりした筋肉」「丸丸した長い腕」「きゅつと括れた豊かな臀」など中勘助特有のオノマトペを用いた表現の中で、僧の視点が読者の視点に重なり、**記読**の幻惑の効果が生じている。

(五) まとめ

(二)の結果として、単純に文章量の点で角川書店版と岩波書店版の全集本文を比較した場合、角川書店版は二頁(43×16)字の組み方で約62頁、岩波書店版は二頁(44×16)字の組み方で約68頁というように、角川書店版の方がコンパクトに収まっている。(三)の別表1のほぼ全項目が表現を短く平易にした校正である。中でも③のように怪奇映画さながら起屍鬼の表情を下

ラマチックにした校正もある。これら角川書店版全集本文校正の結果から、本文全体が短くなり、次から次へと驚くべきエピソードが行動中心に語られ、スピード感溢れる展開となった。

(四)に本文中より抜粋した表現にも表れたように、中勘助自身、自身の表現上の特徴とその効果を理解した上で、普通の人間が体験しえない異常な世界に読者をいざなうことに成功している。表2内、項目④のように猫が垣間見た人間の生活を人間のように見聞きし語るといふ擬人化の方法を単純に換骨奪胎したのではなく、元人間だった犬が本能的・外面的には犬の生活、その実、内面的には人間の夫婦生活を語る方法で、「犬」にはひねりと独創がある。表2内、項目⑤「食べ物の記録」にある表現と方法の点により、「猫」が猫に餅やビールなど人間の食べ物を与える場面を描き、猫を人間に近づける方法を採用していたのに対し、「犬」の場合、犬ならではの食行動を描き、人間が犬に近づく臨場感を演出している。娘犬の本能に基づく食行動の場面や怒りに基づき僧犬を噛み殺す場面では、犬としての行動の後に、人間としての内面的葛藤や絶望が現れるという展開となっている。表2内、項目①のように戦時下、非常事態時代の背景も中勘助の場合、主人公の僧犬・娘犬から財産や社会的階級、人間的な繋がりなど全ての属性を奪う設定として有効であった。表2内、項目⑧のように人間世界に存在する階級差が崩れ「力」と「智慧」が尊ばれる犬の世界においてさえも、僧犬は夫婦・宗教等、社会制度を後盾に獣慾を満たそうとする。「猫」が当時のインテリが社会において台頭してきた権力を批判したのに対し、「犬」の場合、戦時下で全てを失った僧犬の中に、無教養で属性を持たない娘犬の視点から、人間の身勝手さを認める構造となっている。「犬」において中は、人間が社会的属性を失った時にさえも持ち続ける自分本位さに痛烈な批判を与えている。その点で「犬」は人間の根源的悪に迫った作品と言えよう。

以上のように方法・構成の両面で、「猫」を念頭に置きながら、中勘助は「犬」において戦時下における性暴力や夫婦間の性暴力、人間の根源的な悪など普遍的かつ深刻な問題を扱った。この点からも、「犬」は伏字の存在とは離れて、中勘助の自信作となつたと考えられる。

二 「犬」における人物造型（一）

日本近代文学では外国の歴史を題材とした作品が少なくない。その多くは作者が収集した資料をもとに史実を検討し、創作したものである。インド史を題材とした作品に関して述べると、森鷗外・大村西崖共著『阿育王事蹟』（春陽堂、明治四十二年一月）をはじめ、仏伝や仏弟子伝等仏教史を題材とした作品が数多い。これには、日本では古来より仏教思想と共に受容してきた仏教史の方が、それを包括するインド史よりも一般的であったという特異な外国文化の理解方法が窺える。

中勘助の作品群の中にもインド史や仏教史を題材に採った作品がある。特に「犬」（初出『思想』大正十一年四月）は、『提婆達多』（初版 新潮社、大正十一年五月）、「菩提樹の蔭」（初出『思想』昭和四年一月）と共にインドを舞台とした作品であることからインド三部作と称される。「犬」の先行研究は、その大多数がテーマを論じたものであり、典拠に関して実証的に論じたのは、「犬」の書き出しを「V.A.Smith: *Early History of India*.」に拠る部分があるのではないかと指摘した堀部功夫のみである。堀部がその際に「中は『犬』の時代背景的記述を歴史書の借用で済ませているわけで、その点『提婆達多』執筆時『参考書は相当読んだけれど目的は小説で歴史ではないのだから結局自由な態度をとった』（角川書店版『中勘助全集』第二巻あとがき）姿勢に通いあう。『犬』において『時代』はそれほど重要を担っていない、ともいえよう」註9と記したように、作品とインド史との関連は問題視されなかった。

平成二四年度に論者が行った静岡市所蔵中勘助関係資料調査の結果、中勘助が創作の過程で参考にしたインド史書の書き入れと作品のモデルが明らかとなった。そこで、本論では登場人物デエラルの人物造型を中心に「犬」の創作にどのようなインド史書が影響したのか調査結果を示し、「犬」とインド史との関連に言及する。

（一）典拠本に表れたアレキサンダー大王東征とマームードのインド侵入

中勘助は下記引用のように大正十一年六月八日付け和辻哲郎宛書簡（岩波書店版『中勘助全集』第一五卷四五―四六頁）で前掲書 *Early History of India*（以下『*Early Hist. of India*と略す）』一三頁の脚注に注目した。

Most of the Greek and Roman notices of India have been collected, translated, and discussed by the late Dr. McCrindle in six useful books, published between 1882 and 1901, and dealing with (1) Ktesias, (2) Indika of Megasthenes and Arrian, (3) Periplus of the Erythraean Sea, (4) Ptolemy's Geography, (5) Alexander's Invasion, and (6) Ancient India, as described by other classical writers
V.Smith の *Early Hist. of India* の脚注（十三頁）に上記の様な事がありました。（中略）上記の本は一つはそれが読みたから

ですが一つは今度書く阿育王の参考にもしたいのです。今、注文しても六ヶ月とみて（此間丸善からさういつてよこしましたから Dipavansa を注文した時）十一月頃でなくては手に入らないとすると、それから読みだして愈筆をとるのはいつの事か、随分じれつたい話です。

同書中の「V.Smith の Early Hist. of India の脚注（十三頁）」の引用元第一章 II Sources of Indian History 見出）Arrian, and others. の本文を以下に挙げる。

Arrian, a Graeco-Roman official of the second century after Christ, wrote a capital description of India, as well as an admirable critical history of Alexander's invasion. Both these works being based upon the reports of Ptolemy son of Lagos, and other officers of Alexander, and the writings of the Greek ambassadors, are entitled to a large extent to the credit of contemporary documents, so far as the Indian history of the fourth century B.C. is concerned. The works of Quintus Curtius and other authors, who essayed to tell the story of Alexander's Indian campaign, are far inferior in value; but each has merits of its own.

以上より、当時の中勘助は *Early Hist. of India* に紹介されたアレキサンダー大王の東征について、特に McCrindle によって翻訳された資料に高い関心を示していることが分かる。静岡市資料 No.062A015 Vincent A. Smith, *The Early History of India Including Alexander's Campaigns*, 3rd. Edition (Oxford at the Clarendon Press, 1914) 中の書き入れ線一三二一箇所（別表㉓）の内、No.6～27 の二二箇所が第二章 ALEXANDER'S INDIAN CAMPAIGN : THE ADVANCE にあり、この結果も中勘助による大王東征への関心の現れと言えよう。この関心の源は、中が当時、作品の『思想』掲載を巡って交流した『思想』編集担当であった和辻であることは、和辻の次のような作品群から分かる。それらは論文「北西印度、波斯、希臘」（初出『思潮』大正七年一〇月）、論文「アレキサンダーの遠征と西北印度」（初出『思潮』大正七年一月）、小説「健陀羅^{がんだら}まで」（初出『讀賣新聞』大正八年三月二〇日（四月一九日）である。「北西印度、波斯、希臘」は紀元前に北西インドに侵入したペルシャ・ギリシャ等の西方文化を歴史的に概観した論文であり、それぞれの文化の特徴的美術、歴史について詳しく解説している。紀元前のインド史の中でもアレキサンダーの東征がインドに及ぼした影響とその過程における大王の人間性の変容について論じたのが「アレキサンダーの遠征と西北印度」である。ここではインドからの帰途に気高さと自制の念が大王から失われていく経緯と共に、その若くしての死について「アリストテレスの力が、彼から去ることによって彼を殺した」という哲学的な解釈が記されている。小説「健陀羅まで」は『讀賣新聞』連載の小説であり、アレキサンダー大王によって征服されたペルシャ王宮を舞台とし、青年武将カリステネスを主人公にする。愛妾タイスの甘言により王宮に火を放つなど君主の気高さを失いつつある大王の周辺に抗争と暗殺の不穏な空気が流れる中、カリステネスは救

世主の出現に救いを求める。ガンダーラの地で涅槃を説く女たちに出会い、その教団に入信を決意した夜、カリステネスは大王暗殺の首謀者として捉えられる、という筋である。

このような作品群の背景には和辻によるアレクサンダー大王の東征への深い関心があったものと推測される。だからこそ、大王東征に関する資料収集の相談を中勘助は和辻に持ちかけたと考えられる。

次いで「犬」のインド史に関する歴史的記述の典拠本を静岡市所蔵中勘助関係資料内に探した。サルタン・マームードのインド侵入についての記載が二冊の書籍に見つかった。別表4として示す。

別表
3

No.	章番号	章名	節名	項目名	ページと行	
1	I.1	INTRODUCTION		Predominant dynasties.	p.6 I.10-I.16	
2	II	THE DYNASTIES BEFORE ALEXANDER 600 B.C.TO 326 B.C.		Persian conquests.	p.37 I.8-I.27	
3				c.500B.C.		
4				Rise of Chandragupta Mauryas.322 B.C.	p.42 I.5-I.12	
5				Accession of Chandragupta.	p.43 I.12-I.23	
6				III	ALEXANDER'S INDIAN CAMPAIGN : THE ADVANCE	
7	Taxila.	p.61 I.17-I.22				
8	Preparation for passage of river.	pp.63 I.31-pp.71 I.				
9	Provision of boats.					
10	Beginning of July, 316 B.C. Reserve force.					
11	Night march.					
12	The battlefield.					
13	The Indian army.					
14	Indian equipment.					
15	Alexander's tactics.					
16	First stage of battle.					
17	Second stage of battle.					
18	Third stage of battle.					
19	Rout of Indians.					
20	Capture of Poros.					
21	The Glausai and Poros II.	p.73 I.8-I.12				
22	The altars.	pp.76 I.28-pp.77 I.				
23	Worship at altars by Chandragupta.					
24	Alexander's Camp ; the Passage of the Hydaspes ; and the Site of the Battle with Poros.	Night march.	p.82 I.27-I.45			
25		Alexander's on interior line..	p.83 I.36-I.37			
26		Battlefield.	p.84 I.9-I.19			
27		Conclusion.	pp.84 I.43-pp.85 I.			
28	V	CHANDRAGUPTA MAURYA AND BINDUSARA, FROM 221 B.C. TO 272 B.C.		Native revolt.	p116 I.24-I.31	
29				Early life of Chandragupta.	p.117 I.3-I.14	
30				Usurpation of throne of Magadha.	pp.118 I.3-pp.119	
31				322 B.C.		
32				Invasion of Seleukos Nikator.		
33				312 B.C.		
34				305 B.C.		
35				Treaty between Seleukos and Chandragupta.		
36				303 B.C.		
37				Achievements of Chandragupta.	p.120 I.9-I.17	
38				Pataliputra, the capital.	pp.121 I.10-pp.121	
39				Palace.		
40				Court.		
41				Chase.		
42				Habits of the king.		
43				Plots.		
44				Military strength.		
45				Arms.		
46				Chariots and elephants.		
47				Size of Indian armies.		
48				New writers.	pp.129 I.19-pp.13	
49				Penal code.		
50				The Sudarsana lake	pp.132 I.14-pp.13;	

51				Imperial care for irrigation.	pp.133 I.16–pp.131
52				Strict control.	
53				Riding regulations.	
54				High degree of civilization.	pp.135 I.13–pp.131
55				Arthasastra describe preMaurya conditions.	pp.137 I.20–pp.140
56				Autocracy tempered by reverence for Brahmins.	
57				The treatise applies only to a small kingdom.	
58				Every kingdom actually or potentially hostile.	
59				No morality in statecraft.	
60				Universal suspicion and espionage.	
61				Employment of courtesans.	
62				Princes like crabs.	
				The duty of a king.	
63				Sale of honours.	p.142 I.7–I.18
64				Penal code.	pp.143 I.21–pp.144
65				Judicial torture.	
66				The Arthasastra a practical manual.	
67				Success of Chandragupta.	p.145 I.4–I.11
68				Indian military organization.	p.146 I.2–I.10
69				298B.C.	p.147 I.1–I.10
70				Bindusara.	
71				Embassy of Dionysios.	pp.147 I.23–pp.144
72				Probably effected by Bindusara.	pp.148 I.28–pp.149
73			Appendix G The Arthasastra, or Kautiliya–Sastra	Maurya age of the work.	p.153 I.5–I.13
74	VI	ASOKA MAURYA		Asoka as Crown Prince.	pp.154 I.1–pp.156
75				Taxila.	
76				Taxilan customs.	
77				Favourable position of the city.	
78				Ujjain.	
79				Asoka's peaceful accession.	
80				273 or 272 B.C.	pp.156 I.17–pp.160
81				Accession ; 269 B.C. Coronation.	
82				261 B.C.	
83				Kalinga war.	
84				Misery caused by the war.	
85				The remorse of Asoka.	
86				Asoka forswears war.	
87				Moral propaganda.	
88				257, 256 B.C.	
89				About 249 B.C. Pilgrimage.	
90				Birthplace of Buddha.	
91				Other holy palaces.	
92				Retrospect in the Seven Pillar Edicts.	pp.160 I.32–pp.161
93				The Council of Pataliputra.	p.161 I.16–I.22
94				Asoka in Nepal.	p.162 I.4–I.24
95	VII	ASOKA MAURYA (CONTINUED) ; AND HIS SUCCESSORS		Dhamma, or Law of Piety.	p.175 I.1–I.28
96				Sanctity of animal life.	
97				Doctrines of re-birth and Karma.	
98				Comparative disregard of human life.	p.176 I.17–I.22
99				Abolition of the royal hunt.	pp.177 I.1–pp.179
100				Code of 243 B.C.	

101			Reverences.	
102			Truthfulness.	
103			Toleration.	
104			Asoka's practice.	
105			Limitations.	
106			True charity.	
107			True ceremonial.	pp.180 l.1–pp181
108			Virtues inculcated.	
109			Official propaganda.	
110			Censors.	
111			Almoner's department.	pp.182 l.17–pp.184
112			Provision for travellers.	
113			Relief of sick.	
114			Animal hospital at Surat.	
115			Foreign propaganda.	
116			Extent of missions.	
117			Protected states and tribes.	
118			Southern kingdoms.	
119			Princes as monks.	
120			Mahendra in Ceylon.	
121			Missions to Hellenistic kingdoms.	pp.188 l.3–pp.189
122			Buddhism became a world religion.	
123			The work of Asoka.	
124			Upagupta.	pp.189 l.29–pp.191
125			Asoka's energy,	
126			and industry.	
127			Character of Asoka.	
128			Samprati ; Buddhist tradition.	pp.192 l.22–pp.193
129			Jain traditions.	
130			Decline and fall of the Maurya dynasty.	pp.194 l.12–pp.195
131			Local Maurya Rajas.	

○「有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもつて畢生の事業として」

別表4の①②③は既に堀部によって指摘済みだが、同項の④⑤⑬における静岡市所蔵中勘助関係資料 No.067A008 Stanley Lane, *Mediaeval India under Mohammedan Rule* (T. Fisher Unwin Ltd. 1917 以下、*Mediaeval India*と略す)の指摘は論者によるものである。

別表4 「犬」本文	Early Hist. of India	Mediaeval India
<p>有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもつて畢生の事業として、</p>	<p>①A few years later(A.D.997) the crown of Sabuktigin descended, after a short interval of dispute, to his son, the famous Sultan Mahmud, who made it the business of his life to harry the idolaters of India, and carry off their property to Gazni.</p>	
<p>紀元1000年から1026年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。</p>	<p>②He is computed to have made no less than seventeen expeditions into India.</p>	<p>④Between the year 1000 and 1026 he made at least sixteen distinct campaigns in India,</p>
<p>いつも十月に首都を発して三ヶ月の不撓の進軍をつづけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、</p>	<p>③It was his custom to leave his capital in October, and then three month's steady marching brought him into the richest provinces of the interior.</p>	
<p>かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行して</p>		<p>⑤in which he ranged across the plain from the Indus to the Ganges.</p>
<p>市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は「勝利者」「偶像破壊者」の尊称を得た。</p>		<p>⑥Year after year Mahmud swept over the plains of Hindustan, capturing cities and castles, throwing down temples and idols, and earning his titles of 'Victor' and 'Idol-breaker', Ghazi and Batschikan.(p.21)</p>
<p>此度彼の馬蹄が印度の地を踏んでから、向ふところ敵はみな風を望んで降つた。</p>		<p>⑦Forts and cities surrendered as the great sultan passed by;</p>
<p>インダス、チエラム、チエナブ、ラヴィ、サトレツチの諸河は難なく越えられた。</p>		<p>⑧One after the other the rivers of India were crossed, Indus, Jehlam, Chenab, Ravi, Sutlej, with scarcely a check.</p>
<p>彼は鬱茂たるヂヤングルをとほして「櫛が髪を梳くやうに」進んだ。</p>		<p>⑨through the thick jungle he penetrated 'like a comb through a poll of hair,'</p>
<p>十二月初め彼はヂヤムナ河に達してマツウラを陥れ、</p>		<p>⑩Early in December he reached the Jumna and stood before the wall of Mathura,</p>
<p>更に東して同月末カナウチに達した。</p>		<p>⑪Pressing eastwards, Kanauj was reached before Christmas.</p>
<p>七つの塞をもつて固められたガンガ河上の大都市は一日にして攻略された。この時波斯の奴隸市場は彼らのため供給過剰に陥つて、一人の奴隸がニシリングで売買されたいふ。</p>		<p>⑫and the seven forts of the great city on the Ganges fell in one day.</p> <p>⑬the slave markets of Persia were glutted and a servant could be bought for a couple of shillings.</p>

- ① A few years later (A.D. 997) the crown of Sabuktigin descended, after a short interval of dispute, to his son, the famous Sultan Mahmud, who made it the business of his life to harry the idolaters of India, and carry off their property to Gazni. (*Early Hist. of India* pp. 382-383)
- 「紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた」
- ② He is computed to have made no less than seventeen expeditions into India. (*Early Hist. of India* p. 383)
- ④ Between the year 1000 and 1026 he made at least sixteen distinct campaigns in India. (*Mediaeval India* p. 18)
- 「いつも十月に首都を発して三ヶ月の不撓の進軍をつゞけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが」
- ③ It was his custom to leave his capital in October, and then three months steady marching brought him into the richest provinces of the interior. (*Early Hist. of India* p. 383)
- 「かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行して」
- ⑤ in which he ranged across the plain from the Indus to the Ganges. (*Mediaeval India* p. 18)
- 「市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は『勝利者』『偶像破壊者』の尊称を得た」
- ⑥ Year after year Mahmud swept over the plains of Hindustan, capturing cities and castles, throwing down temples and idols, and earning his titles of 'Victor' and 'Idol-breaker', Ghazi and Batshikan. (*Mediaeval India* p. 21)
- 「此度彼の馬蹄が印度の地を踏んでから、向ふところ敵はみな風を望んで降つた」
- ⑦ Forts and cities surrendered as the great sultan passed by: (*Mediaeval India* p. 21)
- 「インダス、チェーラム、チエナブ、ラヴィイ、サトレッツヂの諸河は難なく越えられた」

- ⑧ One after the other the rivers of India were crossed, Indus, Jehlam, Chenab, Ravi, Sutlej, with scarcely a check. (*Mediaeval India* p.24)
- 「彼は鬱茂たるヂヤングルをとほして『櫛が髪を梳くやうに』進んだ」
- ⑨ through the thick jungle he penetrated 'like a comb through a poll of hair' (*Mediaeval India* p.24)
- 「十二月初め彼はヂヤムナ河に達してマツトウラを陥れ」
- ⑩ Early in December he reached the Jumna and stood before the wall of Mathura. (*Mediaeval India* p.24)
- 「更に東して同月末カナウチに達した」
- ⑪ Pressing eastwards, Kanauj was reached before Christmas. (*Mediaeval India* p.25)
- 「七つの塞をもつて固められたガンガ河上の大都市は一日にして攻略された」
- ⑫ and the seven forts of the great city on the Ganges fell in one day. (*Mediaeval India* p.25)
- 「この時波斯の奴隷市場は彼らのため供給過剰に陥つて、一人の奴隷がニシリングで売買されたといふ」
- ⑬ the slave markets of Persia were glutted and a servant could be bought for a couple of shillings. (*Mediaeval India* p.25)

以上より、中勘助は複数の英文参考図書の中に、実在の歴史上の人物であるアレクサンダー大王とサルタン・マームードの行状を發見し、作品の歴史的著述に用いたことが分かった。

(二)「犬」の人物造型

「犬」においてサルタン・マームードは、「一〇一八年にマームードがヒンドスタンの著名な古都カナウジのほうへ兵を進めた時のことである。彼の颯風のごとき破壊的進撃の通路にあつてクサカという町があつた。軍隊は行軍の都合上そこに宿営した。そうして、略奪、凌辱、殺戮など、型のごとくあらゆる罪悪が行われたのち、彼らは津波のように町を去つた」(一五九頁)、「夜に入つてマームードの怒と人間の野性がクサカの町にむかつて爆発した。回教徒は全市に放火して灰燼に帰せしめ、逃げまどふ住民を手あたり次第に殺戮した。暗い大きな平野のなかにクサカの町の滅亡する火焰と赤黒い煙とがもの凄く舞ひあがつた」(一八八―一八九頁)と、部下による「略奪、凌辱、殺戮など、型のごとくあらゆる罪悪」を容認し、自らの怒りのために町を壊滅させる残忍な性格として描かれた。

一方、「犬」典拠本である *Medieval India* において、

Mahmud was not cruel; he seldom indulged in wanton slaughter; and when a treaty of peace had been concluded, the raja and his friends were set free. (p.19)

と、めったに冷酷な行を行わなかつたと表現される。この性格の変容は、「犬」においてマームードに近い人物として描かれ、作品全体を通じて影響力を持ち続けるマームードの部下ヂエラルの描写と関連して見る必要がある。

Early Hist. of India 及び *Medieval India* 両書にヂエラルという名の歴史上の人物は現れない。作品に描かれたヂエラルの人物像を次のように整理することができる。

一点目は年若いが身分が高く武功に優れ、マームード軍で敬愛された人物像である。作品本文中の「彼は年はまだ若かつたけれども身分の高い勇敢な騎士であつた。そうして今度の遠征にもたびたび拔群な働きをして敵味方に驍勇を示したし、獲物も運びきれぬほどであつた。赫々たる功名と戦果は彼の心を此上なく幸福にした」(二八二頁)、「夕刻彼らはわづかの形見だけをのこして、身分と勲功の高いヂエラルの遺骸を嘗て彼が天幕を張つたことのある榕樹の蔭に埋め、そのうへに出来るだけ大きな石を置いた。彼らはこの誰にも敬愛された美しい若い騎士の思ひもかけぬ無残な死を悲しんだ」(二八八頁)という描写から読解できる。

二点目として性的欲望を満たすために女性に対して優しく接する色男像が挙げられる。作品本文では、女主人公を凌辱する前も「男は腰をおろして彼女を膝に抱きあげた。そうしてかた手で背後からしつかりとかかえ、かた手で極度の恐怖のために蒼白くなつていゝる彼女の頬をそつとさすりながら、訳のわからぬ異国の言葉でやさしくなにかいいかけた。(中略)そのとき彼は彼女を膝からおろして自分のそばに坐らせた。さうしてそこにあつた果物をむいてすすめたのを手もださずにみたら、彼はふくろをひとつとつて彼女の唇におしつけた。彼女はまごついて口をあけてそれを食べた。彼は愉快さうに笑つて頬ぺたをつついた。そこで従者を呼んで二つの洋盃に酒をつがせ、先づ自分でひと息にのみほしてから、もうひとつのほうの洋盃を彼女の口へもつていった。(中略)甘い、いい匂のする、きつい酒だつた。喉がかつとして、おなかで煮えくりかへるような気持ちをした。男は彼女の手をとつてうへへしたに揺るやうにして拍子をとりながらいい声で異国の唄をうたつた。それをきいてゐるうちに身体ぢゆうがかつかとほつて気が遠くなつてきた。」(一六八―一六九)と誘惑する余裕を示し、その後も「天幕のなかで彼女は裸のまま両手で顔をかくしてしくしく泣いてゐた。男は着物をとつて手つだつて彼女に着せた。さうしてやさしくじつと抱きしめてさも可愛げに、また心から詫びるやうに涙に濡れた眼瞼に口づけた」(二七〇頁)と色ごとくに慣れた所作で女主人公に優しく接する人物として描かれた。

三点目は悲劇的な最期を遂げる人物像である。作品本文には、男主人公の嫉妬を煽つたため復讐の呪である毘陀羅法によつて、「と、解き放たれた入口からぬうつと変なものはひつてきた。それは確に人間の形はしてゐるが素裸で、全身紫色にうだ腫れて、むつとするいやな臭ひがする。そしてつぶつた目から汁が流れだしてゐる。(中略)そしてヂエラルが刀をぬかうぬかうとあせつてゐるうちに相手は突然痙攣的に右手をあげて小刀をぐさと彼の胸に突きさした。ヂエラルはどうと倒れた。そのうへへ折重つて化物の屍骸が」(一八二―一八三頁)と、殺される顛末が記された。

以上三点の特徴を満たす人物像について、「犬」典拠本を再確認したい。戦場における悲劇のヒーロー像とも言うべき第一点目と第三点目の人物造型のモデルとして中勘助が受容とした *Medieval India* に登場し *The story of Mohammad Kasim's adventures is one of the romances of history* (p. 7) と紹介され、七十二年にインドに侵攻したモハメッド・カシム (Mohammad Kasim) が挙げられる。同書中、彼に関する著述は pp. 7-11 に及び、大守アル・ハジヤイの甥としての身分の高さ、一七歳の若さ、イスラム国家をインドの地に建国するべくインドへ赴いた勇敢さは、以下の叙述から明らかである。

Al-Hajjaj, the governor of Chaldea, sent Kutaiha north to spread Islam over the borders of Tartary, and at the same time dispatches his own cousin Mohammad Kasim to India.

He was but seventeen, and he was venturing into a land inhabited by warlike races, possessed of an ancient and deeply rooted civilization, there to found a government which, however successful, would be the loneliest in the whole vast Mohammedan empire, a province cut off by sea, by mountains, by desert, from all peoples of kindred race and faith. Youth and high spirit, however, forbade alike fear and foreboding. (pp. 7-8)

同書では、彼の死を、*The young general's fate was tragic.* (p. 11)と解説し、以下のようにインド王女の父王 Dahir を殺されたことに対する復讐を目的とした讒言の結果と記す。

The story runs that he had made too free with the captive daughters of Dahir before presenting them to the caliph's harim, and that he was punished for the presumption by being sewn up alive in a raw cow-hide.

The young hero had made no protest, never questioned the death-warrant, but submitted to the executioners with the fearless dignity he had shown throughout his short but valiant life. But when the sacrifice was accomplished, the Indian princesses, moved perhaps by the courage of a victim brave as their own devoted race, confessed that their tale was deliberately invented to avenge their father's death upon his conqueror. The caliph in impotent fury had them dragged at horses' tails through the city till they miserably perished, but the second crime was no expiation for the first. (p. 11)

首長の後宮にインド王女を送る前に彼女らを汚したとする汚名をきせられたカシムは生きてまま牛の皮の中に縫い込まれる刑に処せられ死ぬ。カシムの死が讒言であることを告白した王女たちに向けられた首長の抑えられない怒りの結果、王女たちは死ぬまで市中を馬によって引き回されるという刑を受ける。大切な英雄が敵の復讐によって惨殺された怒りを、敵に対して爆発させる点で、首長は史書の記述とは異なるマームードの性格造型に反映したと言えよう。

讒言によるカシムの死の逸話は中勘助以前に森鷗外によって戯曲「ブルムウラ」として『スバル』創刊号（明治四二年一月）に発表されている。中勘助の作品「犬」に登場するインドの架空都市の名前クサカについて、鷗外が明治四三年一月に春陽堂から出版した単行本『黄金杯』に収録した翻訳小説「犬」（原作者 Leonid Nikolaevich Andreev 原題 Kussaka）の中に登場する犬の名前が同名の

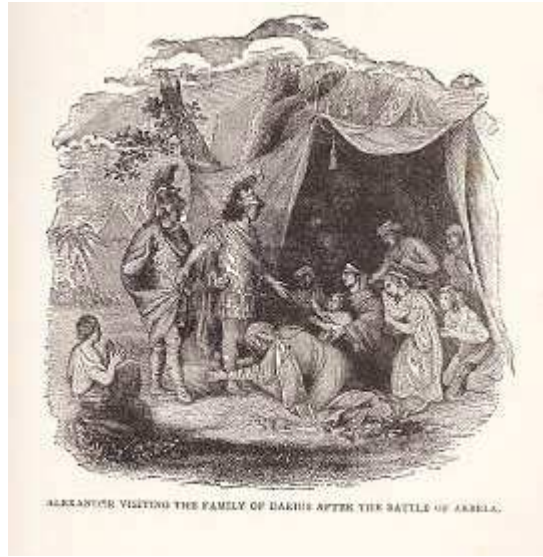
「クサカ」であることは注目に値する。一時は別荘に避暑に訪れた少女レリヤの情けを受けて人間への不信を解いたクサカだったが、秋に少女が別荘を去ったことにより元の境遇に戻るといふ話の内容である。中も「犬」構想に当たり、鷗外の「ブルムウラ」「犬」を参考にしたと推測することができる。

Early Hist. of India は前掲別表 No.1～27 の項目名が示すように、主に紀元前三二七年から同三二三年までの大王のインドにおける戦闘の様子と統治の状況を記した書籍である。大王の人となりを書いた書として、このたび静岡市資料 No.064A018 の S.G.W. Benjamin, *Persia, 6th Edition* (T. Fisher Unwin Ltd. 1920) を発見した。中勘助による書入れは発見できなかったが、同書にはマームードのインド侵入に関する記述はないが、アレキサンダー大王の東征途上におけるペルシャ侵攻の記録があり、大王への関心に基づいて中によって購入された図書と考えられる。そこにヂエラルの性格設定に繋がる大王の好色と言える一面が以下のように描写されている。

Flushed with wine quaffed out of the golden and jeweled goblets of Persian kings, Alexander listened to the wild songs of Thais, a courtesan who had accompanied him from Greece. She bade him immortalize his name by applying the torch to the palaces of Persia. Their flames would emblazon his name with letter of fire on the scrolls of time. (p.145)

Alexander set the example by marrying Roxana, the daughter of a Bactrian prince, but afterwards, to still further orientalize himself and secure the affection of the Persians, accepted the system of polygamy, contrary to Greek usage, and took to wife Statora, daughter of Darius and Parysatis, the daughter of Artaxerxes Ochus. Ten thousand of the Macedonian soldiers, besides nearly a hundred of the higher officers also, married Persian woman. (pp.147-148)

以上のように、アレキサンダー大王はインド東征の過程で侵攻したペルシャで、タイスを側女とする一方で、アルタクセルクセスの娘やダリウス三世の娘だけでなくインドにあったバクトリア領主の娘ロクサーヌとも結婚し、ペルシャの風俗に従って一夫多妻を実行した。同書一五三頁にある「アルベラの戦い後にダリウスの家族を尋ねるアレキサンダー大王」と題された次の図の挿画には天幕の様子と大王の具体的な外見が描写されている。



この挿画で注目すべきは、ダリウス一家の天幕の描写が「犬」本文中のヂエラルの天幕の描写と、アレキサンダー大王の外見の描写が「犬」本文中のヂエラルの外見の描写と、似通っていることである。「犬」本文中、天幕は「小高いところに一本の巨大な榕樹が無数の気生根を立てて美しい叢林をなしてゐる。その蔭にほかのものからすこしはなれてひとつの天幕がある」（二六八頁）、「鎖しの紐をほどこいて顔を出すや否や」（一八二頁）と描写される。挿画において、ダリウス一家の天幕は、画面左の樹の奥に存在する他の天幕と少し離れて、大きな木の幹と枝に紐をかけて張られ、「鎖しの紐」で入口が開閉される構造が認められる。「犬」本文中、ヂエラルの外見は「一人の従者をつれた若い邪教徒の隊長」（二六七頁）で、「綺麗な彎刀」（二六九頁）を帯び、「金糸の縁縫ひをした着物」（二七一頁）を身に付け、「背のすらりと高い、品のいい、強さうな……」（二七九頁）男として描写される。挿画の中の大王は、左腰に彎刀を帯び、豪華な鎧と羽飾りのついた兜を身につけ、一人連れの従者を押しとどめて、自ら天幕内の女性たちに手を差し伸べている。その視線は、画面中央の袖を目に当てて泣いている美しい女性に注がれている。

「犬」執筆時の中勘助が視覚イメージを大切にしていたことは、「犬」創作について語った『提婆達多』のち頭の中で混沌として

たものが仏教辞典で偶然目に触れた鬼形の挿画と、それから知ったビダラ法といふ呪法が触媒的に活いて一遍に纏った。」(角川書店版『中勘助全集』第二巻あとがき)からも明らかである。*Persia* 掲載の挿画が触媒的に働いてヂエラルの造型と天幕の場面設定に活きたと考えられよう。中勘助による紀元前インド史上のアレキサンダー大王への関心は、*Persia* 受容を経て「犬」におけるヂエラル性格と外見に関する造型とマームード軍の天幕描写に反映されたと言える。

マームードの性格についての「犬」と *Mediaeval India* 間の相違について、作品のプロット上、必要な改変だったと考えられる。前節^{註10}において記した通り、「犬」の作品構造として、非常時における人間の本質を明らかにするために、主人公夫婦は種族や職業等人間の社会的属性を失う必要があった。そのためには彼らが生活するクサカの町の全滅が作品設定上、欠かせない。そのためマームードの造型には、戦時下「略奪、凌辱、殺戮など、型のごとくあらゆる罪悪」と町の焼き打ちが行われることが自然である残忍な性格付けがされたのだろう。前作「提婆達多」において、中勘助が耶輸陀羅及び提婆達多の人物造型に際し山邊習學著『佛弟子傳』(春陽堂、大正二年四月)の記述を元に、プロットの展開に合わせて自由に創作したことを前節^{註11}にて明らかにしたが、同様の方法が「犬」のマームード造型でも採られたと言えるよう。

(三) まとめ

「犬」には、中勘助によるアレキサンダー大王東征への関心を端緒とし、インド史に造詣の深い和辻を相談役としてインド史資料を受容した経過が反映された。一一世紀初頭を時代背景とする「犬」の歴史的著述は Vincent A. Smith, *The Early History of India Including Alexander's Campaigns*, 3rd Edition (Oxford at the Clarendon Press, 1914) や Stanley Lane, *Mediaeval India under Mohammedan Rule* (T. Fisher Unwin Ltd. 1917) を出典とした。さらに中勘助は登場人物ヂエラルを、大王に関するペルシャ史料 S. G. W. Benjamin, *Persia*, 6th Edition (T. Fisher Unwin Ltd. 1920) の歴史的記述と挿画とを、また *Mediaeval India* における英雄モハメッド・カシムに関する歴史的記述をもとに造型した。大王東征とカシムのインド侵攻同様、異民族の侵入による戦時下を作品の時代背景に設定したことは、ヂエラルを造型する際に、ヂエラルのいる空間と時間、ヂエラルと現地の女性との関係性を創造することを容易にしたと言える。ヂエラルをめぐる主人公夫婦の小さな物語の背景に、異民族によって度々侵略されたインド民族の苦難の歴史という大きな物語が潜むという重層的な「犬」の構造は、中勘助によるインド史理解の影響として挙げるができる。

三 「犬」における人物造型(二)

(一) 未完の小説「阿育王」と「犬」

中勘助の小説「犬」は、未完の小説「阿育王」に次ぐこと半年を開けず構想されたことは、あまり知られていない。大正一〇年五月四日付、和辻照子宛書簡に「提婆達多は多分来月十日頃になるうかと思ひます。」と記した後、実際の新潮社からの『提婆達多』出版を待たず「阿育王」執筆へ向かっていた事は次の①～⑦の書簡内容から理解できる。

①「ウキスキーを呑みソーセージを食ひ阿育王の筋書きをつくる。これが此頃の私の生活です。」(和辻照子宛 大正一〇年五月一日)

②「Ancient India as described by Megasthenes of Arrian, McCrindle Invasion of India by Alexander the Great, McCrindle Ancient India as described in Classical Literature, McCrindle 上記の本多分お読みになつたでせうと思ひますがよほど大きな本でせうか」(和辻哲郎宛 大正一〇年六月二日)

③「Most of the Greek and Roman notices of India have been collected, translated, and discussed by the late Dr. McCrindle in six useful books, published between 1882 and 1901, and dealing with (1)Ktesias, (2)Indika of Megasthenes and Arrian,

(3)Periplus of the Erythraean Sea, (4)Ptolemy's Geography, (5)Alexander's Invasion, and (6) Ancient India, as described by other classical writers V.Smith の Early Hist. of India の脚注(十三頁)に上記の様な事がありました。(中略)上記の本は一つはそれが読みたいからです。一つは今度書く阿育王の参考にもしたいのです。今、注文しても六ヶ月とみて(此間丸善からさういつてよ)しましたから Dipavansa を注文した時)十二月頃でなくては手に入らないとすると、それから読みだして愈筆をとるのはいいの事か、随分じれつたい話です。」(和辻哲郎宛 大正一〇年六月八日)

④「Ptolemy, Geography ハヤメマス。Cunningham ' Geography ガ注文シテアリマシタカラ。」(和辻哲郎・京子宛 大正一〇年六月八日)

⑤「McCrindle の著書のうち最初にお尋ねした三つは書名があつた通りでいいのだと思ひますから早速注文します。」(和辻哲郎宛 大正一〇年六月一〇日)

- ⑥ 「先日お尋ねしたマックリンドル訳の六部の内名の別らぬ二つはやつと分りました。」（和辻哲郎宛 大正一〇年六月二四日）
- ⑦ 「Atharvaveda の訳は Whitney, Lanman 両氏の英訳（でなければ私には読めませんが）が一番よいといふ事を本でみましたがその訳書の完全な名称を御存知ありませんか。」（和辻哲郎宛 大正一〇年九月二六日）
- ⑧ 「人間が犬になる話をかきはじめました。」（和辻照子宛 大正一〇年一月二日）
- ⑨ 「話はやつとはじめのどつつかの処で、これからだんだん進行しやうといふところですよ。」（和辻哲郎宛 大正一〇年一月三日）
- ⑩ 「人間が犬になる話をかいてゐる。」（小宮豊隆宛 大正一〇年一月六日）
- ⑪ 「犬は遅れたかほりに最初考へてゐたよりはかなり長くなりさうですよ。」（和辻哲郎宛 大正一〇年一月一七日）
- ⑫ 「犬はやつと合版の西洋紙二十七頁漕ぎつけました丁度犬になったところですよ。」（和辻哲郎宛 大正一〇年一月二日）
- ⑬ 「万年筆のお蔭で仕事がかどります。」（和辻照子宛 大正一〇年一月二五日）
- ⑭ 「自然「犬」は三月号に間に合ひかねます。」（和辻哲郎宛 大正一一年一月一六日）
- ⑮ 「今「犬」の第三回めの手入れを終わりました。」（和辻哲郎宛 大正一一年二月二日）
- ⑯ 「それはさうと私は「犬」に付ては全く自信がありません。」（和辻哲郎宛 大正一一年二月一六日）
- ⑰ 「今日でやつと六十枚浄書ができる訳ですよ。」（和辻哲郎宛 大正一一年二月二〇日）
- ⑱ 「「犬」は今度こそ十日一杯迄に間に合はせます。」（和辻哲郎宛 大正一一年三月二日）
- ⑲ 「昨日の晩だったか「犬」の第三手入れを了つた。」（小宮豊隆宛 大正一一年三月三日）
- ⑳ 「『阿育王』はそんなに急にはとても出来さうありません。」（和辻哲郎宛 大正一一年一〇月六日）
- ㉑ 「先日暫く日記を休んでそれから阿育王を書くやうに申上げておきました。がまた日記が書きたくなりましてから一兩日に着手します。」（和辻哲郎宛 大正一一年一二月六日）
- ㉒ 「のみなならず一方『阿育王』がしきりに書きたいから住宅問題が片付けば其方にかかりたい。」（岩波茂雄宛 大正一二年一月二六日）
- ㉓ 「『阿育王』などといふ排泄物は厄介至極です。先づ赤痢、コレラのたぐひか。」（和辻哲郎宛 大正一三年二月一四日）
- ㉔ 「沼のほとりも本にしたいし、阿育王もかきたいし、今やつてゐるものも纏めたいし、詩も作りたいし、本も読みたいし。」（小宮豊隆宛 大正一四年一月二日）

②⑤ 「阿育王はミイラになったやうです。」（和辻哲郎宛 大正一五年一月二八日）

④⑤⑥⑦の書簡内容は、③の内容を受けてのことと考えられる。英文で書かれた参考書をもとにした「阿育王」執筆準備の一方で、⑧⑨⑩では「犬」着手を告げている。大正一〇年一月初旬から「犬」発表（『思想』大正一一年四月）に向けて「犬」執筆と校正が一段落するまで、「阿育王」は書簡中に言及されず、再び「阿育王」の話題が書簡中に登場するのは②④の大正一一年一〇月六日である。そして、大正一五年一月二八日付書簡では「阿育王」執筆断念が示された。未完に終わった「阿育王」執筆のための資料情報元「V. Smith の *Early Hist. of India*」は中勘助が脚注にも注視するように、当時の中勘助が愛読した図書と考えられる。

中勘助による「犬」の出典に関し、堀部功夫は「犬」書き出しとの照合から『提婆達多』の参考書の一つで、中勘助が目を通していたのはほぼ確実である」^{註10}との理由から「V.A. Smith: *Early History of India*」を挙げた。静岡市所蔵中勘助関係資料 No. 062A 015¹ Vincent A. Smith 著 *The Early History of India Including Alexander's Campaigns Oxford at the Clarendon Press 1914* の中に よる書き入れを精査する事ができたので、ここに公表し、書き入れとの照合により、「犬」の構想について考察したい。

（一）静岡市資料 No.062A015 *The Early History of India* への書き入れ

前掲二（一）で触れた別表3に一覧化された静岡市所蔵中勘助関係資料 No.062A015 *The Early History of India* への書き入れから同書Ⅲ章アレキサンダー大王の東征、Ⅴ章チャンドラグプタ朝、Ⅵ・Ⅶ章アショカ王朝に書き入れが集中していることが分かる。

先に挙げた③の書簡には「V. Smith の *Early Hist. of Ind.* の脚注（十三頁）」に「Most of the Greek and Roman notices of India have been collected, translated, and discussed by the late Dr. McCrindle in six useful books, published between 1882 and 1901, and dealing with (1) Ktesias, (2) Indika of Megasthenes and Arrian, (3) Periplus of the Erythraean Sea, (4) Ptolemy's Geography, (5) Alexander's Invasion, and (6) Ancient India, as described by other classical writers」とある^{註11}。このなかで、「阿育王」（論者註 アショカ王）登場の前哨ともいえる、アレキサンダー大王の東征とアショカ王以前のチャンドラグプタ王に関して中勘助は関心を抱いていたと考えられる。

前出の堀部は、「中は『犬』の時代背景的記述を歴史書の借用で済ませている」ことを理由に「犬」において“時代”はそれほど重役を担っていない、ともいえよう」と推測した。中勘助による書き入れがあったアレキサンダー大王・チャンドラグプタ王・アシ

ヨカ王時代のインド史を除いても、わざわざ紀元一〇〇〇年から一〇二六年までのイスラム教徒のインド侵入時代を作品の時代背景に中勘助が選ぶ必然性はない。一一世紀初頭のインド史に中勘助が注目した理由について疑問が残る。

また「犬」は、インド教の苦行僧の性への妄執が描かれ、発表時点で伏せ字があったものの「僧犬」と「娘犬」との性生活の描写が風俗壊乱に抵触し、初出誌は発禁処分を受けている。アレキサンダー大王・チャンドラグプタ王・アシヨカ王への関心が、どのような経緯で夫婦の性生活を描くプロットへ変化したのか疑問が生じる。

特に主人公の一人「百姓娘」の心理描写は緻密である。前作『提婆達多』において中勘助が耶輸陀羅の心理描写に重きをおいて創作したことは、作者書き入れ本の書き入れ箇所精査結果を報告した第二章第一節の通りである。耶輸陀羅に関しては、『提婆達多』の典拠本『佛弟子傳』『第八羅睺羅傳』『第二十二提婆達多傳』註に様々なエピソードや著者山辺習學の解説が掲載されており人物造型の参考になったものと推測される。

一方、「犬」に登場する名もなき「百姓娘」の心理描写には、中勘助と同時代の事件や人物等の影響を見るのが自然であろう。インド史書 *The Early History of India* の記述に肉付けする形で中勘助が「犬」の構想を進めたと考えると、一一世紀初頭のインド史への関心と夫婦生活の描写には、何らかの関連があるはずだ。以上の構想上の問題点を解決する糸口として「犬」構想・執筆時である大正一〇年当時の社会事件に注目したい。

(三) 権力による宗教弾圧

中勘助は昭和三〇年一月刊行の角川書店版『中勘助全集』第二巻あとがきにて「犬」の構想として『提婆達多』のち頭の中で混沌としたものが仏教辞典で偶然目に触れた鬼形の挿絵と、それから知ったビダラ法といふ呪法が触媒的に活いて一遍に纏った」と、鬼形の神仏像と呪法のイメージが契機になったと述べる。前掲⑦書簡中にある *Atharvaveda* とは、バラモンが様々な目的で用いる呪を扱った經典であり、静岡市所蔵中勘助関係資料 No. 051A003 の *The Harvard Oriental Series Vol.7* と同 051A004 *The Harvard Oriental Series Vol.8* は共に Charles Rockwell Lanman 編訳の *Atharvaveda* 書である。中勘助はこれらの書物を通じて呪に触れていたことが分かる。

これらから、「犬」構想当時の中勘助は宗教が漂わせるオカルト的かつ迷信的側面に関心を寄せていたことが分かる。この関心の

源を探ると当時の社会的事件に注目すると一つの特異な宗教弾圧事件が浮かび上がる。それは「犬」執筆直前の大正一〇年二月九日から執筆の興が乗ってきた同年一〇月一四日に亘り、全国紙を賑わした第一次大本教事件である。

各紙報道の経過は以下の通りである。出口なおとその娘婿王仁三郎を教祖とし、なおが神がかりで書く予言書「筆先」を神諭とする新宗教・大本教は、大正一〇年二月一二日に王仁三郎をはじめ幹部が不敬罪と新聞紙法違反で一斉検挙され収監された。同年五月一二日の『東京朝日新聞』（夕刊）には、京都府地方裁判所予審判事が同年五月一〇日に決定した、予審決定書、即ち被告、王仁三郎、海軍機関学校教授で海軍中将だった浅野和三郎、吉田祐定の不敬罪という罪状が記された。それは同教の雑誌『神霊界』に皇室を冒瀆する不敬記事があった事を理由とする。浅野の影響で陸海軍現役将校らの信者がいたこと、「筆先」の予言、王仁三郎の神霊に関する解釈をめぐり大本教は邪教か正教かという議論が生じた点で全国的にも注目を集めた。中勘助に関連ある人物として、一高時代の友人、江木定男の妻万世の異母姉欣々の夫、江木衷弁護士が被告弁護士として公判に参加した。大正一〇年一〇月六日に下された判決は『大阪毎日新聞』によると、王仁三郎懲役五年（不敬罪）、浅野懲役一〇箇月（不敬罪）、吉田各禁錮一箇月罰金五〇円（『神霊界』編集兼発行印刷人として新聞紙法違反）であり、同年一〇月一二日の『東京朝日新聞』は、大本教本宮山神殿は京都府の厳命により近日中に取り壊されるものと報道した。

（四）「犬」の描写と第一次大本教事件報道記事との照応

①異国の侵略に対する憤り

〈「犬」〉

・主人公「インド教の苦行僧」は、「もと町にあつた相応な天祠の主僧であつたが、回教軍が最初にここを通過した際に祠堂は跡かたもなく焼き払はれ、偶像は毀たれ、財宝は掠められ」た結果、「その森のなかに形ばかりの草庵を結んでやうやく信仰をつづけてゐた」。「彼が不倶戴天の異教徒を滅して、印度教と印度の国を往時の繁栄と光明に蘇らすためなのだ」と周囲の人々から考えられている。異教徒の子どもを宿した娘に対して「そちのやうな者を湿婆は邪教徒と一緒に地獄におとされるぢやある。湿婆がなされずともわしがおとしてやるわ」と説法する。

〈第一次大本教事件報道記事〉

・「お筆先中には、(イ)『天下は永くは続かぬぞ、元の昔に戻るぞよ。外国人に化かされて居るがやがて目が覚めるぞよ。足元から鳥が立つぞ』と記載せるものあり」「二、〇〇〇〇を称し奉るに大将なる名を用い、大正七年三月一日発行同雑誌六年旧十一月二十一日表神論として、鬼とも蛇とも悪魔とも例えがたい厭らしい外国の襲来を日本の守護神が見做うて、外国の行き方は良いと申し、上も下も真似して見たり、全然日本の神の国を畜生の玩弄物にせられて仕舞うて」(大本教不敬事件判決文) 大正一〇年一〇月六日 『大阪毎日新聞』

② 宗教者によるまやかしの予言

〈「犬」〉

・「そちの罪業は深いぞよ。明日から七日のあひだ今日の時刻に湿婆にお詫びをしにこい、必ず忘れるなよ、さあ帰れ。穢れた奴」「よし、帰つてこのわしがいふたといへ、もしそちをおこさぬやうなれば彼らまでも誑はれるぞと」「これは祈禱によつて功德をつけられた水ぢや。これを神像にそそいで湿婆の怒を鎮め、またそちの身体にふりかけて穢れをすすぐのぢや、さうして、罪をゆるしてください、見を浄めてください、福徳を授けてください」とお願いするのぢや、そちは身に着けたものはみな脱いでしまはねばならぬ。さうしてこの燈明の消えるまで祈願をこめるのぢや」「神の仰せはわしがとりつぐのぢや。わしのいふことは即ち湿婆の神意ぢや。どれ」「きかずば男を誑ひ殺せとの御告ぢや。何十何百由旬はなれてゐようとも彼奴の五体は蛞蝓のやうに溶けてしまふのぢや。それはそれはむごたらしい苦しみをするぞよ。これ、男のためぢや。おろしてしまへ」「二人は湿婆にめあはされた夫婦ぢや。わしの永年の信心と苦行が思召しにかなうたがゆゑにそれそのかはええそなたをわしにくださったのぢや」「僧」「僧犬」が「娘」「娘犬」にかけた言葉。

〈第一次大本教事件報道〉

・「明治二十五年一月一日に日清、日露等の大戦を予言したと称する筆先が偽作である事は既に明白になり、なお王仁三郎及び澄子、直澄等三人をしてこも『神霊界』に発表されたる神論と筆先の原本を対照せしめ、厳密に審査を遂げた結果、一として原本に一致せるものは発見する事は出来なんだ。」(王仁三郎の自白) (大正一〇年五月一三日 『大阪毎日新聞』)

③ 憑依時の身体の異常

〈「犬」〉

・「彼はそつと娘を抱き起して藁のうへにうつ伏せにねかした。そして上からしつかりとかじりついて猫のつがふやうな恰好をし

た。それから娘の頸窩の毛をぐわつとくはへながら怪しい呪文を唱へはじめた。と、尖った耳の生えた大きな影法師がぼんやりと映った。そしてすーつと消えた。それと同時に彼の五体が気味悪く痙攣しだした。(中略) さう思ふと空恐ろしくなつて死物狂にふりほどかうと身をもがくけれど手足が蛭のやうにへばりついていつかなはなれない。「彼女は突然五臓六腑がひきつるやうな苦痛を感じて背中を丸くしてぎやつと吐いた。わる臭い黒血がだくだくと出た。それは体内をめぐつてゐた僧犬の血であつた。それと同時に彼女はくるくるとまはつてばたりと昏倒した。」

〈第一次大本教事件報道〉

・「守護神が氣を附けよとすると悪霊は二塊となり、咽喉へごろごろに詰め上げ、咽喉が痛くなつて何とも言えぬ苦しみあり、外から見てもぐるぐる上へ上がるのが膨れて見え、それが守護神といろいろ争いますから、私も守護神に応援した処、その悪霊は非常のゴウタクを言うて大勝利のような顔をして出て行きました。(中略) これまで夜寝た時等、頭の毛を引つ張られたり軀を襲われることもあり、監房へ入つてからも頭の毛を引つ張られるような事もありましたが、ちようど悪霊が逃げ去つたのでまた来ると思ひ、(中略) 今朝、散髪を致して貰いました。」(王仁三郎の予審 第二十一回調書) (大正一〇年六月六日 『京都日出新聞』夕刊)

「犬」における娘の変身場面では、「娘の頸窩の毛をぐわつとくはへ」と髪の毛がつかまれる痛みや、「五臓六腑がひきつるやうな苦痛を感じて背中を丸くしてぎやつと吐いた」という苦痛が記された。これは王仁三郎による「咽喉へごろごろに詰め上げ、咽喉が痛くなつて何とも言えぬ苦しみあり」「頭の毛を引つ張られたり」という悪霊の襲来時の描写と似通っている。

(五) 因習的夫婦関係への懷疑

「犬」執筆直前の大正一〇年一〇月二二日から翌一一年三月二日に亘り、全国紙を賑わした第二の事件として白蓮女史失踪事件が挙げられる。それは、伯爵柳原前光の二女であり、九州の炭鉱成金伊藤伝右衛門に嫁ぎ、その美貌と歌人としての才能から「筑紫の女王」と羨望された柳原白蓮が、七歳年下の宮崎竜介との恋愛の結果、夫に対する「公開絶縁状」を新聞に掲載し離婚を迫つた事件である。

報道の経緯として、大正一〇年一〇月二二日の『東京朝日新聞』に「炭坑王の夫を捨てて、新しい愛人の許へ」「愛人宮崎竜介との出会い」という見出しのもと同年一〇月二〇日に失踪した白蓮のこれまでの人生や伊藤との夫婦生活、宮崎との出会いから現在に

至る経過などが伝えられた。翌二三日の『大阪毎日新聞』には白蓮が伊藤へ送った「金力を以って女性の人格的尊厳を無視する貴方に、永久の決別を告げます。」という「公開絶縁状」が全文掲載され、翌二四日の『東京日日新聞』には白蓮からの侮辱に対する伊藤の談話をもとにした反駁記事が掲載された。事態に関して「近代の恋愛観」という恋愛と結婚についての論考を『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』に連載していた厨川白村が「売淫結婚、奴隷結婚の畜生道から離脱して、人間としての自己を全うしおのれの人格を保持するためには、やむを得ない行動であった。」（大正一〇年一〇月三〇日『大阪朝日新聞』）というように、世間一般は白蓮に同情的であった。翌一年二月五日『大阪毎日新聞』は、一二月初旬に白蓮と伊藤との離縁、白蓮、柳原家から絶縁となり、宮崎と新世帯をもったものの、実家に連れ戻されたことを報じた。その後、大正一一年五月二〇日の『時事新報』が同五月一四日に白蓮が柳原家別邸で男児を出産したこと、宮崎竜介が自分の子であるから引き取りたいと話していることを報じた。

この事件は長谷川時雨に大正一一年二月「柳原燐子（白蓮）（二）」（後に『婦人画報』大正一一年五月）を書かせるほど、当時としては衝撃的な社会事件であった。中勘助の嫂末子は、柳原家と同じく華族であった野村家の出身で、当時実兄が白蓮兄と同じ貴族院議員であった。また末子と白蓮は時を同じくして華族女学校に学んでいることなど、中家にとって白蓮は身近な人物であったことが分かる。

（六）「犬」の描写と白蓮女子失踪事件報道記事との照応

①夫婦生活の拒否

〈「犬」〉

・「僧犬は彼女に交尾を迫りだした。最初のうちは産後まだ身体が本復しないといふ口実のもとにどうやら一日のがれをしてゐたが、それはいつまでもとほらなかつた。」彼女は暴力に対する動物的な恐怖に負けてしまった。彼女はききやんきやんと悲鳴をあげた。口から泡をふいた。神意によつて結ばれた夫婦の交りは邪教徒の凌辱よりも遙に醜悪、残酷、且つ狂暴であつた。「ああ、いやだいやだ。なんといふ情けないことだらう。こんなにしているうちに私はきつとこの人の胤を宿してしまふだらう。」彼女は彼をさだめられた夫として承認した。人身御供にあがつた気持で泣く泣く身をまかせた。それがせい一杯のところだつた。」

〈白蓮女子失踪事件報道〉

・「それに伝右衛門氏の淫蕩的な心持ちは止みそうもなく、つい近頃のこと博多の花柳界に一、二の名花として聞えた中券の芸妓屋玉川の抱妓ふな子（加藤てい）と呼ぶ二十歳になる若いのを根引きした。表向きは白蓮夫人の根引きとするも、それはいうまでもない伝右衛門氏の侍女である。」（大正一〇年一〇月二二日『東京朝日新聞』）

・「燦子さんは、お父さまにつかえているつもりだといって、平生からさびしそうにしていたが、（私が）妾になったのもうけだされたのも、奥さまからなので、嫌だけど納得したのに」（博多中券の芸妓ふな子の談話）（大正一〇年一〇月二三日『東京朝日新聞』）

②（自分もしくは相手が）犬であつても寄り添いたいと思う恋人への思い

〈「犬」〉

・「いえいえどうだつてかまはない。ものがいへなくても、私だといふことがわからなくても、私はそばにあさへすればいい。顔を見るだけでも、声をきくだけでもいい。私は尾を振つて、あまえて、あの人の手をなめよう。私はこの姿でせいじつぱいのことをしよう。あの人はきつと私を可愛がつてくれるにちがひない。ああ、さうしよう。私はあの人のところへ行かう」「今度こそ命がけだ。が、もうしかたがない。どうにでもなるがいい。もう一度逃げてみよう。どうしても逃げおほす。さうしてあの人のところへ行く。ああ、私はガーズニーへ行かう。ガーズニーへ行かう」

〈白蓮女子失踪事件報道〉

・『南無帰依仏まかせまつりし一筋の心としらば救はせ給へ』とか『伏姫の犬にてもよし誠あらば身を寄せむとし思ふ一時』とか愛を求めて切なる悲痛の声は、この頃夫人の作として世に現われた。（大正一〇年一〇月二二日『東京朝日新聞』）

③夫への復讐

〈「犬」〉

・「彼女はぐらぐらとした。凄しい女の怒に燃えた。彼女は矢庭にとびかかつて相手の喉くびと思ふところへぐわつとくひついた。僧犬は不意を襲はれて仰向に倒れた。彼女はのしかかつてしかとおさへながら死物狂に頭をふつて喉笛をくひちぎらうとした。そして僧犬がげえげえとかすれた声を出してはねかへさうともがくのをどこまでも嘯みふせてゐた。僧犬はどうとう息がとまつた。ぐたりとしてころがった。」

〈白蓮女子失踪事件報道〉

・「燦子！お前が俺に送つた絶縁状と云うものはまだ手にせぬが、もし新聞に出た通りのものであつたら、随分思い切つて侮辱した

ものだ。見る人によつたら、安田は刀で殺されたが、伊藤は女の筆で殺されたと云うだろう。妻から夫に絶縁状を叩き付けたと云う事も始めてなら、それに本人の手に渡らない前に堂々と新聞紙に現われたと云うのも不思議な事だ。」(大正一〇年一〇月二四日『東京日日新聞』)

(七) まとめ

(一)の中勘助の書簡と(二)の静岡市資料 No.062A015 書き入れ結果より、「古代インドの自然、歴史、風俗、宗教等について全く知識をもつてゐなかつたので困難を極めた。参考書は相當読んだけど目的は小説で歴史ではないのだから結局自由な態度をとつた」と角川書店版『中勘助全集』第二巻「あとがき」において中勘助が述べた「提婆達多」の創作態度は、「犬」の「僧犬」と「娘犬」の造型に踏襲されたことが理解できた。創作準備に入念であった「阿育王」構想の傍ら、中勘助の文学としては異例の速さで着想・執筆されると同時に大変なまめさで編集者へ経過報告された「犬」は当時世間を賑わせた事件を反映して構想されたと推測される。作品の背景として、一世紀初頭のインドが選ばれたことは、アレキサンダー大王の東征に次いで回教徒の東征という社会的混乱期に中勘助が関心を持っていたこと、また呪など宗教のオカルト的側面への関心が絡んでいたことは特筆すべきである。

前節「一、「犬」の成立をめぐる」において述べたように、「犬」の枠組みに相当する大きな構想部分に漱石の「吾輩は猫である」の影響がある中で、本論では、作品のプロットや登場人物の心理描写などより細部を論じた。

歴史書によらず、社会事件の当事者である実在の人物の言動や考え方を参考にしながら、登場人物の構想を練るという方法で中勘助は「犬」で得たといえよう。「犬」では孤児で身分の卑しい「百姓娘」を美貌と歌人としての優れた才能で知られる華族の娘柳原白蓮をモデルとして造型するなど、身分を逆転させたひねりが認められる。大正一〇年一〇月二二日『東京朝日新聞』に掲載された白蓮の歌『伏姫の犬にてもよし誠あらば身を寄せむとし思ふ一時』は、曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』に登場する伏姫と八房に着目し、犬であっても誠があれば身を寄せようとする心細い気持ちを表した歌と考えられる。これは「犬」における「娘犬」が恋人ジェラルや夫「僧犬」に誠実な愛を求めても「獣慾」による性的な関係のみが相手から求められ、そこに精神的な繋がりが見いだせない状況に繋がる。相手が犬であっても寄り添いたいと思う恋人への思いか、自らが犬であっても寄り添いたいと思う恋人への思いかの違いはあるものの「犬」の基調をなす歌と考えられる。

インドは多民族多宗教国家でありその長い歴史の中で国内国外問わず戦争と侵略を経験してきた。中勘助は、異教徒による侵略というインドの社会的混乱期に興味を抱く内に、自国内における社会的事件と交錯させ構想したのではないかと推測できる。「僧犬」のモデルとなった出口王仁三郎も伊藤伝右衛門も我々自身の姿であるということを用意したと言えよう。

註

- 1、「中勘助『提婆達多』とシェイクスピア『オセロ』」『上智大学国文』平成二〇年三月
- 2、渡辺外喜三郎『はしばみの詩―中勘助に関する往復書簡―』勘奈庵、昭和六二年一二月
- 3、「吾輩の死んだあとに―猫のアーカイヴ―の生成と更新」『漱石研究』第一四号、翰林書房、平成一三年一〇月
- 4、「猫の生きた時空」『国文学 解釈と鑑賞』第四四卷七号、昭和五四年六月
- 5、「『運動』という名の殺戮」『漱石研究』第一四号、翰林書房、平成一三年一〇月
- 6、長山靖生『「吾輩は猫である」の謎』文芸春秋、平成一〇年一〇月
- 7、「『銀の匙』風俗図譜」『「銀の匙」考』翰林書房、平成四年五月
- 8、「『猫』の文体序論」『国文学 解釈と鑑賞』第四四卷七号、昭和五四年六月
- 9、「『犬』考」『「銀の匙」考』翰林書房、平成五年五月
- 10、「『犬』の成立をめぐって」『国文目白』第五二号、平成二五年一二月
- 11、「中勘助の『提婆達他』における仏伝」（真鍋俊照編『密教美術と歴史文化』法蔵館、平成二三年五月
註9に同じ）
- 13、無我山房、大正二年五月

第三章 「菩提樹の蔭」

一 インド歌劇「シャクンタラー姫」の影響

「銀の匙」作者として世に知られる中勘助は、神奈川県平塚町在任期（大正一三年～昭和七年）に「童話―特に成人のための童話」と自ら称した作品群を書き始めた。昭和三八年までに書き終えた一二編の作品は当初の作者の命名どおり「鳥の物語」として現在世に知られている。「題材的に私好み、私の持味」と中勘助が呼ぶこれらの作品に先んじて、特定された個人・猪谷妙子（以下、妙子と略す）に捧げた「大人のための童話」である「菩提樹の蔭」が昭和四年一〇月『思想』八九号（岩波書店）にて発表された。

中勘助が童話創作を始めた背景として大正七年七月の『赤い鳥』創刊を機に「大人の芸術の作家達が童話文学に筆を染め出した」時期を経て、一般的に「お伽噺」から「童話」へと子ども向け読み物の名称は変化するに伴い、内容も形式も大きな変化を遂げたことが挙げられる。

しかし中勘助の場合、童話読者の成長に着目し、童話の形式を用いながらも読者を大人に限定する特徴が認められる。

古代インドを背景とする「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」創作に影響を及ぼしたと考えられる。静岡市所蔵中勘助関係資料中のドイツ語訳インド学資料 No.60A010 *Sakuntala Drama in sieben Akten* Kalidasa Hermann Camillo Kellner, Philipp Reclam, Leipzig, 1890 「シャクンタラー 七幕の戯曲」とのプロットの相違から、成立を明らかにする。

(一) 執筆動機及び構想の変化について

中勘助の回想内容を時系列的に並べると以下の通りである。

①「大学生だったとき大阪に友人の山田を訪ねて文楽をおごられ、當時若手で将来に望みをかけられてた榮三^{註1}の朝顔^{註2}に魅了されて人形に恋をし、人形に魂のはひる話をいつかは私流に書きたいと思った。その後約二十年、それが形にならないうちその頃パリにゐた妙子にねだられて作つたのがこれである。妙子は喜んだが、私は別に最初の著想と離れない純日本的なものを書きたいと思つて

る。「あとがき」角川書店版『中勘助全集 第二巻』昭和三六年一月)

② 「十何年もまへのことであつたらう。私は膝のうへにのつてお話をねだるかはいいもののためにひとつの童話^{註3}をかいてやつたことがあつた。そののち月日がたつうちに、彼女は私の膝からおりていつのまにか立派な娘ざかりになつてゐた。で、私はその童話を彼女の年にふさはしく書きかへてやらうとおもつていつものたどたどしい筆をはこんでゐるあひだに、はやくも彼女は若い母となり、自分のかはいいものを膝にのせるやうになつてしまつた。いま巴里の仮住居で揺籃でもゆりながら遙にこの話の完成を待つてゐるであらう若い母に、希くは平安と喜樂のあらんことを。」(『菩提樹の蔭』序文『思想』昭和四年一〇月)

③ 昭和四年三月二五日付け志賀直哉宛書簡

去年三河台の御宅で御馳走になつてからもう一年になりますね。この頃はそちらの御普請でお忙しいのでせうと思ひます、お楽しみでせう。私はこの一月頃でしかいかいづぞやお話した彫像が人間になる話を書きあげました。彫刻のしかたについて知慧をかして頂いたあなたや木下さんに報告しないのがなんだか氣になつてゐましたがそれなりぐづぐづになつてしまひました。御序がありまして木下さんにもお伝へを願ひます。『思想』が休刊になつたのでどこへいつ出すかもまだわかりません。小宮がその内中央公論?へ世話するやうにいつてゐましたが。いつもの例によつてまづ素人に読んでもらひましたが面白いといひました。満点ではないのですが。私は素人評と黒人評とにそれぞれの価値を認めるのです。

以上より、着想から脱稿までの時間経過の中で以下のことが理解できる。着想時は榮三の遣う「生写朝顔話」の文楽人形の影響から、人形に恋をし魂が入る話であつたが、彫像が人間になる話へと構想が変化していったこと、直接的な執筆動機は妙子からの求めであつたこと、『思想』休刊により出版の目途は立たなかつたが完成を志賀直哉へ報告する程、自信作であつたことである。また「菩提樹の蔭」初出時末尾には昭和三年一月二日の脱稿日の記載があるが、これは妙子の結婚記念日であり、実際の完成時期は昭和四年一月頃であることも確認できる。

興行年表^{註4}によると、中勘助の大学在学中の明治三八年九月より同四二年七月までの間の大阪における「生写朝顔話」の興行は、明治四一年九月一七日から同年一〇月一九日まで文楽座で行われたものに限定される。但し、その興行において榮三は乳母浅香・立花桂庵・野千平を遣つている。榮三が朝顔を遣つたのは文楽座での明治四三年六月一七日から七月一二日までの興行であることから、時期に関し中勘助の記憶の混濁が認められる。

(二) 中勘助の親友・江木定男の長女・妙子の当時の状況について

「菩提樹の蔭」発表時期までの妙子略歴は『猪谷妙子伝』^{註5}において以下のように記される。

- 明治四一年八月 父・江木定男、母マセ子の長女として生誕
大正四年四月 東京女子高等師範学校付属小学校入学
大正一〇年四月 東京女子高等師範学校入学
大正一一年六月 父・江木定男咽頭結核の為逝去。(大正七年より、父を看護する母と別れて祖母悦子に訓育される。)
大正一五年三月 東京女子高等師範学校卒業
同年四月 東京女子高等師範学校専攻科英文科入学
昭和二年一月 東京商科大学助教授・猪谷善一と結婚
昭和三年四月 猪谷善一・妙子夫妻洋行のため横浜出港
同年五月 マルセイユ經由、パリに到着
同年八月 長女・洋子出生
昭和四年九月 猪谷一家ジュネーブへ転居
同年一〇月 『菩提樹の蔭』『思想』(岩波書店)一〇月号へ掲載される
昭和五年三月 猪谷一家ドイツ視察旅行へ出発
同年五月 ロンドン出港、帰国の途につく
同年六月 神戸到着、夫・善一の両親と同居、実家母との感情のもつれも解消せず憂鬱な日を送る。夏を祖母の暮す葉山で過ごす。
昭和六年四月 『菩提樹の蔭』(岩波書店)上梓
昭和八年初頭 両親と別居、子どもの養育の為新居に転居

「菩提樹の蔭」発表時期までの妙子と中勘助との関係を善一は前出「猪谷妙子伝」において次のように回想する。

・「女学校時代の故人に関する資料は殆ど皆無である。仲の善かった同窓の奥さん方に想ひ出を書いて貰ほうと思つてゐるうちに、時間がなくなつて了つた。父定男の親友であつた中勘助氏の隨筆に出てくる□子が此時代の彼女の倂を伝へてゐる。」

・「當時江木家は本郷区駒込千駄木町の簡素な家に住んでゐた。結婚までの半歳、僕は幾度となく未亡人と文武二君のお相手に通つたものである。(略)結婚後は洋行の準備もあり、研究にも急しく仲々千駄木町へ今迄のやうに通へぬ上に一人淋しく葉山に居る祖母に対する同情も手伝つて、我儘な婿は始第に母と疎遠になつた。何かの時に言つた忠告が誤解ともなり完全に母を激怒せしめ、若夫婦鹿島立の時は見送つて貰へず、文武二君が母の代理として横浜に現れ、妙子を叱り泣かして了つた。これ全く僕の不徳の致す所であつた。」

・「然し実家からボイコットを喰つた妙子は淋しかつたやうである『私の所には御祖母様と中さんからしか手紙が來ないのでつまりません。しかし御二人共よく私にかいて下さいますから本當に嬉しう御座います』(祖母宛昭和三年九月八日付書簡)」

中勘助が『菩提樹の蔭』を執筆した当時、妙子はヨーロッパで実家と疎遠な中、第一子を養育してゐたことが窺える。中勘助が妙子に宛てた書簡中に、実家の様子を知らせる内容が含まれるのは、実家・実母との不和に起因すると思われる。肉親の援助を受けず異国で初めての子育てに苦勞する妙子への労わりと同情が、「菩提樹の蔭」序文末尾の「いま巴里の仮住居で揺籃でもゆりながら遙にこの話の完成を待つてゐるであらう若い母に、希くは平安と喜樂のあらんことを。」という祈願文の背景にある。お話をねだる子ども心を手紙を求める妙子の中に見出したことも創作の一因であろう。

(三) 中勘助によるインド歌劇「シャクンタラー姫」(著者カーリリダーサ) 受容

当時の中勘助にとって入手可能な「シャクンタラー姫」テキストを次に挙げる。

① *Sakuntala Drama in sieben Akten* (Kalidasa Hermann Camillo Kellner Philipp Reclam, 1890)

② *Harvard Oriental Series The Sakuntala, translated into English from the edition of Professor*

Pischel, with exegetical and illustrative commentary, by Arthur William Ryder (Harvard University Press, 1922)

- ③ Everyman's library *Kalidasa translation of Shakuntala, and other works, by Arthur W. Ryder* (London : J.M.Dent&Sons · New York E.P.Dutton&Co. 1912)
- ④ *Sakuntala, or, The fatal ring, a drama: to which is added, Meghaduta, or, Sacred song* (Kalidasa edited with an introduction by T. Holme W.Scott, 1902)
- ⑤ *Sakuntala* (Kalidasa prepared for the English stage by Kedar Nath Das Gupta in a new version written by Laurence Binyon Macmillan, 1920)
- ⑥ 高楠順次郎『梵文学一原書 第一集 梵語戯曲シヤクンタラ』(文明堂、明治三六年)
- ⑦ 高橋五郎・小森彦次『梵劇 さくんたら姫』(前川文栄閣、明治四〇年)
- ⑧ 森田草平『しゃくんたら姫 戯曲』(日月社、大正三年)
- ⑨ 河口慧海『印度歌劇シヤクンタラー姫』(世界文庫刊行会、大正一三年)
- ⑩ 島準人『サクンタラー姫』『世界戯曲全集第四〇巻 印度支那篇』(世界戯曲全集刊行会、昭和三年)

レクラム社のドイツ文学図書の入手及び講読に関して、中勘助は昭和五年八月八日付、妙子宛書簡で「アンデルセンの月の話は有名なものだよ。私達は高等学校でドイツ語をおぼえたじぶんレクラムのを買って読んだものだ。可愛らしい、いい話だね。」と、述べている。中勘助と同級の安倍能成は第一高等学校第二学年の頃レクラム版『若きウェルテルの悲しみ』を読んだこと、「岩元先生^{註6}にはフォッス(多分 Johann Heinrich Voss であろう)の『ゲーテとシラー』というレクラム版の本を、二年になつてから習つた」こと、「その頃の先生の詞として残つて居るのは、ゲーテとシラーとレッシングを読めと、わざわざレクラムのカタログにするしをつけて下さつたこと」を自伝『我が生ひ立ち』(岩波書店、昭和四一年一月)で述懐する。以上からレクラム版が当時、ドイツ語初心者に相応しいドイツ文学テキストであったことが窺える。①を始め安倍能成が挙げた『ゲーテとシラー』を含むレクラム版ドイツ文学図書が静岡市所蔵中勘助関係資料内中勘助蔵書に^{註7}二四冊存在することから、中勘助が①を講読するに足りる語学力を有し、①を読んだと考えられる。森田草平も⑧に関し「これ又訳者が第一高等学校より大学に移る夏の休暇に、純な敬虔の情から物語体に抄訳したるもの」^{註8}と自らの翻訳状況を述懐する。中勘助による随筆「寺田寅彦、森田草平、鈴木三重吉三氏の思ひ出」の「三十四、五の時だつたらうが、私は森田氏が利根河畔の某寺にゐたことがあるとひとからきいてそこへの紹介を頼みにいつた」と

いう一文から、「大正七年十二月、下総国利根河畔大森町に移る」（紅野敏郎編「森田草平年譜」『鈴木三重吉 森田草平 寺田寅彦 内田百閒 中勘助集』筑摩書房、平成一四年）という草平の転居に関連して、中勘助が草平へ仮寓先紹介を依頼したことが読み取れる。また草平は中勘助の作品「提婆達多」の新潮社における出版（大正一〇年）の仲介をする等、両者は大正期より頻繁に交際したことが窺える。小宮豊隆・志賀直哉ら同窓生の著作を戦災で焼失したこと^{註9}から、静岡市所蔵中勘助関係資料内に所蔵はないが、中が読んだと思われる図書として⑧も挙げられる。

（四）「シャクンタラー姫」解説

「シャクンタラー姫」とはどのような作品か「カーリダーサとその時代」（カーリダーサ作・辻直四郎訳『シャクンタラー姫』岩波文庫、昭和五二年八月）をもとに簡単に解説すると次の通りである。

古代インド・クプタ朝（約三二〇〜約五五〇）に成立した戯曲であり、詩人カーリダーサが「マハーバータ」の中の一挿話を七幕の戯曲に改作したものである。「シャクンタラー」は近代ヨーロッパに紹介されたサンスクリット文学作品の最初の一つである。前出書の解説によると、一般に「シャクンタラー」の伝本は「一、デーヴァ・ナーガリ本（中印本）」、「二、ドラヴィダ本（南印本）」、「三、ベンゴール本」、「四、カシュミール本」の四種あり、中勘助が実際に読んだと思われる静岡市所蔵中勘助関係資料 No.60A010 *Sakuntala Drama in sieben Akten* Kalidasa Hermann Camillo Kellner, Philipp Reclam, Leipzig, 1890 は「一、デーヴァ・ナーガリ本（中印本）」に属する。

英語訳 W. Jones: *Sacontala or the Fatal Ring, an Indian Drama by Calidas*. Calcutta 1789, これからのドイツ語重訳 G. Forster: *Sakuntala oder der entscheidende Ring*. Mainz und Leipzig 1791 フランス語訳 A. Bruguier: *Sacontala ou l'anneau fatal*. Paris 1803 を通して、ドイツのヘンデル、ゲーテ等に歓迎され、殊にゲーテは「ファウスト」の構成とプロローグにその影響の跡を残した。

『ゲーテと読む世界文学』（青土社、平成一八年一〇月）において編訳者・高木昌史は「シャクンタラー姫」に言及したゲーテの文章を取り上げた。その中の一つ『シャクンタラー姫』*Sakuntala* 他」におけるゲーテの言葉は次の通りである。

インドの文学にも同様に言及しないとすれば、我々は非常に恩知らずということになるであろう。その文学が、一方では、きわめて難解な哲学との、他方では非常に奇怪な宗教との葛藤を経て、この上なく幸運な本性によって、生き抜き、この両者（＝哲学と宗教）から、内的な深みや外的な品位にとつて益する以外のものは受容しなかったが故に、一層、驚嘆に値するのである。特に「シヤクンタラー姫」の名が挙げられる。我々は何年もの間この作品に大いに驚嘆してきた。女性の純粹さ、無垢な従順さ、男性の忘れやすさ、母性的な隠棲、父親と母親の息子を介した和合、完璧に自然な状態、等。ここでは、天と地の間、実りをもたらす雲のように浮遊する不思議な町域で、詩的に高められて、神々や神々の子たちによるきわめて日常的な自然演劇が上演される。

また「様々なエピグラム」〔『ゲーテと読む世界文学』〕には「昔の花、後の果実、魅惑し恍惚とさせ、満ち足りさせ養い育てるもの、天、大地、これを一つの名で捉えようとするなら、私は、シヤクンタラーよ、お前の名を挙げる、すべてはこれで語られるから。」というフォルスターから献呈されたドイツ語訳「シヤクンタラー姫」読後のゲーテの感動が詩として収められている。この詩は①の中にも収録されている。

更に「箴言と省察」（前出書）では「シヤクンタラー姫。詩人はここで最高の役目を帯びて登場する。最も自然な状態、最も繊細な生き方、最も純粹な道徳的努力、最も堂々とした品位、最も真剣な神への敬意を代表する者として、彼は果敢にも卑俗で愚かしい対象の中へ分け入ってゆく。」とゲーテの賞賛は作品に留まらず作者カーリダーサに及ぶ。先述したように中勘助が在籍した一高ではドイツ語教師岩元のもとゲーテ等が盛んに読まれていた。中勘助の「シヤクンタラー姫」受容には、一高時代のドイツ語教養教育が影響しているといっても過言ではない。

次に「シヤクンタラー姫」（前出①）のテキストと現代語訳として一般的な辻直四郎訳岩波書店本『シヤクンタラー』を底本とした）の梗概を記すと次の通りである。

①序幕・祝祷：・座頭と女優との対話の中で、カーリダーサの新作「アビジュニヤナ・シヤクンタラム」^{註10}という芝居の上演開始が観客に告げられる。

②第一幕 狩猟：・御者を従え羚羊を追うドゥフシヤンタ王（以下、王と略す）の前に、カンヴァ仙人の下で修行を積む苦行者が現

われ羚羊の命乞いをする。羚羊の命を助けた王を苦行者はカンヴァ仙人の庵に招く。カンヴァ仙人の養女シャクンタラー姫（以下、姫と略す）と二人の友人アヌスーヤとプリヤンヴァダーが、庵の若木に水をやる美しい姿を垣間見た王は姫を見初める。蜜蜂に悩まされた姫を身分を明かさず助けた王は、姫の二人の友人と打ち解け姫がヴィシュヴァーミトラ大仙人とメーナカ仙女との間に生れた娘であることを知る。そこへ苦行者達から、王を探す軍兵たちが苦行林の中で動物と苦行者を脅かしているとの知らせが入る。王は軍兵を止めるため、庵を立ち去る。

③ 第二幕 内緒事：・姫に心奪われ、苦行林を立ち去りがたい王は、將軍に狩を止める事と苦行林に兵士が入らないよう命令する。王は道化ヴィドゥーシャカに、自分の想い人がメーナカ仙女の娘でカンヴァ仙人の養女であると告白する。そこへ羅刹に修行を障げられたカンヴァ仙人の苦行者が現われ、悪魔から庵を守護することを王に依頼する。姫の住む苦行林に留まる口実ができたと喜ぶ王のもとへ、太后からの帰還命令をもった従者が到着する。王は二者択一を迫られて悩んだ末にヴィドゥーシャカを都城に帰還させ、自分は苦行林へ羅刹退治のため出掛ける。

④ 第三幕 恋の享樂：・王は姫への恋に悩む。物陰で姫と二人の友人の会話を聞いた王は、姫が自分への恋煩いに悩むことを知る。二人だけになった頃を見計らい、姫の気持ちを確かめつつ、ガンダルヴァ結婚を申し込み王は姫をくどく。

⑤ 第四幕 シャクンタラーの門出：・王は姫を娶り、一旦都城に帰還する。残された姫は養父と王との帰還を待ちわび、放心状態である。姫は無意識のままガンヴァ仙人の庵を尋ねてきた怒りっぽい大仙人ドウルヴァーサスを無視する。非礼な行いの姫に対し怒った大仙人は「恋人はお前を忘れてしまおう」と呪詛する。二人の友人が急いで仙人に許しを請うた結果、「二人の思い出の品を王が見たら呪が解ける」と大 仙人は言い残して去る。二人は、別れの際、姫の指に王が自分の名前を刻んだ指輪を嵌めたことからその指輪が呪を解く鍵だと考える。王が約束どおりに林へ戻らないことを怪しむアヌスーヤのもとへ、姫の養父ドフシャンタ仙人が帰宅し、姫が王の子供を身ごもったこと、姫が仙人の勧めで輿入りすることが知らされる。姫が王の元へ嫁ぐことを許したカンヴァ仙人は、門弟に姫と出かけるように告げ、姫と永の別れを惜しむ。二人の友人は、ドウルヴァーサスの呪を思い出し、王が姫を忘れていた場合、王からもらった指輪を見せよと声を掛ける。

⑥ 第五幕 シャクンタラーの否認：・王の城へ王の子供を身籠った姫とカンヴァ仙人の門弟が現われ、王と面会する。カンヴァ仙人による祝辞が門弟から伝えられても、姫と会っても、王は姫と結婚したことは勿論姫を思い出すことができない。王の振る舞いを非難するカンヴァ仙人の言葉に身に覚えの無い王は当惑する。姫は王から贈られた王の名を彫った指輪を王に示そうとするが、沐浴所

で落としたらしく見つからない。王とのロマンスを語る姫を王は拒む。王に騙されたと嘆く姫に王室付き祭官が、出産まで自分の家に留まるよう声を掛けようとするが、仙女が光となって現われ、姫を連れて消える。

⑦第六幕 シャクンタラーとの別居：、捕まえた鯉の腹から王の名前を刻んだ指輪が発見され、それを売ろうとした漁夫が盗みの疑いで王の前につれて来られる。指輪を見た王は姫を思い出す。姫の母メーナカ仙女の友人ミシュラケーシーは都城の侍従から王が指輪を見て姫との結婚を思い出した結果、姫を拒んだことを後悔し春の祭りを取り止めた経過を知る。道化ヴィドゥーシヤカと姫の絵姿を鑑賞しながら姫との思い出を語る王の前へ、インドドラ天の御者マータリから、天上にいる悪魔の群れを退治する協力をインドラ神が求めていることが伝えられる。王はマータリの車に乗り天界へ向かう。

⑧第七幕 大団円：悪魔群を退治した王はインドドラ天の歓待を受けた後、マータリの車に乗り地上に向かう。帰途、王は聖者マータリと妻アディティが苦行するキンプルシヤ山に到着する。聖者に敬意を表したいと王はマータリの車を下車する。そこへ二人の苦行女に追いつけられながら一人の少年が登場する。転輪聖王の手相を少年に認めた王は少年の素性を苦行女に尋ねる。少年と王が似ていること、少年が王に逆らおうとしないこと、少年と王が同じブル王族であること、本人及び両親以外のものが手にすると蛇になり嘯む少年の護符を王が拾うことができたことを苦行女はいぶかしがる。そこへ身をやつし苦行する姫が現われ、少年が王の息子であると王に告げる。王は姫に指輪によって姫との結婚を思い出した仔細を語る。聖者マータリと妻アディティに拝謁した王は、マータリから姫を思い出せなかったことは呪詛によるとの説明を受ける。カンヴァ仙へ夫婦の再会と父子の初対面の次第をマータリが使いをやって知らせる。妻子を伴って帰還の途につく王へマータリは地上の繁栄を約束し、王は弁財天やシヴァ神への祈禱で応える。

(五)「菩提樹の蔭」(以下項目上部に●を付し、略す)と「シャクンタラー姫」(以下項目上部に○を付し、略す)との対照

類似点として次のことが挙げられる。

- ・ 古代インドが背景であり、インドの自然や動物・風俗(ガンダルヴァ婚など)が描かれる。
- ・ 女主人公は美しく可憐で父親(●当初実父、後に養父・○養父)によって養育される。
- ・ 神罰や呪詛によって主人公男女の一方が、もう一方を愛した記憶を失う。

- 女主人公は、二人の愛の記念品を失う。(●自ら割る。○沐浴中に落とす。)
- 主人公のうち、捨てられた一方は、失望の日々の中、二人の間にできた子どもを養育する。
- 二人の愛の記念品を見ることによって、主人公のうち愛を忘れた一方が、もう一方もしくは二人の間にできた子どもへの愛を思い出す。

相違点として次のことが挙げられる

- 平易な言文一致体の文体。作品末尾に登場する歌謡の歌詞のみが古文表現を用いた美文調。
- 原作は歌曲と科白で構成される。翻訳作品全体に占める劇中歌の割合が高い。美文調の文語文が多用される。
- 耶摩にチューラナンダの還魂を祈願したプールナは代償に自分の寿命を差し出す。耶摩との約束を口外すると神罰が当たるよう、事前に警告されたが、師父からの憎しみと恋人からの不信を解くために誓いを破り、両者からの信用を失うという神罰を被る。一旦罰が下ると、罰が一生消え去ることはない。
- 恋に心を奪われたシャクンタラー姫の悪気の無い過失に対し、大仙人は王が姫を忘れるよう呪詛する。呪詛を解くための方法は、二人の約束の品を王が見ることと予言されている。偶然と苦行の結果、最後に呪詛は解ける。
- プールナは生地を追われ貧しさの中、苦労を重ねながら一人で娘を育て、最後に母親に逢わせる、自分一人は生地 of 菩提樹の下で亡くなる。対照的にチューラナンダは、産み捨てた子どものもも忘れて歓楽な結婚生活を送り、物質的かつ精神的に満足な生活の末、自分の娘を胸に抱き死を迎える
- シャクンタラーは天界の苦行に身をやつし苦行者の助けによって息子を育てる。一方王はマータリの求めに応じて天界で魔物と戦う苦難を経、天界でシャクンタラーと再会し、転輪聖王と予言された息子と初対面する。
- プールナとチューラナンダの思い出の事物は、チューラナンダが割ってしまった浮き彫りと二人が子どもに名づけようと決めていたピッパラヤーナという子どもの名前。

○ シャクンタラーと王との記念の品は、王の名前を彫った指輪。

● プールナは、自分の死後における遺児の行く末を心配し神の加護を祈る。

○ 王は、転輪聖王のような立派な世継ぎができることを神に祈る。

● 結末に、母による捨てた娘への愛情が復活するが、男女の主人公間の愛情は蘇らない。

○ 結末に、男女の主人公間の誤解が解け愛情が蘇り、初対面の父子間に親愛の情が湧く。

● プールナの家族全てが死に果てる悲劇的結末。

○ 神々への篤い信仰の代わりに地上での王家の繁栄が約束されるハッピーエンド。

(六) 中勘助が説く「無条件の愛」と「菩提樹の蔭」のプロット

「菩提樹の蔭」に関し中勘助は妙子へ次に引用した「妙子への手紙」収録書簡より時系列的に説明したことが窺い知れる。

・「今度の手紙には、母性愛、家庭の幸福を主張して私の独身主義に対して嚴重な抗議を申込んできたね。『シリアス マター』が起りそうな勢だね。だがすこし見当ちがいだよ。」(昭和四年一〇月三〇日付)

・「だしぬけだが、いつぞやの手紙にあなたは私のあなたに対する愛情を盲目的といったね。確かにあなたに話すときに私自身そういう言葉を使ったこともあつたがそれはあとで取消して『無条件』と訂正しておいたつもりだ。(中略) 私はいかにあなたが可愛くともそのためにあなたを正体を見損うようなことはいやだ。ただあなたの正体がどんなであろうともそのままが可愛いというのだ。わかつた？しかし私も御覧のとおり凡夫だ。なかなか自分の思うように明明察察ではあり得ないが私はまあ『盲目』に対する盲目的な反抗者だね。」(昭和四年一二月九日付)

・『菩提樹の蔭』お気に入って何よりだ。あなたのために書いたのだからあなたがつまらなくてはしようがない。」(昭和五年二月一六日付)

自分の子どもと対面し「徒に己の欲情の満足のためにこの世に生れいでしめることの罪深さを知って恐れ慄いた」プールナに、当時独身主義を貫いていた中勘助の姿を重ねた為、妙子は母性愛と家族の幸福という観点から作品批判をしたに違いない。「見当違い」と中が述べる背景には、プールナを道徳的罪悪感を抱く人ではなく自覚の人として描く意図があったと考えられる。

プールナは、恋に迷って神の掟を二度破り、師父と恋人の信頼を神罰によって失った後、己の不幸な境遇を自分の愚かさに帰し、自分を捨てて他の世間的成功者である男性と結婚してもチューラランダの幸福を祈る。このプロットには中勘助が説く「無条件の愛」が反映すると理解できる。善良な「凡夫」が、人間の弱さを基点として「我のない愛」を得るに至るまでの経過は、チューラランダとピッパラヤーナの二人の存在に対するプールナの責任の自覚と反省の日々として描かれる。神話的かつ迷信的な要素である神罰を描きながらも、プールナは自己責任に目覚めた近代人として造型されたところに「大人のための童話」の意図があると考えられる。

(七) 昭和五年三月二日付書簡における小宮豊隆の「菩提樹の蔭」批評への反応

小宮に対する中勘助の主張を次に引用する。

チューラランダが男をおいて嫁にゆく理由を君のいふやうにすることは少しも差支へないし、またそのほうが普通であると思ふ。併し僕がああいふ風にしたのはまたその理由があるので、今詳しく書くことはしないが、僕の一つの気持（といつておく）が全篇を貫いてゐるのだ。だからあすこをかへると前後もそのやうにかへなければならぬ、別の作になる訳だね。

チューラランダの結婚は「彼女はその美貌と、多額の持参金と、そうして他人のためにあやまられたその境遇に対する同情から」「すこしはなれたグンツールの市の確かな商人」へ嫁いだとその経緯が作中描写される。新しい婿の事業に投資し金銭的な成功を得、幸福のさ中で父親であるナラダが亡くなる話の展開から、ガンダルヴァ婚が失敗に終わった後ナラダに安心を与える結婚相手をチューラランダが選択したことは、チューラランダが処世術を身につけたことを示す現実的なプロットである。

この現実的な構想が、チューラランダと対照的に、捨てられたプールナの童話的な純粹無垢さと自省する道徳的な内面性を際立た

せる。小宮豊隆は「この我のない愛の奇跡を美しく描き出している」^{註11}とこの作品を解説したが、チューラナダの無反省かつ無自覚な生き方とプールナの感傷的で無欲な生き方が作品末尾まで対比されることによって、主要な登場人物たちが同時に死を迎える結末が、カタルシスとなる。

「菩提樹の蔭」着想の契機となった「生写朝顔話」もヒロイン深雪の美しい姫姿から朝がほのやつれた瞽女姿への零落が哀れである所に美があり面白さがある。(二)で確認したように明治四一年の「生写朝顔話」を中勘助が見たと推測するならば、後の名人榮三が遣っていた人形は乳母浅香であり、この興行での見せ場は乳母と深雪の悲壮感溢れる死別場面であった。「菩提樹の蔭」において、プールナとその両親、チューラナダとその生母、プールナとチューラナダ、プールナ・チューラナダとピッパラーヤナ等、男女の主人公と親しい者との死別が頻繁に描出される点で「生写朝顔話」の影響が認められる。

「菩提樹の蔭」の結末が悲劇であるところに、神々の祝福で大団円となる「シヤクンタラー姫」と異なる静謐な透明感がある。「シヤクンタラー姫」を基にした宝塚歌劇団脚本家・岸田辰也による翻案戯曲「歌劇 シヤクンタラー姫」^{註12}が大正十一年一月に発表され、同年五月一日から三一日まで花組公演として第一歌劇場で上演された^{註13}（昭和五年六月一日から三〇日まで雪組公演として再演された）。それは二場の場面設定に基づくグランドオペラ形式であった。内容は次の通りである。悪魔の呪いを受けたシヤクンタラーは結婚の証拠である指輪を失ったことから王ドウシヤンタから計略を図ったといとまれ死刑を宣告される。指輪が見つかり王が記憶を取り戻したときに既にシヤクンタラーは処刑されていた。当時、この悲劇的ドラマが宝塚ファンに受け入れられて人気を博したことは、昭和十一年六月号・七月号の『歌劇』における劇評や読者からの反響からも窺い知れる。

中勘助がこれら『歌劇』に目を通したかは未確認であるが、悲劇的結末を歓迎する時代思潮があったことと、「シヤクンタラー姫」が既に一般化していた背景が認められる。

(八) まとめ

『赤い鳥』読者であった妙子^{註14}の成長に併せて、「童話」が大切にしてきた「直観力の鋭い、神経の鋭敏な子供にも分からない筈はない」「真に美しいもの、真に正しいこと、また、悲しい事実といふもの」^{註15}を師弟、恋人同士、夫婦、親子といった人間の関係性の中で描いたのが「大人のための童話」としての「菩提樹の蔭」である。換言すれば、中勘助が妙子に向けた「無条件の愛」の具

体的解説であり、プーデルナが持つ美点、即ち自覚自省など近代人的価値観と社会生活をする上でなさざるを得ない虚偽や技巧を悪と認識する純真無垢さを賛美した作品といえる。

また、「菩提樹の蔭」に「シヤクンタラー姫」が影響を与えたと思われるプロット上の設定を散見することができた。しかし、「菩提樹の蔭」が悲劇であることに、「死のない生、衰えることのない栄え、さういふものを心から楽しむことはできない」^{註16}という中勘助の価値観と美意識が強く働くのである。

二 「菩提樹の蔭」の成立をめぐって

中勘助関係資料を保存管理する静岡市によって中勘助の蔵書リストが研究者に公開された平成二一年以降、論者は中勘助の作品における印度学資料・仏教学資料の受容研究を行ってきた。筆者は平成二四年四月より静岡市所蔵の中勘助手沢本及び原稿推敲箇所調査を担当することにより、より具体的に、作品の参考図書及び全集掲載本文に至るまでの推敲の経緯を確認できるようになった。

これら静岡市所蔵の中勘助関係資料をもとに、本論では前節の補足事項として「菩提樹の蔭」の成立過程と、印度学・仏教学資料の受容を明らかにしたい。

「菩提樹の蔭」はインド三部作と後年称された作品群の内、昭和三年一月二〇日に書かれたと初出末尾にある。初出は昭和四年一月一日刊岩波書店発行の雑誌『思想』八九号である。

(一) 先行研究一覧

先行研究として、作品のテーマに触れたものに関し次に挙げる。

①小宮豊隆「解説」『菩提樹の蔭・提婆達多』角川文庫（昭和二七年三月三日の脱稿日記載）

「提婆達多」に描かれた我にもとづく異性間の愛・親子間の愛が、中勘助の述べる「仏陀の慈悲」に連ならないと指摘し、「我が幾度も濾過されたのちに、この世界を一つに繋げる大きな愛」に近づいていけること、『菩提樹の蔭』では中勘助は、別の方面から、この我のない愛の奇蹟を描き出している」ことを述べた。

「菩提樹の蔭」について触れたのは最後の一文のみであるが、その後の「菩提樹の蔭」論に幾度となく引用される「愛の奇蹟」を描いた作品という読みを提示した。

②関口宗念『『犬』『菩提樹の蔭』に於ける愛』初出『聖和』（聖和学園短期大学紀要）第二号（昭和三二年一月）後に私家版『中勘助研究』（平成一七年五月一〇日 創英出版）収録

「犬」「菩提樹の蔭」を愛の物語と述べた上で、遂げられぬ愛の悲劇と、それを貫こうとする愛の真心を描いたこと、人間の犬への変身、還魂という伝奇的構想、という共通点を挙げる。相違点として、「犬」が女の情熱的な愛の物語を基調とし、英雄的性格を

持つ登場人物、激しい対立葛藤、「死」が最後の解決として描かれたこと、「菩提樹の蔭」が男の観照的な愛の物語を基調とし、平凡な幼馴染の恋、「死」が出発点であり、第二の「死」が最後の解決として描かれたことを挙げる。

インド三部作の最後の作品として、三作品共通のテーマを「性と愛の相克」と指摘した。「提婆達多」後編におけるアジャータシヤトルの「性を呪いつつ性から生まれる愛に迷うアジャータシヤトルの苦悩は仏陀について救われた」という苦悩の様相を、「犬」では「犬の娘が僧犬との間に生まれた子犬を、愛憎の矛盾を抱きつつ、本能的に愛撫する」という「アジャータシヤトルの苦悩の再現」として描いたと、言及する。

「菩提樹の蔭」では「愛のために神を冒瀆し、そしてまた愛のために神との誓約を背いた後の彼の愛は次第に性の匂いを失い」「愛はようやく性の絆から脱しようとしている」と考察した。

プールのわが子やかつての恋人に対する思いを「限りない献身と静かな諦観に満ちた愛の祈り」と認め、三部作の最後に作者は「愛を、人間を、従って自己を、運命の大河に浮かぶ凡愚自然の相として諦観する」視点を得たと評価する。

古代インドに取材した点、作品の内面的主題の両面から、「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」をインド三部作と初めて規定した論考。仏教者（仙台市内の真宗大谷派寺院徳泉寺住職）として中勘助の仏教思想について触れ、その後の仏教者による観念的な中勘助インド三部作評価の軸となった。

③藤原久八『菩提樹の蔭』考『中勘助の文学と境涯』金喜書店、昭和三八年五月

「我のない愛の奇蹟」を描いた同時代の文学として、作品の背景は異なるが同じ彫刻師を主人公とした幸田露伴の『風流仏』概要が紹介された。「無私の愛」について中勘助の日記体随筆「街路樹」中の「私は近頃になって真に、それこそ真に、愛することの喜びを知り得たように思う。私の愛が漸く無私になったからであろう。それはただ愛することによって充たされる。そこには獲得の焦慮もなければ保持の不安もない。それは奪うこともなければ奪われることもない。」を引用した。

①の小宮の論を補うような論である。「風流仏」と詳細な比較が行われなかった点が残念と言えよう。

④奥山和子『中勘助の思想』（同氏が日本女子大学文学部国文学科に昭和四二年、提出された卒業論文を基にした私家版 奥付に出版年月日記載はないが、平成二五年の著者聞き取りにより昭和四四年頃出版と推測される）

②の関口論との影響関係はないが、インドを舞台にした小説という共通点、三作の内容に相互の進展が見られることから、「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」をインド三部作と名付け、それらの作品に現れた「恋愛」「家族」「宗教・道徳」「美」に関する思想を説明し

た論である。プールの愛は「己のため」であり、このように「人間らしき」が顕現された結果、「前二作で形式的なものを打ち砕いて、その中に残った、古くて新しいまことの愛の姿を求めた」作品であると位置づけた。「父一人・娘一人の構成のくり返し、韻をふむようにして用いる言葉や文章」との指摘は示唆的である。

⑤渡辺外喜三郎「小説から童話へ『菩提樹の蔭』」『中勘助の文学』桜楓社、昭和四六年一〇月

「菩提樹の蔭」の前書きを引用し、インドに取材した点は共通するが「提婆達多」「犬」と異なり、「大人のための童話」としての位置づけを提示した。「銀の匙」に描かれた「静かにして美しい平安への悲願」が自然の成り行きとして本作に至ったと述べる。

『鳥の物語』の主題である「大人のための童話」の一つとして「菩提樹の蔭」を位置付けた点が特徴的である。

その他、「菩提樹の蔭」所収『現代文学全集第七五巻 中勘助内田百閒集』（昭和三一年六月二五日、筑摩書店）解説（河盛好蔵）、『日本の文学第一六巻 長塚節 鈴木三重吉 中勘助』（昭和四四年九月五日、中央公論社）解説（山本健吉）、『昭和文学全集第七巻 梶井基次郎 牧野信一 中島敦 嘉村磯多 内田百閒 中勘助 広津和郎 瀧井孝作 網野菊 丸岡明 森茉莉』（平成元年五月一日、小学館）解説「中勘助 人と作品」（三好行雄）等が挙げられる。

続いて作品の典拠に関する論を挙げる。

⑥竹長吉正『授業に生きる教材研究』三省堂、昭和六三年五月

師漱石の「道草」との影響関係を示した。具体的には

ナラダは（略）おきまりの「チューラナダ おまいは誰の子だ」をいつて、彼女がもう飽きあきしてゐる答へをくりかえさせた。「お父様の子」という箇所が、「道草」の健三と島田夫妻の「御前の御父さんは誰だい」「御前の御母さんは」と問いを繰り返す場面との類似性を示した。

影響関係については疑問の余地があるが、後述するようにこの場面の指摘は重要といえる。

⑦木内英実「中勘助の『菩提樹の蔭』成立におけるインド歌劇『シャクンタラー姫』の影響」『小田原女子短期大学研究紀要』第三七号、平成二〇年三月

「菩提樹の蔭」執筆の契機と関わった人物（江木妙子・山田又吉）を紹介し後述する資料060A010（当時は資料目録のみ閲覧可能）カーリダーサ作 *Sakuntala Drama in Sieben Akten* を中勘助が受容する社会的背景を解説し、代表的な日本語訳『シャクンタラー姫』（辻直四郎訳 岩波文庫）と「菩提樹の蔭」とのプロットの比較を行った。また、執筆の動機になった文楽の「生写朝顔

話」が「菩提樹の蔭」の女主人公造型に及ぼした影響に触れた。

⑧木内英実「中勘助と仏教童話」『印度学仏教学研究』第五六卷第二号、平成二〇年三月

「菩提樹の蔭」執筆背景としてカーリダーサ作『シヤクンタラー姫』、小泉八雲作『バカワリ』『閻魔王』等の受容を示し、印度学仏教学資料の受容を和辻哲郎・宇井伯寿ら研究者を通して行っていたことを指摘。

⑨堀部功夫『菩提樹の蔭』と古典』『国語国文』第七九卷第六号、平成二二年六月

木内が⑦で言及した「生写朝顔話」と「菩提樹の蔭」との比較を詳細に行い『古今著聞集』における。登場人物の名前が「提婆達多」の典拠本であった山邊習學『佛弟子伝』を出典とすることを指摘した。オウデイスの「変身物語」に大理石像に魂が入るピグマリオン神話の存在、『古今著聞集』の影響の指摘もある。

論者が日本比較文学会第七〇回全国大会（平成二〇年六月二二日 於大妻女子大学）における研究発表「中勘助童話におけるインド文学の影響」レジュメ（同日配布）に記したように、「菩提樹の蔭」前半の重要なプロットである彫刻に魂の入る話について、オウデイスの「変身物語」に大理石像に魂が入るピグマリオン神話を典拠とする説に筆者も賛成する。『佛弟子伝』を典拠とする登場人物の名前に関しての指摘は見事と言えるが、なぜそれらの作品から発想を得たのか、実証がさらに求められよう。

(二) 本文異同

本作品は、初出（『思想』第八九号 昭和四年一〇月発行）から初刊『菩提樹の蔭』（岩波書店 昭和六年四月五日）、角川文庫『菩提樹の蔭・提婆達多』（昭和二七年三月三〇日）、角川書店版『中勘助全集』第二卷（昭和三六年一月三〇日）、岩波文庫『菩提樹の蔭他二篇』（昭和五九年二月一七日）、岩波書店版『中勘助全集』第二卷（平成元年一月二一日）という、順番で公表されてきた。

角川書店版『中勘助全集』全一三卷（刊行 昭和三五年〜同四〇年）は、和辻哲郎・小宮豊隆・中勘助自身が編者として名を連ねているが、和辻の逝去もあり、実際は中勘助自身が自らの代表作を納める目的のもと編集を担っていたことが、中勘助関係資料の作者直筆メモより分かる。当初の構想は、編年体・全八巻構成(012F008)・A～Fの六案(012F009)のうちa,b二案(012F010)であった。

巻ごとの収録ページ数も作者自らが決めていたことが次の静岡市所蔵中勘助関係資料図1 (No.012F008の一部)からも理解できる。

この角川書店版全集を編むためにインド三部作の他の二作品にも手入れを熱心に行っていることから、『菩提樹の蔭』(岩波書店 昭和六年四月五日)、022H027 角川文庫『菩提樹の蔭・提婆達多』三版(昭和二十九年二月二〇日)、への書き入れ箇所を再考する。句読点の整理及び作者好みの漢字への修正(例 奇麗↓綺麗) 以外の朱筆を次頁の別表1に示す。

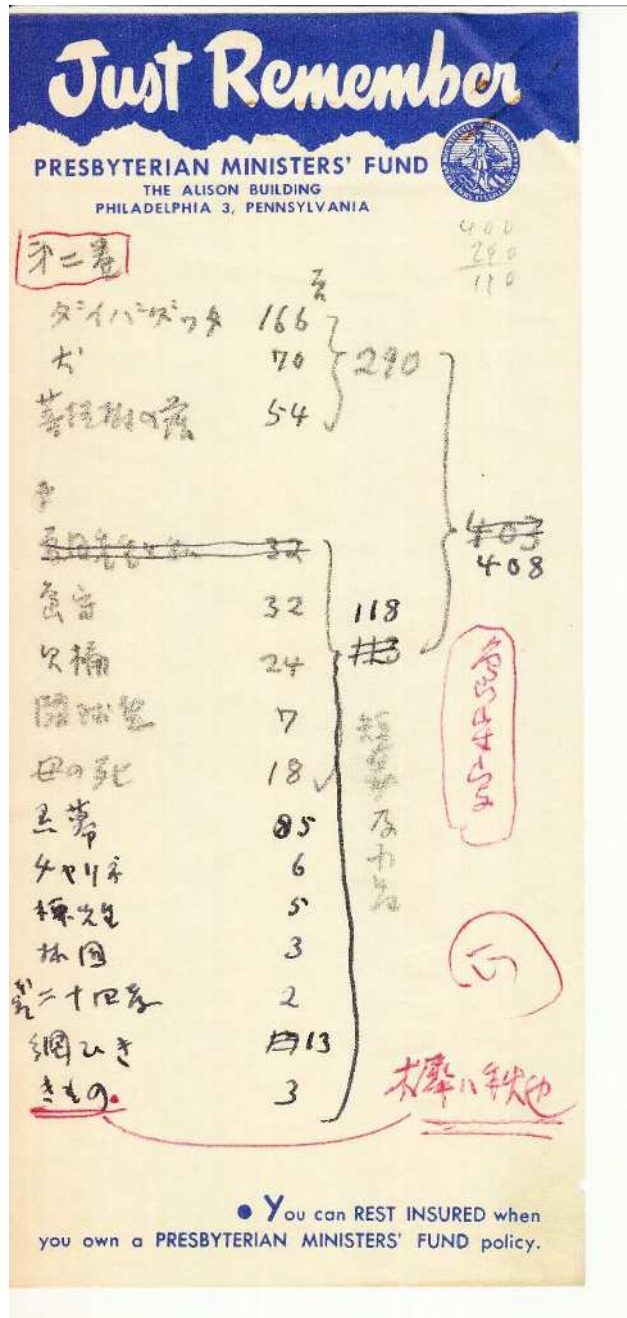


図1

No.	角川文庫頁
1	022F027書き入れ
2	もつてあたので、もつてたゆえ
3	報↓報ひ?
4	役目であつた。↓役目で、
5	恵まるる↓恵まれる
6	気持ちがいいので、↓気持ちよがよかつた。
7	飽くことなき恋↓親のない恋
8	抑へきれなくなつて↓抑へきれなくなり、
9	古い習慣にしたがつて↓古い習慣にしたがつひ
10	愛情そのときは↓愛情——そのときは
11	過ぎし日↓過ぎた日
12	チューラナダが、あつと↓チューラナダが、あつと
13	わしもうんといはう↓わしも うんといはう
14	思つて、後姿↓思ひ、後姿
15	我にかへつて↓我にかへり
16	できなかつた↓できなかつた
17	目のあたり神の誓の↓目のあたり神の誓ひの
18	彼女は、「この場合になつて、」↓彼女は「この場合になつて、」?
19	「すつかりさびしい」?
20	「よい思ふものを」?
21	きくことにしたが↓きくことにした。が
22	かへらなければならなかつた↓かへらなければならぬ、
23	故郷には、とはいへ↓故郷は、
24	その匂、その涙み↓その匂ひ、その涙み
25	ビツバラヤーナ↓?ビツバラヤーナ
26	悩ましき↓悩ましい
27	耶摩の恵か↓耶摩の恵みか
28	とはいへ↓さりながら、しかし
29	ビツバラヤーナ↓?ビツバラヤーナ
30	ではなかつたが↓ではなかつたけれど
31	ビツバラヤーナ↓?ビツバラヤーナ
32	愚かな父の
33	新しき血は↓新しい血は
34	纏へる玉の緒↓纏つた玉の緒
35	二つの詩の上に、「同大活字」の指示書き有
36	会話の上部に?が付く
37	「奥様。ただいま」↓「奥様。ただいま」
38	「はい。アマラヴァアテイー」↓「はい。アマラヴァアテイー」
39	「奥様。たうとう」↓「奥様。たうとう」
40	「はい。ただ」↓「はい。ただ」
41	「さう。それなら」↓「さう。それなら」
42	「スندگانリや。なんていひ」↓「スندگانリや。なんていひ」
43	「奥様。さきほどの」↓「奥様。さきほどの」
44	ビツバラヤーナ↓?ビツバラヤーナ

別表
1



図2 文面



図2 宛名面

(三) ピッパラヤーナの名前への遡巡

別表1 No.25 29 31 45にあるように、ピッパラヤーナという名前の使用が仏教資料中に登場するか、中勘助は角川書店版全集収録時に再考している。静岡市資料No.094SB022友松あきみち(神田寺住職・友松円諦の息子)からの葉書(昭和三四年三月七日消印)を図2として次に掲載する。

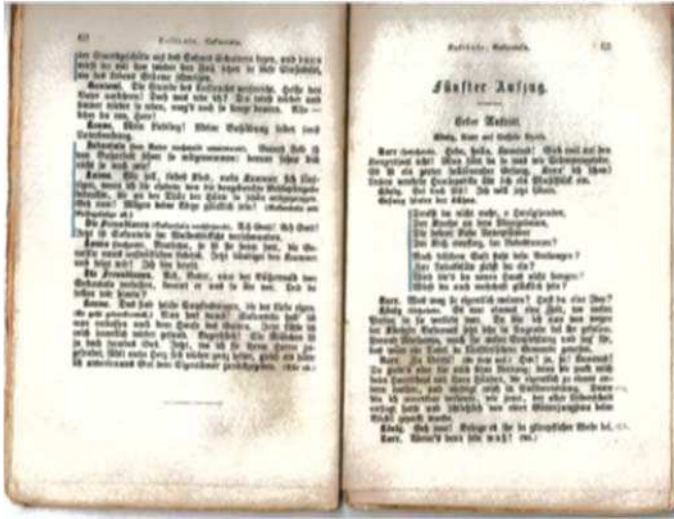


図 3

(四)「シヤクンタラー姫」再考

また「菩提樹の子」という意味女兒の名前を中勘助の求めに対して探し、一般的な女兒名を書き記している。

(一)⑨で堀部は『佛弟子伝』における大迦葉の記載から、ピッパラヤーナは大迦葉の幼名であるとの説を示したが、葉書中の友松の言葉によると「父にも調べてもらっていませんが、ピッパラヤーナという名前はどこにもないようです。」との言葉に加え「Pippali 大迦葉の幼名」と記していることから、堀部説には再考の余地がある。

中勘助が角川書店版全集を編む際に、「菩提樹の蔭」において、ピッパラヤーナの名前にこだわりを持っていたことが明らかになったことから、この作品の成立に当たり「名前」が大きな意味を持っていたといえよう。

静岡市所蔵中勘助関係資料 No.60A010 *Sakuntala Drama in sieben Akten* (Kalidasa Hermann Camillo Kellner Philipp Reclam, 1890) の作者書入れ箇所について、書入れ箇所は図3の通り、青鉛筆での傍線と鉛筆での訳語の書入れであり、青鉛筆による傍線は全部で一一一箇所に及んだ。資料の全ページ数が一一一頁と少ない資料ながら、書入れの多さは他資料に類を見ない。それらの傍線箇所の表現と「菩提樹の蔭」には、(一)⑦の筆者の論で既に示したプロット上の影響関係だけでなく、次のような比喩的表現の影響関係が認められた。日本語訳は内田賢太郎氏による。

①少女の肉体的成長の描写

「プリヤンヴァダー それはあなたの胸を膨らませる若さのせいなのですよ。」(静岡市資料 No.60A010p.18 1.12-13) 「王 若くみずみずしいお体も、肩の上でやわらかな結び目をつくり、胸のかたちをかくしてしまうような衣服では、その美しさも増してはくれな」といふものです。それではまるで、花が色枯れた葉の窪みに隠されているようなものです。」(静岡市資料 No.60A010p.18 1.16-19) 「チューラナダの胸にならんだ禁断の果はいつしかまとはれた衣のかけにふくらんだ。彼女のなりのよい肩のゆりかたにも、かはゆい足の運びにも、娘らしいしながそふやうになつた。」(岩波書店版『中勘助全集』第二卷二三五頁)

②まだ見ぬ父の名前を知る子ども (*Sakuntala*) と生き別れたわが子の名を知る母 (「菩提樹の蔭」)

「少年 ぼくのお父様はドウフシヤンタ様です。あなたではありません。」(静岡市資料 No.60A010p.104 1.18)

「ピッパラヤーナ? おおピッパラヤーナ! まあピッパラヤーナ! さうピッパラヤーナつていふの」(岩波書店版『中勘助全集』第二卷二七六頁)

③神の加護のもとで、子どもを得た喜びを表す際の子どもを果実に例えた表現

「王 わたしの望みは甘い果実を実らせたのだ。稲妻を操るインドラ天は、ひよつとしてこのことをまだご存じないのであるまいか。」(中勘助関係資料 No.60A010p.106 1.23-25)

「耶摩は散りすぎた青春の夢の花をもとの枝にかへすかはりに、その花の結んだ果を彼にさづけたのであつた。」(岩波書店版『中勘助全集』第二卷二六四頁)

これらの他、青鉛筆による傍線箇所を中心に本文を再確認すると次のようなプロット上の類似点が再発見された。

④親を証明する子どもが身につけたお守り

「第一の苦行女 ああ偉大なる王様、おききください。この中には「不敗の草」という名の菓草が入っております。この子が生を受け

たとき、マリーシャからこの子へ送られたものなのです。この薬草は地上に落ちましたが、ただこの子のご両親とこの子自身を除いては、誰もさわればしません。」(静岡市資料 No.60A010p.104 I.1-4)

「チューラナンダは(中略)子供の頸にかかつてゐる護り袋にしては大きすぎる袋に目をつけた。さうしてその口紐をゆるめてなかの物をとりだした。そこにはあの浮彫が、昔の姿が割れたままに仕上げられてあつた。」(岩波書店版『中勘助全集』第二卷二七六頁)

⑤親子の再会の折の装束は苦行姿・巡礼姿
「待つ間あせらず、色なき喪服に身を包まれて、しゃくんたら姫は轉ぶが如くにして来れり。夫に棄てられし妻の務めなりといふ勤行の厳しさに、豊かなり頬の肉は落ちて、東ねし黒髪は纏れて肩を掩へり。」(森田草平譯「しゃくんたら姫」四九八頁、『十字軍の騎士』改造社、昭和五年三月三〇日)

『奥様。ただいま子供をつれた若い巡礼がまゐりまして……』(中略)『奥様。さきほどの巡礼が子どもをおいてつてしまひました。』(中略) やがてだまされてやうやく泣き止んだ子がしゃくりあげながら召使に手をひかれてきた。痩せこけて発育のわるい体に粗末ながらさつぱりとした麻衣をまとつてゐる。」(岩波書店版『中勘助全集』第二卷二七二―二七五頁)

(五) 父親の責任

論者は(一)⑦において「生写朝顔話」が「菩提樹の蔭」へ及ぼした影響について解説した。角川書店版全集第二卷のあとがきにある「大学生だつたとき大阪に友人の山田を訪ねて文樂をおごられ、當時若手で将来に望みをかけられてた栄三の朝顔に魅了されて人形に恋をし、人形に魂のはひる話をいつかは私流に書きたい」との一文をもとに解き始めた。

堀部は(一)⑨において「生写朝顔話」大井川の段に『古今著聞集』の松浦佐用姫の引用を見、佐用姫石化が「菩提樹の蔭」チューラナンダの石化に影響したと述べ、神の定めた通りの死を迎えた結末から「神の強さと人間の弱さ」の葛藤をテーマとして挙げた。

中勘助が最も親しんだ文樂は、という堀部が引用した中勘助の詩「文樂座」に表現された「小太郎」「朝顔」「弁慶」「義経」「静御前」「忠信」が主な役の作品だけではない。(四)②④⑤の要素を含む文樂作品「傾城阿波の鳴門」^{註17}の受容を中勘助は「銀の匙」前篇十二中に「大日様には方々のお寺にあるやうに柿色や花色の奉納の手拭のさがつた掘りぬき井戸があつて、草双紙に阿波の鳴門のお鶴がもつてる曲物の柄杓が浮いてゐた。」(岩波書店版全集第一卷二二頁)と記す。

お鶴が登場する「傾城阿波の鳴門」の代表的演目である第八「巡礼歌の段」を引用する。

お鶴が幼い頃に生き別れた母親お弓と西国巡礼途上のお鶴が出会うが、お弓は夫十郎兵衛と共に明日とは知れぬ命であることから、親の名乗りを行わない。そのくだりは次の様に示される。

「巡礼歌 補陀落や。岸うつ波は。三熊野の。那智のお山に。響く滝つ瀬。」年は。やうやうとをどの道を。かけたる。笈摺に。同行二人と記せしは。一人は大悲のかげ頼む。「ふる里をはるばる。ここに。紀三井寺。花の都も。近くなるらん。巡礼に御報謝」と。言ふも誑しき国なまり。「テモしほらしい巡礼衆。ドレドレ報謝しんぜう。」と。盆に精の志。「アイアイ有難ござります」と。言ふ物ごしから爪はづれ。可愛らしい娘の子。定めて連衆は親御達。「国は何国」と尋られ。「アイ国は阿波の徳島でござります。」「ムム何じや徳島。さつても夫はマアなつかしい。わしが生れも阿波の徳島。そしてとと様やかか様と一所に巡礼さんすのか。」「アイエエ其とと様やかか様に逢たさ故。夫でわし一人。西国するのでござります」と。聞てどふやら気にかかると。お弓は猶も傍に寄り。「ムムとと様やかか様に逢たさに西国するとは。どうした訳じや夫が聞たい。マア其親達の名は何といふぞいの。」「アイどふした訳じや知らぬが。三ツの年に。とと様やかか様もわしをばば様に預て。どこへやら行かしやんしたげな。夫でわたしは。ばば様の世話になつて居たけれど。どふぞとと様やかか様に逢たい顔見たい。夫で方々と。尋ねて歩くのでござります。とと様の名は阿波の十郎兵衛。かか様はお弓と申します。」と。聞て吃驚りお弓が取付。「コレコレアノとと様の名は阿波の十郎兵衛。かか様はお弓。三ツの年別れて。ばば様に育られて居たとは。疑ひもない我娘」と。見れば見る程稚顔。見覚の有額の痣。ヤレ我子なつかしやと。言はんとせしがイヤ待しばし。夫婦は今もとらるる命。元より覚悟の見なれ共。親子といはば此子に迄どんな憂目がかからふやら。夫を思へばなま中に。名乗だてして憂めを見んより。名乗らで此戻すのが。却て此子が為ならんと。

〔近松半二浄瑠璃集 二二〕三五五―三五六頁、国書刊行会、平成八年四月〕

ここには、五②⑤の類似点が認められる。子どもは巡礼姿、父母の名前を知っており、それを聞いた母親がわが子と確認するといふプロットである。

そこにはあの浮彫が、昔の姿が割れたままに仕上げられてあつた。チューラナンダはしげしげと子供の顔をみた。姿を。手足を。髪の毛から爪の先まで。チューラナンダの胸はたかまつた。彼女は声をふるはせながらいつた。

「おお おお いい子だね。私がかはいがつてあげるからね。かはいさうに。私のいふことがわかるかい。かはい子や。おまいの名はなんていふの」

「ピッパラヤーナ」

やさしくいたはれたためにやつと安心した子供はさう答へてかすかに笑顔をみせた。

「ピッパラヤーナ？ おおピッパラヤーナ！ まあピッパラヤーナ！ さうピッパラヤーナつていふの」

チューラナンダは父の名母の名をきかうとはしなかつた。

と、巡礼の子供が語る自らの名前「ピッパラヤーナ」が「菩提樹の蔭の恋がたりに、もしも二人のあひだに子供ができたならばこの思ひ出のおほい木の名にちなんで、ピッパラヤーナと名をつけよう」とちかつたこと」を思い出させるといふプロットである。さらに「菩提樹の蔭」のクライマックスシーンで、

朝になつた。人人は臥榻のうへに横つたまま冷たい石像となつたチューラナンダの胸にひしと抱きしめられて乳首をふくんだなりピッパラヤーナの息が絶えてゐるのを見出した。

と乳を含む子の姿が描写される。これも八段「巡礼歌の段」にある

「何とマア見やしやんしたか。ドレドレ。帯といつてゆつくりと。久しぶりで母が添乳。」と。笈摺はづし帯とくとく。見れば手足も冷へ渡り息も通はぬ娘の死骸。「ヤアコレ。こりや娘は死で居る。どふして死だどふして」と。余りの事に涙も出ず。

〔近松半二浄瑠璃集「二二」三六一頁、国書刊行会、平成八年四月〕

とお弓がお鶴に乳を含ませ添い寝しようとする場面、転じて愁嘆場の影響と見ることができぬ。

『義太夫年表』(明治篇)及び(大正篇)によると中勘助が山田と共に文楽を楽しんだ文楽座における「傾城阿波の鳴門」「十郎兵衛住家の段(巡礼唄の段に同じ)上演は、山田と中勘助の出会いから山田逝去の間には明治三五年九月、四〇年五月、四三年四月二日、と上演記録が残る。

「傾城阿波の鳴門」「巡礼歌の段」は、親子であることを分かりながら名乗れない母の苦悩、親子と知らず娘を殺してしまった父の悔恨が描かれた悲劇である。「菩提樹の蔭」はプールナによる「どうぞあはれなこの子をお守りください。私はこれを人手にまかすことはできません。(中略)そのうへにはチューラナンダにも冥加をたれてやつてください。」という祈りにより、親子全員が同時に静かな死を迎えるというアンハッピーエンドの体裁をとったハッピーエンドで終了する。

「因縁」に人間が振り回される「傾城阿波の鳴門」よりも人間に近い神が描かれ近代的な意味合いが強い。「菩提樹の蔭」末尾は親子の「心中もの」のように、親子三人の同時の死が描かれた。「傾城阿波の鳴門」の阿波十郎兵衛のようにわが子を殺した結果、残された両親が悲嘆にくれるという悲劇や、幼い孤児が残される悲劇とは無縁の、思い残すことがない理想的な死の姿である。

インド物語『屍鬼二十五話』「娘一人に婿三人彼女の灰を抱いていた男」^註にあるようにチューラナンダの姿を大理石に刻み還魂をしたプールナはチューラナンダの父親の役割を凶らずも負ってしまった。自分が世に出したチューラナンダとピッパラヤーナに対して自らの死に際して、父親の責任を自覚するということではないだろうか、作品のテーマとして父親の責任を挙げたい。

(六) まとめ

(一) ⑧で述べたように大正時代から中勘助の印度学仏教学資料の受容に関係した和辻哲郎は「聖観音はこの傾向のかなり絶頂に近い所にあるのです。(中略)父インド、母ギリシアの間から生まれた新しい子供なのです。」「(神を人間の姿に)大正七年」といい、ギリシア人アレキサンダー大王の東征を背景にその部下カリステネスが仏教教団に出会うという「ガンダーラまで」(『読売新聞』大正七年)とギリシャとインドの文化交流をしきりに記した。「人形に魂のはひる話」のギリシャ版ピグマリオン神話、数奇な親子の対面を描いたインドの「シヤクンタラー姫」と日本の「傾城阿波の鳴門」、そして作品の基調をなす「生写朝顔話」と、「菩提樹の蔭」はギリシャ・インド・日本の結びつきへと展開が可能で物語が結びつき成立したと言えよう。

中勘助が本作の執筆動機に記した亡き親友の娘でありパリで女兒をもうけた猪谷妙子に対して、母親ではなく父親の責任を解説し

た文学を与えたという点からも、ユニークな作品と位置付けられる。

後記

日本比較文学会第七〇回全国大会（平成二〇年六月二二日 於大妻女子大学）における筆者の研究発表「中勘助童話におけるインド文学の影響」質疑において、ご指導くださった千葉大学佐藤宗子先生に感謝の意を表します。

1. 人形遣い。「初世」（明治五年〜昭和二〇年）大正・昭和期の文楽人形遣いの名手。「えいぞう」ともいうが、自伝によれば栄三郎の郎を略したものであるというから「えいざ」が正しい。明治五年大阪東区濃堂町に生れた。本名柳本栄次郎。明治一六年、叔母豊竹湊玉の夫吉田栄寿（二世栄三の父、のちの光造）の紹介で沢の席の初開場に光栄を名のつて初舞台。以後、初世吉田玉造や名人桐竹紋十郎の間にもまれながら、一生きまいった師匠をもたずに孤立の道を歩いた。明治二五年彦彦六座で栄三と改名、三一年から御霊文楽座に移り、借金のため明楽座とかけもちで勤めたが、三五年以後は文楽座を動かさず、昭和二年桐竹紋十郎没後、久しく空席であった人形の座頭におされた。初め娘や二枚目をおもに遣っていたが、座頭を機会に女方を三世吉田文五郎に譲った。晩年は荒物遣いと思われるほどに小柄で非力の彼が熊谷や光秀を遣ったが、これが彼の寿命を縮めたともいえる。彼の本領は重兵衛や治兵衛や忠兵衛のような「ぼけやつし」にあり重の井や尾の上はもちろん、八重垣姫でさえ文五郎にはない味を出した。芸風はしぶく陰翳のある腹芸であったが、昭和二〇年一二月九日、疎開先の奈良県片桐村小泉で没した。弟子には栄三郎（のち狂死）・光造（のち二世栄三）らがいる。（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典』第五卷平凡社、昭和三六年九月）

2. 別名題「生写朝顔日記」。義太夫節の曲名。時代物。五段。山田案山子遺稿、翠松園主人校補。天保三年正月二日から大阪竹本木々太夫座初演。講釈師芝屋司馬叟の長話「舜」が原拠で、これを近松徳叟が脚色したが、深雪にふんすべき女方がなく、四、五年を経るうち雨香園柳浪がさし絵を入れて文化八年に前編五巻・後編五巻の読本「朝顔日記」が成立した。この小説「朝顔日記」が広く読まれたため、翌九年大阪堀江市の側芝居で「生写あさがお日記」（作者出来島千助）と題して演じ、ついで同一一年二世沢村田之助が、たまたま江戸から大阪に帰ったので、改めて奈河清助が、脚色することになり、「けいせい筑紫つまごと」八幕二九場が成った。これは角の芝居正月興行で、おもな配役は、春雨姫と深雪を二世沢村田之助、阿曾次郎と浮洲の仁三を二世嵐吉三郎が演じた。これの浄瑠璃化が本作で、山田案山子というのは近松徳叟のことである。秋月弓之助の娘深雪は、宇治の蛍狩で宮城阿曾次郎と恋しあったが、

阿曾次郎が鎌倉出張を命ぜられやむなく別れる。のち深雪は、大内家の臣駒沢次郎左衛門との縁談が起ったが実はその人こそ恋する当の阿曾次郎と知らず、阿曾次郎とのちぎりを忘れかねて家出する。大内家では奸臣岩代多喜太を中心に悪事をたくらみ、駒沢はひとり心を痛めている。一方家出した深雪は両眼を泣きつぶして、浜松のあたりをさまよううち乳母の浅香にめぐりあつたが、浅香は患者のため痛手を負い、自分の生みの親古部三郎兵衛という者を尋ねて、力にせよといひのこして死ぬ。深雪はかつて阿曾次郎が書いてくれた朝顔の歌を唄つてめぐり歩くうち、島田の戎屋徳右衛門方で駒沢の阿曾次郎に会う。阿曾次郎は同宿の岩代の手前名ならず深雪に扇を残して去る。深雪はあとでそれと知って大井川まで追つていくが、おりからの大雨にひと足違いで川留めとなる。深雪は天を仰いで、身の悲運を嘆くところへ徳右衛門と中間閑助が落ち合い、話の末に徳右衛門が古部三郎兵衛とわかる。徳右衛門は自分の生血をそそいで、深雪の眼病を平癒させる。やがて駒沢の忠義で大内家も安泰となり、駒沢と深雪は御前で婚儀を結ぶ。現行の歌舞伎脚本は、「絵入しよ史あさがお物語」（嘉永ころ、西沢一鳳作）を加味したもので、大内のお家騒動の部分は削除され、主として深雪・阿曾次郎の恋の件のみが浄瑠璃・歌舞伎ともに上演される。宇治の蛍狩の場、島田宿戎屋の場、大井川の場合などで、まれに浄瑠璃のほうで浜松小屋の段を上演する。「蛍狩」の場は時代物の見染めのシーンの代表的なもので、宿屋の駒沢・岩代・朝顔（深雪）という人物の配列といい、演出といい、「壇浦兜軍記」の「阿古屋琴責め」の場に類似している。大井川の場合は、中間閑助が川越人足を相手にしての大立回りがあつて、タチの手をつくす見た日本位の場合であるが、最近では荒唐無稽さをさけて、徳右衛門の切腹さえはぶくことがある。（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典』第三卷平凡社、昭和三五年五月）

3. 「妙子への手紙」収録大正六年五月の手紙内容より「菩提樹の蔭」のもとの話は『夢のゆくえ』というお断りであったことがわかる。
4. 『義太夫年表（明治篇）』義太夫年表刊行会、昭和三一年五月
5. 編集兼印刷発行人・猪谷善一、昭和一八年七月、非売品
6. 安倍在校中の第一高等学校独語教授・岩元禎。「第一高等学校一覽（自明治三七年至明治三八年）」第六章 職員（三八年一月一四日調）による。
7. 静岡市所蔵中勘助関係資料 No.060A001～060A016,060A024～060A026,062A001,062A002,062A006,064A001,064A002 の図書であり、別表2として示す。
8. 「小序」『世界大衆文学全集第五一卷 十字軍の騎士』（改造社、昭和九年三月）

9. 中勘助の一部蔵書の焼失状況に関しては中勘助が静岡市疎開中に、中邸を借り被災した友松円諦日記（山本幸世編『友松円諦日記抄』真理舎、平成元年一月）による。
10. 「シャクンタラー姫」の正式名称「指輪によって思い出されたシャクンタラー」の意味。
11. 「解説」『菩提樹の蔭 他一篇』（角川書店、昭和二十七年）
12. 『歌劇』第二二号、歌劇発行所
13. 「宝塚上演演目史 大正三年四月から昭和三九年五月まで」『宝塚歌劇五〇年史（一）』宝塚歌劇団、昭和三九年五月
14. 『赤い鳥』第一巻第六号（大正七年二月）収録「賛助読者名簿（四）」七六頁一行目「東京〇江木定男」の名前があり、購読していたことが分かる。
15. 小川未明「私が『童話』を書く時の心持」『早稲田文学』大正一〇年六月）
16. 中勘助「しづかな流（二）」内、昭和二年六月一六日付、日記体随筆
17. 義太夫節の曲名。時代物。十段。近松半二・八民平七・吉田兵藏・竹田文吉・竹本三郎兵衛ら合作。明和五年六月一日から大阪竹本座で初演。近松門左衛門作「夕霧阿波の鳴門」の改作というが原作のおもかげはほとんどとどめていない。（八段）（十郎兵衛内）十郎兵衛のるすに巡礼の子がたずねてくる。お弓はその身の上話からわが子お鶴とわかる。盗賊として捕えられる自分たちのことを考え母と名のらずに帰国させる。十郎兵衛はわが子と知らず、外からこの巡礼をつれて帰り、金をもっているのを見て、武太六への返済金に当てるため貸してくれとたのむ。巡礼が大声でそれを拒むので、その口をふさぐと窒息死してしまう。お弓はお鶴を帰したあと心ひかれて追っていったが、家へ帰るとわが子が死んでいる。十郎兵衛も巡礼がわが子とわかり夫婦は悲嘆にくれる。お鶴の懐中から発見された手紙によって、国次の刀は郡兵衛が持っていることがわかる。おりから捕手にとり囲まれるが、二人は奮戦し家に火を放って帰国の途につく。第八段の十郎兵衛内、通称「巡礼唄の段」が最も名高く再演以後はほとんどこの段だけがくりかえされている。（早稲田大学坪内逍遙博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典』第二巻、平凡社、昭和三十五年六月）
18. ソーマ・ディーバ作・上村勝彦翻訳『屍鬼二十五話』平凡社、昭和五三年一月、インドの説話集。二十五話からなる。死体に取っついたヴェータラがトリヴィクラマセーナ王に聞かせる二五の不思議な物語から成り、各話の最後にヴェータラが問答を仕掛け、トリヴィクラマセーナ王がそれに見事に答えるという形式を持つ。最後に王はシヴァ神に認められ、ヴィディヤータラ族の転輪聖王とされた。「娘一人に婿三人 彼女の灰を抱いていた男」は、屍鬼がトリヴィクラマセーナ王に対し、三人の求婚者が亡くなった娘に

対してそれぞれ行ったことを説明し、そのうちの誰が再生した娘の夫に相応しいかと尋ねた話。呪文の力で遺灰から娘を生き返らせた青年は父親の役割を果たしたこと、娘の骨をガンジス河に投げ捨てた青年は娘の息子の役割を果たしたこと、娘の灰を寢床にし、それを抱きしめて苦行していた青年こそ深い愛情により夫に相応しく行動した、と王は答えた。

060A001	Bilderbu Ohne Bilder	H.C.Vinderfen	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A002	Ana Kreon	H.A.Junghatts	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A003	Gedichte	Friedrich Yolderlin	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A004	Gotterlehre	Knll Philipp Morik	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A005	Stimmen der Volker	Joy Fottfr Her Der	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A006	Gedichte	Nicolaus Lenau	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A007	Gedichte in Prola	Jman Lurgenieff	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A008	Die Judenbuche	Drofte Hillshoff	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A009	Heinrich Heine's Buch der Lieder	Otto F Lachmann	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A010	Sakuntala Drama in sieben Akten	Kalidasa Hermann Camillo Kellner	1890	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A011	Gedichte	Ludwig Ahland	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A012	Liebes Struhling	Friedrich Kudert	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A013	Gedichte	Friedrich Ruckert Philipp Stein	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A014	Die Gedichte Novalis	Franz Blei	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A015	Sappho crauer spiel in funf Aufzugen	Franz Grillparzer	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A016	Des Meeres und der Lieben Wellen	Franz Grillparzer	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A024	Heinrich Heines Samtliche Werke 4巻-1	Otto F Lachmann	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A025	Heinrich Heines Samtliche Werke 4巻-2	Otto F Lachmann	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
060A026	Heinrich Heines Samtliche Werke 4巻-3	Otto F Lachmann	1834	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
062A001	Goethes Briefe an Frau Charlotte von Stein	Hermann Camillo Kellner	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
062A002	Paul Flemings Ausgeivahlte Dichtungen	Heinrich Steiner	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
062A006	Heinrich Heines Samtliche Werke	Otto F Lachmann	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
064A001	Das goldene Viles	Franz Grillparzer	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag
064A006	Schiller Gedichte	Friedrich von Schiller	不明	Philipp Reclam	Leipzig Berlag

別表2
(書誌情報は静岡市作成目録による)

終章

一 「阿育王事蹟」のインド三部作への影響

第一部第一章で取り上げた鷗外の「阿育王事蹟」を再読すると中の作品との共通点が多いことに気づかされる。

「阿育王事蹟」の底本の一つである Edmund Hardy が著した *Konig Asoka* には掲載がない「第三十四図 バルフウト棟欄格の浮彫逝多林故事」との名称の写真が収録されている。この写真の元は何という書籍か明示されていないが、「JETAVANA ANADHAPEDIKO DETI KOTI SABTHATENA KETA 給孤独長者一億金もて逝多林を買ふ」との説明書きから、サンスクリット語書籍からの転用と考えられる。つまり、第一部第一章で示した新潮社版『提婆達多』表紙カバー写真の出典もとして、堀謙徳編『美術上の釈迦』T.W.RHYS DAVIDS の *BUDDHIST INDIA* だけでなく「阿育王事蹟」も挙げられる。

第二部第二章二にて考察したヂエラルの人物造型について、紀元前三二七年〜同三二三年にインド東征を行ったマケドニア帝国の王アレキサンダー大王と七二二年にインドへ侵攻したイスラム教徒モハメッド・カシムの影響を論じたが、「阿育王事蹟」「壹前紀」にて「仏滅後約百五十年の頃、希臘の北方マケドニア MAKEDONIA の歴山王 ALEXANDROS 新に波斯を破り、十三萬五千の歩兵、一萬五千の騎兵及び象軍を率ゐて印度の疆に臨みき。(中略)撤兵の後、モフィス、ポオロスの二王は、共に歴山王の諸侯と為りて、パンジャアブを治せし臥、ポオロスは基督前三百二十一年 EUDEMOS に謀り殺され、歴山王の占領せりし印度の地はシリヤ SYRIA に歸し、王の軍に将たりしセレウコス、ニカトル SELEUKOS NIKATOR, 312-281BC が梟めつるセレウコス朝の世とは為りぬ」とアレキサンダー大王の東征とその死後のインドの状況について、「拾陸 後紀」には「亜拉伯の将カシム KASIM 軍を率ゐて信度河を渡る。信度の王ダヒル DAHIR 戦死し未亡人城を守りて自焚す。時に基督曆七百十二年なり」とモハメッド・カシムのダヒル王を破ったことが記される。

第二部第二章第二表 4 で「犬」のインド史に関する歴史的記述部分を取り上げ、典拠本二冊 Vincent A. Smith, *The Early History of India Including Alexander's Campaigns*, 3rd Edition (Oxford at the Clarendon Press, 1914) や Stanley Lane, *Mediaeval India under Mohammedan Rule* (T. Fisher Unwin Ltd, 1917) との表現の比較を行ったが、「拾陸 後紀」にも同様の歴史的著述が登場する。両書の表現を次に比較する。

有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもつて畢生の事業として、紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。いつも十月に首都を發して三ヶ月の不撓の進軍をつづけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行して市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は「勝利者」「偶像破壊者」の尊称を得た。(中略)これは一〇一八年にマームードがヒンドスタンの著名なる古都カナウヂのはうへ兵を進めた時のことである。(「犬」)

第十世紀の末、基督曆九百十九年。波斯の「スルタン」マームツド SULTAN MAHMUD. 位に即き、基督曆千一年兵をカアブルに進め、ラホオル LAHORE, LOHARA. の王ジエイバル RAJA JEIPAL. を破る。(中略)これより千二十四年に至るまで、回教徒の來襲すること二十二回にして、就中千十七年には、カナウジ及ムツトラ KANAUJI, MUTTRA. を破壊し、千二十四年には、グジェラアのソムナアトなる摩醯首羅 MAHESVARA, SIVA, 大自在天。の祠を破壊しつ。これより後、マームツドは波斯に事あるが為に、侵伐を反復すること能はざりき。(「阿育王事蹟」)

侵攻の期間、侵攻の回数が、「紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回」と「千一年」から「千二十四年に至るまで、回教徒の來襲すること二十二回」、カナウヂ侵攻の西曆が「一〇一八年」「千十七年」との違いがあるが、「殿堂偶像を破壊」「グジェラアのソムナアトなる摩醯首羅 MAHESVARA, SIVA, 大自在天。の祠を破壊」と「サルタン・マームード」「スルタン」マームツド SULTAN MAHMUD. のインド侵攻の様子は同内容として描かれる。

また、第二部第三章ではカーリダーサ「シャクンタラー姫」と「菩提樹の蔭」との影響関係を示したが、「阿育王事蹟」「壹 前紀」には「シャクンタラー SAKUNTALA. の戯曲の訳者たるキリアム、ジョオンス SIR WILLIAM JONES, 1746-94. は音の近きより、この名の施那羅笈多と同じきを知りぬ」、「拾陸 後紀」には「文芸も亦先のカアリダーサに次いで、シェウドラカ王、SUDRAKA. 六世紀。」と戯曲「シャクンタラー」作者「カアリダーサ」共に登場する。

以上から、「阿育王事蹟」を鷗外による印度学的な知見の一つとして中勘助が参考としていた可能性が見受けられる。

二 インド三部作の位置づけ

第二部で確認したインド三部作の時代背景とテーマを振り返ると、「提婆達多」は仏陀在世期が時代背景でテーマは近代人の魂の救済であった。信州（長野県）野尻湖畔の安養寺をはじめ上野の寛永寺山内真如院、比叡山横川の恵心堂、茨城県布川の徳満寺に滞在し、特定の仏教宗派における救済の思想を描くことは、東京弘教書院『大日本校訂大藏経』や『大正新脩大藏経』等大藏経典に親しんでいた中勘助にとって、比較的容易なことであつたろう。しかし「阿育王」構想の過程で和辻哲郎・宇井伯寿等を通して入手困難な印度学・仏教学資料に当たり、原始仏教に傾倒していったのか、そこには仏陀の思想や慈悲心を解明したいという思いがあつたと推測される。「提婆達多」「犬」「菩提樹の蔭」と三部作に共通する「性と愛との相克」というテーマから推測すると、中勘助は「性への処し方、愛へのへの処し方」を探究したいという考えがあつたと考えられる。中勘助は前掲、和辻照子宛書簡にて「色々不満なところもありますが特に仏陀の説法に関して随分物足らなく思つてゐます。併し説法を創作する気にもなりませんでしたから致し方ありません」と小説家としてのジレンマはあるが仏陀の説法は伝承内容を変えずに「提婆達多」に用いた。それこそ説法を通して仏陀の思想や慈悲心を解明する必要があつたからではないか。

「犬」は一〇一八年頃回教徒のインド侵攻時代が時代背景であり、戦争という国家間・文明間の暴力と男女間の性暴力、性への妄執がテーマであつた。暴力が蔓延する中、回教徒の隊長に一途な片思いをするインド娘が暴力の被害者から加害者へ変化するさまが描かれた。暴力の連鎖の中で神からも救済されない人間の無明さが表された。

「菩提樹の蔭」はアマラヴティーが彫刻産業で賑わつた時代、紀元前三世紀頃から三世紀頃までの間が時代背景であり、主人公プールの父親としての責任への自覚と自覚自省というストイックさが神の心に適うというテーマである。

インド三部作の経過で、中勘助が参考とした印度学・仏教学資料は、大藏経や「往生要集」等經典類、原始仏教に関する解説書から、インド史資料へ、最後にインド文学へと変遷した。それらの資料を用いる際に中勘助が大切にされたことは、参考書にとらわれない小説としての獨創性であつたと考えられる。「阿育王事蹟」を著した森鷗外の原始仏教時代への憧憬はドイツにおける印度学隆盛と日露戦争が背景にあつた。「阿育王」構想の経過で受容したインド史資料の中で中勘助が注目したのは、マケドニア王アレキサンダー大王と回教徒のモハメッド・カシムであつた。共にインドを武力侵攻した軍人である。アレキサンダー大王について和辻哲郎が論文「北西印度、波斯、希臘」（初出『思潮』大正七年一〇月）、論文「アレキサンデルの遠征と西北印度」（初出『思潮』大正七年

一二月)、小説「健陀羅^{ガンダラ}まで」(初出『讀賣新聞』大正八年三月二〇日〜四月一九日)を発表し、インドとギリシャ・ペルシャの文化交流に興味を抱いていたこともその一因であろう。回教徒モハメッド・カシムについて「阿育王事蹟」と脚本「ブルムウラ」において鷗外も言及し、信度国王女ブルムウラからの求婚をカシムが断り讒言される経緯を「この王女ブルムウラの話は実に珍しい面白い話で、西洋の詩人がこれを種にして叙事詩か脚本かを作つて居ない筈がないと思つた。併し一応調べた所でそんな物は見付からない」(脚本『ブルムウラ』の由来)『歌舞伎』第一〇二号、明治四十二年一月)と注目している。「菩提樹の蔭」では「阿育王事蹟」に登場するのみならずゲーテにも愛されたカーリダーサの七幕戯曲「シヤクンタラー姫」の影響を認めることができる。インド・ギリシャ・日本の物語のエッセンスを融合させる試みであつた。

三 「鳥の物語」に至る鷗外「阿育王事蹟」の影響

『思想』昭和四年一〇月号への「菩提樹の蔭」発表の後、中勘助は昭和六年一月ころから「鳥の物語」に着手し始めた。昭和七年四月に「鳥の物語」の第一作「雁の話」が脱稿され、翌八年六月号の『思想』に発表した。この作品の構想について「あとがき」角川書店版『中勘助全集』第三卷(昭和三六年二月)に中勘助は次のように記した。

私が童話、特に成人のための童話——適当な名が見つからない。——を作ることを思ひついたのは平塚海岸に住んでた時だつた。それが一群の鳥の物語になつたのは最初の一つが鳥——鶴の話だつたからだらう。しかしそれを単純に味よく纏めるのに暇どつてるうちに題材になる話のある雁のはうが先に出来た。で、大汗の前での席次としては鶴が首席であるべきのをこの本では稿了順発表順によつて「後の雁が先」になつてゐる。

「鳥の物語」の形式は途中変化したことが「雁の話」の次作「鳩の話」(昭和一六年七月脱稿、同年一〇月『鳩の話』収録、岩波書店より刊行)の次のような前書きから知ることができる。

雁の話をかいたときには鳥たちは風流な足利義満將軍の御前でかきこまるつもりになつてゐた、それが十年後の今日この鳩は寛仁 大度なオゴタイ汗のまへで話すことになつた。

以上のように「鳥の物語」は当初室町幕府の足利義満の前で鳥が体験談もしくはその種族に伝承される歴史上の人物や場面についての物語を語るという形式だったが、途中でチンギスハンの息子でモンゴル帝国第二代皇帝オゴタイの前で語る形式に変化した。「雁の話」は長安の都が中国漢時代に栄えていた頃の匈奴によって軟禁された蘇武奪還の物語であり、「鳩の話」は洗札者ヨハネとナザレのイエスの受難の物語である。ここで注目すべきは鳥が語る相手の変化である。

足利義満は室町幕府第三代將軍であり武家であつても「風流な」と形容されるように鹿苑寺（金閣寺）建立をはじめ北山文化を築き南北朝を合一させる人心安定した一時代を築いた。一方オゴタイは父チンギス汗とモンゴル統一、金遠征、大西征を行った武人であり、自らの皇帝時代においても帝国領土をヨーロッパへ拡大させ続けた。文化人足利義満から武人オゴタイへの変化は日中戦争の戦局激化が背景として考えられる。

「鳥の物語」においては「雁の話」で漢と匈奴の戦時下になつた蘇武の忠臣としての忍耐と李陵との友情のあり様が著され、「鳩の物語」では領土拡大のため他地域侵略を進めたオゴタイに鳩が神の子イエスを語るといふように、中国大陸の歴史上の人物が登場し、中国びいきの様相が示される。中国大陸もまたインド同様古来より、多くの覇者が現れ、侵略し侵略される動乱の歴史を有している。つまり覇者オゴタイはインド史におけるアレキサンダー大王、サルタン・マームードと同様に位置づけられる。ヨハネやイエスが精神性やその信念によつて人々を開眼させた物語を武力統一者オゴタイに対し平和の象徴である鳩が語るといふ点に「鳩の物語」の粹物語としての面白さがある。

鷗外が「阿育王事蹟」において阿育王にとつての理想的な国家像、即ち不殺生と仏法による国民の精神統一を紹介したのと同様に、中勘助は、人間はいかに生きるべきかとの指針を鳥に語らせた。鷗外が抵抗感を持った戦争を進める覇者は、「鳥の物語」において鳥によつて啓蒙される対象として位置づけられた。国家間・文明間の衝突は暴力によつては解決できないという現代社会に通じる視点を「阿育王事蹟」や印度学・仏教学資料の受容を通し中勘助は得たといえる。

卷末資料

一 主要参考文献一覧

- ・(一) 印度学・仏教学と日本近代文学及び日本近代思想との関連
- ・伊藤整『求道者と認識者』新潮社、昭和三七年一月
- ・永井義憲『日本仏教文学』塙書房、昭和三八年一〇月
- ・大河内昭爾『近代文学と仏教』『国文学 解釈と鑑賞』五五卷一二号、平成二年一二月
- ・三木紀人・山形孝夫編『宗教のキーワード集』別冊国文学五七卷、学燈社、平成六年一二月
- ・中島国彦『禅と近代文学』『仏教文学講座』第二卷、勉誠社、平成七年一月
- ・大河内昭爾『仏教と近代文学』『仏教文学講座』第二卷、勉誠社、平成七年一月
- ・秦恒平『仏教と戦後文学』『仏教文学講座』第二卷、勉誠社、平成七年一月
- ・田丸徳善『近代と仏教』『日本文学と仏教』第一〇卷、岩波書店、平成七年五月
- ・見理文周『近代日本の文学と仏教』『日本文学と仏教』第一〇卷、岩波書店、平成七年五月
- ・末木文美士『明治思想家論 近代日本の思想・再考Ⅰ』トランスビュー社、平成一六年六月
- ・末木文美士『近代日本と仏教 近代日本の思想・再考Ⅱ』トランスビュー社、平成一六年六月
- ・(二) 森鷗外・石川啄木・秋田雨雀・久末淳と印度学・仏教学
- ・森潤三郎『校勘記』『鷗外全集』著作篇第九卷、岩波書店、昭和一二年七月
- ・久末純美・則武三雄編『久末淳集』照巖寺北荘文庫、昭和四年八月
- ・森鷗外『鷗外全集』第四卷、岩波書店、昭和四七年二月・
- ・森鷗外『鷗外全集』第一九卷、岩波書店、昭和四八年五月
- ・小堀桂一郎『翻訳原本及び創作の素材について』『鷗外全集』月報四、岩波書店、昭和四七年二月

- ・平岡敏夫『日露戦後文学の研究』上、有精堂出版、昭和六〇年五月
- ・平岡敏夫『日露戦後文学の研究』下、有精堂出版、昭和六〇年七月
- ・玉井哲雄編・石黒敬章企画・土居義岳他五名、『よみがえる明治の東京―東京十五区写真集―』角川書店、平成四年三月
- ・杉山二郎『森鷗外とインド学・仏教学』『国際学大学院大学研究紀要』第三号、平成一二年三月
- ・南明日香『荷風と明治の都市空間』三省堂、平成二一年一二月
- ・木内英実『明治第二世代の文学者による仏教並びに印度哲学受容』『国際啄木学会研究年報』第一二号、平成二一年三月
- ・木内英実『久末淳の仏教文学における印度表象』『小田原女子短期大学研究紀要』第四二号、平成二四年三月
- ・木内英実『忠臣・軍神の時代における森鷗外の『阿育王事蹟』の位置づけ』『東京都市大学共通教育部紀要』第八号、平成二七年三月

(三) 印度三部作作品論

① 「提婆達多」

- ・和辻哲郎『『提婆達多』の作者に』『読売新聞』、大正一〇年六月二一―二三日掲載
- ・三井光彌『独逸文学に於ける仏陀及び仏教』第一書房、昭和一〇年二月
- ・小宮豊隆『解説』角川文庫版『菩提樹の蔭・提婆達多』、昭和二七年三月
- ・小宮豊隆『中勘助の作品』『中勘助 内田百閒集』、筑摩書房、昭和三一年六月
- ・河盛好蔵『解説 中勘助集』『中勘助 内田百閒集』、筑摩書房、昭和三一年六月
- ・関口宗念『銀の匙』におけるペシミズム』『聖和』二号、昭和三二年九月、『提婆達多』における悪』『聖和』三号、昭和三六年一月、『仏陀の慈悲』―中勘助と仏教』『聖和』四号、昭和三八年一二月、『中勘助研究』創業出版、平成一六年五月収録。
- ・藤原久八『提婆達多』考』『提婆達多』の主題』『中勘助の文学と境涯』、金喜書店、昭和三八年五月
- ・山室静『中勘助の世界』『法政』一五七号、昭和四〇年
- ・『嘉村磯多全集』下巻 南雲堂桜楓社、昭和四〇年九月
- ・奥山和子『提婆達多』考―卒論ノート抜粋』『静岡女子大学 国文研究』創刊号、昭和四三年六月、私家版『中勘助の思想』昭和四

四年頃収録。

- ・渡辺外喜三郎「小説から童話へ『提婆達多』」「『提婆達多』をめぐって」「中勘助の文学」、桜楓社、昭和四六年一〇月
- ・荒松雄「解説」岩波文庫版『提婆達多』、昭和六〇年四月
- ・三好行雄「中勘助・人と作品」「昭和文学全集」第七卷、小学館、平成元年五月
- ・川路重之「中野新井町」岩波書店版『中勘助全集』月報三、平成元年十一月
- ・堀部功夫『提婆達多』の参考書 岩波書店版『中勘助全集』月報三、平成元年十一月
- ・平山城児「中勘助『提婆達多』」『国文学 解釈と鑑賞』五五卷一二号、平成二年十二月
- ・工藤哲夫「土神と狐の物語」「女子大国文」一三六号、京都女子大学国文学会、平成一六年十二月
- ・市川浩昭「中勘助『提婆達多』とシェイクスピア『オセロ』」「上智大学国文学論集」三九卷、平成一八年一月
- ・木内英実「中勘助の『提婆達多』における仏伝」真鍋俊照編『密教美術と歴史文化』、法蔵館、平成二三年五月
- ・木内英実「中勘助の『銀の匙』から『提婆達多』に至る救済の思想」『東京都市大学人間科学部紀要』第六号、平成二七年三月

② 「犬」

- ・関口宗念『「犬」『菩提樹の蔭』に於ける愛』初出『聖和』（聖和学園短期大学紀要）第二号（昭和三二年十一月）後に私家版『中勘助研究』（創英出版、平成一七年五月一〇日）収録
- ・奥山和子『中勘助の思想』私家版、昭和四四年頃
- ・堀部功夫『「犬」考』『「銀の匙」考』翰林書房、平成五年五月
- ・木内英実「中勘助のアレキサンダー大王への関心」『総合社会科学研究所』第三集第五号、平成二五年三月
- ・木内英実『「犬」の人物造型考（一）』『会誌』平成二五年六月
- ・木内英実『「犬」の成立をめぐって』『国文目白』第五二一号、平成二五年十二月

③ 「菩提樹の蔭」

- ・小宮豊隆「解説」『菩提樹の蔭・提婆達多』角川文庫、昭和二七年三月

- ・関口宗念『犬』『菩提樹の蔭』に於ける愛」初出『聖和』（聖和学園短期大学紀要）第二号、昭和三二年十一月、後に私家版『中勘助研究』（創英出版、平成一七年五月）収録
- ・藤原久八『菩提樹の蔭』考』『中勘助の文学と境涯』金喜書店、昭和三八年五月
- ・奥山和子『中勘助の思想』私家版、昭和四四年頃
- ・渡辺外喜三郎「小説から童話へ『菩提樹の蔭』』『中勘助の文学』桜楓社、昭和四六年一〇月
- ・竹長吉正『授業に生きる教材研究』三省堂、昭和六三年五月
- ・木内英実「中勘助の『菩提樹の蔭』成立におけるインド歌劇『シヤクンタラー姫』の影響」『小田原女子短期大学研究紀要』第三七号 平成二〇年三月
- ・木内英実「中勘助と仏教童話」『印度学仏教学研究』第五六卷第二号、平成二〇年三月
- ・堀部功夫『菩提樹の蔭』と古典』『国語国文』第七九卷第六号、平成二二年六月
- ・木内英実『菩提樹の蔭』の成立をめぐる』『国文目白』第五四号、平成二七年二月

(四) 典拠資料

- ・オルデンベルグ・三並良『オルデンベルグ氏 仏陀』梁江堂明治四三年三月
- ・堀謙徳編『美術上の釈迦』博文館、明治四三年九月
- ・リス・デキズ赤沼智善訳『釈尊之生涯及其教理』無我山房、明治四四年九月
- ・山邊習學『仏弟子傳』無我山房、大正二年四月
- ・ケルン・立花俊道訳・南條文雄校閲『ケルン氏 仏教大綱』東亜堂、大正三年八月
- ・中村元・早島鏡正・紀野一義訳『浄土三部経（下）』岩波書店、昭和三九年九月
- ・中村元編『往生要集』『日本思想体系六 源信』岩波書店、昭和四五年九月
- ・中村元『往生要集』岩波書店、昭和五八年五月
- ・中村元『古代インド』講談社、平成一六年九月
- ・ダンテ・アリギエリ・原基晶訳『神曲 地獄篇』講談社学術文庫、平成二六年六月

- ・ダンテ・アリギエリ・原基晶訳『神曲 煉獄篇』講談社学術文庫、平成二六年七月
- ・ *Sakuntala Drama in sieben Akten* (Kalidasa Hermann Camillo Kellner Philipp Reclam, 1890)
- ・ *Buddhist India* (T.W.Rhys Davids)

(五) 伝記事項

- ・ 中勘助・安倍能成・岩波茂雄編『山田又吉遺稿』岩波書店、大正五年三月
- ・ 安倍能成の「山中雑記」『思潮』二卷一〇号、大正七年一〇月
- ・ 山村光敏編『比叡山史の研究』比叡山学会出版、昭和一二年三月
- ・ 猪谷善一編集発行人『猪谷妙子伝』私家版、昭和一八年七月
- ・ 『我が生ひ立ち 自叙伝』岩波書店、昭和四〇年
- ・ 安倍能成「中勘助の死」『心』生成会、昭和四〇年七月
- ・ 中村元『中世思想 上』春秋社、昭和五一年七月
- ・ 渡辺外喜三郎『はしばみの詩』勘奈庵、昭和六二年一二月
- ・ 「古寺巡礼」『和辻哲郎全集』二二卷、岩波書店、平成三年三月
- ・ 武覚超『比叡山諸堂史の研究』法蔵館、平成二〇年三月

二 初出一覧

序章 書き下ろし

第一部 インド三部作の時代的背景

第一章 「忠臣・軍神の時代における森鷗外の『阿育王事蹟』の位置づけ」『東京都市大学共通教育部紀要』第八号、平成二七年三月

第二章 中勘助と同年代の文学者による仏教学並びに印度哲学受容

- 一 「明治第二世代の文学者による仏教並びに印度哲学受容」『国際啄木学会研究年報』第一二号、平成二一年三月
- 二 「明治第二世代の文学者による仏教並びに印度哲学受容」『国際啄木学会研究年報』第一二号、平成二一年三月
- 三 「久末淳の仏教文学における印度表象」『小田原女子短期大学研究紀要』第四二号、平成二四年三月

第二部 インド三部作論

第一章 「提婆達多」

- 一 「『提婆達多』における仏伝」真鍋俊照編『密教美術と歴史文化』、法蔵館、平成二三年五月
- 二 「中勘助の『銀の匙』から『提婆達多』に至る救済の思想」『東京都市大学人間科学部紀要』第六号、平成二七年三月

第二章 「犬」

- 一 「中勘助の『犬』の成立をめぐる」『国文目白』第五二号、平成二五年二月
- 二 「中勘助のアレキサンダー大王への関心」『総合社会科学研究』第三集第五号、平成二五年三月（「中勘助の『犬』における『マハーヴァンサ』の影響」『印度學佛教學研究』五九卷二号、平成二三年三月 を吸収展開したもの）
- 三 「『犬』の人物造型考（一）」『会誌』平成二五年六月

第三章 「菩提樹の蔭」

- 一 「中勘助の『菩提樹の蔭』成立におけるインド歌劇『シャクンタラー姫』の影響」『小田原女子短期大学研究紀要』第三七号、

二 平成一九年三月（「中勘助と仏教童話」『印度學佛教學研究』五六卷二号、平成二〇年三月に吸収展開されたもの）
『菩提樹の蔭』の成立をめぐって』『国文目白』第五四号、平成二七年二月

終章 書き下ろし

補足論文

「中勘助と仏教童話」『印度學佛教學研究』五六卷二号、平成二〇年三月
「中勘助の『犬』における『マハーヴァンサ』の影響」『印度學佛教學研究』五九卷二号、平成二三年三月

一 はじめに

小説「銀の匙」の作者として知られる中勘助(一八八五～一九六五)は、昭和期に「童話―成人のための童話」を構想し「菩提樹の蔭」(一九二九年「思想 弁証法特集号」)を緒として、一九六三年までに『鳥の物語』一二編の連作童話を発表した。古代インドを背景にした「菩提樹の蔭」と、『鳥の物語』中の日本とインドを舞台にした教話は、仏教童話を髣髴とさせる内容である。本論では「菩提樹の蔭」成立を巡り、受容した既存の物語や概念を基に、勘助が作品を再構築していったプロセスを明らかにし、勘助の「仏教童話」の特徴について考察する。

二 既成の物語の受容と再構築

「菩提樹の蔭」プロットを考察すると、中勘助蔵書(勘助遺族より一九九四年静岡市へ寄贈された約二二〇〇冊の勘助蔵書目録に基づく)中、『*Sakuntala Drama in Seven Akten*, Kalidasa Herman Camillo Kellner, Philip Reclam ʼ Stray Leaves from Strange Literature, Lefcadio Hearn, Kegan Paul, Trench, Trubner&Co.Ltd, 1906 からの影響が次のように認められる。

(一) *Sakuntala Drama in Seven Akten* 「シャクンタラ 七幕の戯曲」^{註1}受容状況

シャクンタラ (*Abhinana-Sakuntala*) は、インドの最も有名な古典戯曲、あるいはそのヒロインの名前である。詩聖カーリダーサが叙事詩『マハーバーラタ』の挿話を七幕の戯曲として改作したもので、仙人の養女シャクンタラとドフシャンタ王との数奇な恋物語を描く。成立は Gupta 朝(三二〇～五五〇)、梵語(サンスクリット語)で書かれており、サンスクリット語が公用語とされはじめた時代の代表作である。

勘助は在籍した第一高等学校のドイツ語教育において頻繁に用いられた Reclam 版テキストを受容した。当時の *Sakuntala* 翻訳及び翻案テキストは次の通り多岐にわたり、同作が既に一般的であったことが示された。

①『梵文学一二原書 第一集 梵語戯曲シャクンタラ』(高楠順次郎 文明堂 一九〇三)

- ② 『梵劇 さくんたら姫』(高橋五郎・小森彦次 前川文栄閣 一九〇七)
- ③ 『しゃくんたら姫 戯曲』(森田草平 日月社 一九一四)
- ④ 『歌劇シャクンタラー姫』『歌劇』(岸田辰彌 一九二二)
- ⑤ 『印度歌劇 シャクンタラー姫』(河口慧海 世界文庫刊行会 一九二四)
- ⑥ 『サクンタラー姫』『世界戯曲全集第四〇巻 印度支那篇』(島準人 世界戯曲全集刊行会 一九二八)

(二)両作品のプロットの比較対照(「菩提樹の蔭」に●を、「シャクンタラ」に○を付し略す)

① 類似点

- ・ 古代インドが背景であり、インドの自然や動物・風俗(ガンダルヴァ婚など)が描かれる。
- ・ 女主人公は美しく可憐で父親(●当初実父、後に養父・○養父)によって養育される。
- ・ 神罰や呪詛によって主人公の片方(●女○男)が、恋人を愛した記憶を失う。
- ・ 女主人公は、恋人との愛の記念品を失う。(●自ら割る。○沐浴中に落とす。)
- ・ 主人公の内、見捨てられた方(●男○女)は、失望の日々の中、恋人との間にできた子ども(●女兒○男児)を養育する。
- ・ 主人公の内、愛を忘れた方(●女○男)が、愛の記念品(●浮き彫り・女兒○指輪・男児)を見ることがよって、恋人と子どもへの愛を思い出す。

② 相違点

- ・ ● 耶摩との契約と神罰の内容 ○大仙人より呪詛された経緯と呪詛の内容
- ・ ● 男主人公の苦労と利他的な死の様相、女主人公の歓楽的な生活と死の様相との対比 ○女主人公と男主人公にそれぞれ課された試練
- ・ ● 女主人公によつて意図的に廃棄された愛の記念品 ○女主人公の過失により一時的に失われた愛の記念品
- ・ ● 男主人公は女兒の将来を悲観し加護を神に祈り、女兒の死により願いは叶う ○男主人公は後継者(男児)ができることを神に祈り、親子の対面により願いは叶う
- ・ ● 女主人公による捨てた女兒への愛情が復活するが、男女主人公間の愛情は蘇らない ○男女主人公間の愛情が蘇り、男主人公と男児間に親愛の情が湧く
- ・ ● 親子が同時に死ぬ悲劇的結末 ○家族の繁栄が約束されるハッピーエンド

(三) *Stray Leaves from Strange Literature* 『飛花落葉集』中の「バカワリ」「閻魔王」の受容(テキストは平井呈一訳恒文社版を底本とする)

『飛花落葉集』はハーン来日前の一八八四年刊行の再話集であり、出典に関する精査を行った前田式子氏の解説^{註2)}によると「バカワリ Bakawali」はイラム系統のインド説話の仏訳 *La Rose de Bakawali* を、「閻魔王 Yamaraja」は『法句経』*Dhammapada* に付帯する物語の英訳を、再話したものであるという。ハーンと勘助との関係については現在調査中だが、蔵書中ハーンの著作は英文で一〇件、和文で一件所蔵が認められた。

(四) 三作品のプロットの比較対照(「菩提樹の蔭」に●を、「バカワリ」に○を、「閻魔王」に◎を付し略す)

① 類似点

- ・ 美しい女性が大理石像から命を持つて蘇る(● 耶摩への男主人公の祈願による○インドラ神の呪詛が解ける)
- ・ 若くして急死した愛する人(● 恋人◎息子)の還魂を男主人公は耶摩・閻魔王に祈願し、生き返るが死ぬ前の記憶を失う

② 相違点

- 男性主人公は恋愛成就を耶摩へ祈願し、一時的に叶うが悲劇的結末 ○ 女性主人公は恋愛成就をインドラ神へ祈願し、試練を経てハッピーエンド

● 男主人公は死を前提として自戒と反省の日々を送り、遺児の行末を気に掛ける ◎ 男主人公は仏陀から一切無常(必滅)の理と永遠の安定を見出す法を聞き迷いから覚め悟りを得る

三 和辻哲郎・宇井伯寿との交流

趣味と「提婆達多」「犬」「阿育王」執筆取材を兼ねて、勘助は和辻と宇井からインド哲学書・聖典等書籍の情報提供を受け、蔵書を購入した経過が書簡より読解できる。次に和辻宛書簡内容と問い合わせの結果、購入した蔵書を掲げる。「注記：冒頭の数字が書簡差出年(西暦)月日、()内は蔵書中の書籍情報」

① 一九一九・二・一五 仏在世時代の印度の風俗について ② 一九一九・三・二五 長老尼偈を純文学として読むために英訳もしくは和訳どちらで読むべきか(『国訳大蔵経』第二二巻、国民文庫刊行会、一九一八) ③ 一九二一・六・二 McCrindle 氏の著作 *Ancient India as described by*

Megasthenes of Arrian, Invasion of India by Alexander the Great, Ancient India as described in Classical Literature の問い合わせ ④ 一九二一・六・

八 Vincent A Smith 著 *The Early History of India* (蔵書中に所蔵あり)の脚注に記載があつた McCrindle 氏の著作 *Ktesias, Indika or Megasthenes and Arrian, Periplus of the Erythraean Sea, Ptolemy's Geography, Alexander's Invasion, Ancient India as described by other classical writers* の問へ合わせ
⑤ 一九二一・六・二四 「提婆達多」評への返答 ⑥ 一九二一・九・二六 *Atharveda* 訳は Whitney, Lanman が良か(『The Harvard Oriental Series vol. 7-9 Atharveda, Rockwell Lanman, 1905』) ⑦ 一九二二・二・二二 「犬」に登場する地名・人名・川の名前等、固有名詞の *The Early History of India* からの和訳について ⑧ 一九二四・二・一四 「カーマーストラ」入手に関し宇井伯寿への依頼結果について(『印度古典 カーマーストラ』印度学会、一九二二)

「菩提樹の蔭」発表当時は、宇井による「印度哲学研究」(蔵書中に一巻から六巻まで所蔵あり)における原典批判研究、原典成立史論が社会的に評価され、和辻の『原始仏教の實踐哲学』(蔵書中に所蔵あり)中「原始仏教の縁起説」が木村泰賢との論争を巻き起こした後であつた。

四 まとめ

勘助は、既存の物語中の神仏への祈願と神罰・呪詛、利他的行動をとる人間の純粹さという童話的要素を受容しプロットに取り入れた。その一方で、二(二)(四)の「シャクンタラ」「バカワリ」のハッピーエンドと対照的な親子が同時に果てる悲劇的結末、二(四)「閻魔王」の仏陀の導きで死を前提とした運命を受け入れる主人公と対照的な、死を前提としながら善く生きることに自覚的な近代人としての男主人公の造型、等「成人のための童話」ならではの人生の苦みを「菩提樹の蔭」プロットに加えた。作品中、耶摩という「ベータ」の神と菩提樹信仰を描き、神の属性(梟は耶摩の使者等)や信仰を原典に忠実に描いた点は研究発表当日配布資料(中勘助蔵書資料【インド・仏教関係】二・五)に挙げた参考書と、三に示した和辻・宇井との交流の結果と言える。凡夫が我欲による失敗から他力より自力重視の信仰生活を送った結果、死・運命を受け入れ悟りの境地へ至る過程が示す童話的でない現実的なプロットに勘助の仏教童話の特徴が認められる。悲劇的結末のカタルシスにおいて人間の仏性が強調される点に「菩提樹の蔭」という題名が示唆する作品的仏教的モチーフが表れる。

註

1. 「シャクンタラ」テキストは辻直四郎訳岩波文庫版を底本とする。
2. 『小泉八雲事典』(平川祐弘監修、恒文社、二〇〇〇)中「インド」の項目より。

補足論文 中勘助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響

一 はじめに

中勘助（一八八五—一九六五）詩人、夏目漱石に認められた代表作「銀の匙」で著名な作家）は、寺社への断続的な仮寓（一九一一—一九一八）と岩波書店の雑誌『思想』編集者であった和辻哲郎との交流を契機に、印度学に関心を抱き、古代インドを舞台とした三部作「提婆達多」（一九二二）、「犬」（一九二二）、「菩提樹の蔭」（一九二九）を創作した。

中は「犬」に登場する地名等の固有名詞読み仮名について一九二二年二月一二日付書簡で和辻に尋ね、一九二四年二月一四日和辻宛書簡では、宇井伯寿に「カーマストラ」入手を依頼した結果を記した。つまり中の印度学知識と印度学文献入手には和辻と宇井が関わっていたことがわかる。

「犬」（初出『思想』岩波書店、一九二二・四）に関しては、先行論文中「仏教説話系統の作品」（伊藤整「解説」『現代日本小説体系』一七、河出書房、一九五一）、「おそらく仏典から材を取ったらしいこの怪奇譚」（杉森久英「第九随筆文学」中勘助）『現代文学総説』学燈社、一九五二）、「仏典から取材したもの」（斎藤昌三「『犬』の性欲描写」『生活文化』一九五三）との言及があるが、依然仏典の出所が解明されていない。

二 「犬」の時代的背景とその出典の考察

作品冒頭の文章「有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもって畢生の事業として、（一）紀元一〇〇〇年から一〇二六年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。（二）いつも十月に首都を發して三ヶ月の不撓の進軍をつづけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、（三）かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行し、市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は『勝利者』『偶像破壊者』の尊称を得た」に關し、二冊の書物の依拠が考えられる。

一方は、前作『提婆達多』（新潮社初版）に付記された参考書一覽中の書物 V.A. Smith の著書^註『Early History of India 3rd ed. (Oxford University Press 1914 本論では以後『Early History』と略す)』他方は中勘助蔵書内に所蔵が認められる Stanley Lane-Poole の著作

Mediaeval India under Mohammedan Rule(T. Fisher Unwin Ltd.1917 本稿では以後『*Mediaeval India*』と略す)である。

A few years later(A.D.997) the crown of Sabuktigin descended, after a short interval of dispute, to his son, the famous Sultan Mahmud, who made it the business of his life to harry the idolaters of India, and carry off their property to Gazni. (4) He in computed to have made no less than seventeen expeditions into India. (5) It was his custom to leave his capital in October, and then three month's steady marching brought him into the richest provinces of the interior. (*Early History* pp.382-383)

(6) Between the year 1000 and 1026 he made at least sixteen distinct campaigns in India, (7) in which he ranged across the plain from the Indus to the Ganges. (*Mediaeval India* pp.18)

傍線部(1)に関し、傍線部(4)及び(6)の和訳を利用した表現であることが分かる。マームードによるインド侵入最低回数が一六回か一七回かの両書における表現の違いは、「参考書は相当読んだけど目的は小説で歴史ではないのだから結局自由な態度をとった」^{註2}という当時を顧みる中の言葉から、「十六七回」という表現に落ち着いたと思われる。

傍線部(2)は傍線部(5)の、傍線部(3)は傍線部(7)の和訳であることが認められる。

以上から、中は英文のインド史書を小説構想に利用したことが明らかとなった。

当時、中が通読した史書はインド史だけにとどまらず『提婆達多』(新潮社初版)参考書一覧中には『ビガンデー氏 緬甸伝』が、中勘助蔵書内には『マハー・ワングザ(大史)』(マハー・ナーマン、富山房、一九四〇)・Hermann Oldenberg 訳による *The Dipavamsa* (Williams and Norgate 1879)等、ビルマやセイロン島の史書・史詩が名を連ねる。

中の作品における文明観、呪術と異類婚に代表される神話的要素、人間性とは何かの問いに関し、本論では「マハーヴァンサ」等スリランカ伝説の受容を巡って考察する。

三 「マハーヴァンサ」等スリランカ伝説の受容

(一) 当時の刊行状況

Mahavamsa に関しては、①Edward Upham による英訳 *The Sacred and Historical works of Ceylon*(1833)、②George Turnour による巴利原文併記の英訳 *The Mahavamsa, with the Translation subjoined and an introductory essay on Pali Buddhistical literature* (1837)、

③ *The Mahavamsa translation by L.C. Wijesinha* (1889), ④ ドイツ人学者 Wilhelm Geiger による *Mahavamsa, English Translation* (1912) があった。

Dipavamsa に関しては、⑤ Hermann Oldenberg による巴利原文併記の英訳 *The Dipavamsa: an ancient Buddhist historical record*, 両書に関しては、⑥ ドイツ人学者 Wilhelm Geiger による英訳本 *Dipavamsa und Mahavamsa* (1908) を Ethel M. が更に英語に重訳した *The Dipavamsa and Mahavamsa* (1908) があった。

中と交流のあった宇井が「佛滅年代論」(『現代仏教』一九二四)で引用しているのは上記④⑤⑥であり、国内でも入手可能だったことが分かる。

日本語訳では、⑦ 釋宗演『錫嶮島志』(弘教書院、一八九〇)、⑧ 荻原雲来・渡邊海旭等訳『摩訶洹婆』(東光社、一九〇三)、⑨ 林五邦・平松友嗣共訳『大史』(破塵閣書房、一九三二)があった。

(二) 中による錫蘭伝説の受容

『提婆達多』(新潮社初版)に付記された参考書一覧中の書物及び中勘助蔵書内に『解説西域記』(堀謙徳、前川文栄閣、一九二二)があり、同書中「大唐西域記 卷十一 第一節 僧伽羅国」pp.853-864に「マハーヴァンサ」同様のスリランカ建国の神話が掲載されている。また、上記⑤ Hermann Oldenberg の *The Dipavamsa* (Williams and Norgate 1879) と「犬」創作後の出版年代だが『マハー・ワンザ (大史)』(富山房、一九四〇)が中勘助蔵書内に認められる。

The Dipavamsa 受容の目的と時期に関して、一九二二年六月八日付け和辻宛書簡内で当該書名を記載した後に「上記の本は一つはそれが見たいからですが一つは今度書く愛育王の参考にもしたいのです。今注文しても六ヶ月とみて(此間丸善からさういつてよこしましたから Dipavamsa を注文した時)十二月頃ではなくては手に入らないとすると、それから読みだして愈筆をとるのはいつの事か、随分じれつたい話です。(後略)」という一文がある。この箇所から、中は *The Dipavamsa* を愛育王に関する未完の小説の構想のため、一九二二年六月前に発注、一九二二年一二月頃に入手したことが予測できる。この経緯から、「マハーヴァンサ」も *The Dipavamsa* と同時期に受容したと考えるのが自然であろう。拙稿「中勘助の仏教童話」(『印度学仏教学研究』五六卷二号 二〇〇八)にて既報の通り、中が独文並びに英文の資料を解したことから、宇井との交流を考慮すると「マハーヴァンサ」について上記④及び⑥の受容を予測できる。

四 「犬」のプロット上の特徴

(一) 文明の衝突

作品冒頭には回教徒マームード軍の印度侵入に關し、偶像教徒への迫害、その財宝掠略、現地女性への性的暴力、大都市の破壊等暴力の数々が描かれる。作品のプロット上の転換点は、婆羅門による毘陀羅法を修してのヂエラル殺害場面である。「婆羅門の憤怒と苦行僧の嫉妬に燃えた」ことを直接的原因とするが、迫害を受けた宗教者としての、また同民族の女性を乱暴されたことに対する同民族男性としての反撃である。

ヂエラルの死を契機にしたマームードによるクサカの街の焼き討ち、即ち報復が描かれる。つまり現代の異民族間紛争にも繋がる憎しみと報復の連鎖という普遍的な文明衝突の様相が明らかにされた。

(二) 神話的要素

婆羅門の呪法、毘陀羅法について、次のような会話が結末直前にある。

「彼奴はヂエラルといふた」

「え、あなたはそれは名ぢやないといつた」

「ふ、ふ、嘘ぢや。わしは彼奴の名を知つたばかりか現在彼奴を見た。彼奴は苦行をして居るわしのまへを通つてこの顔に唾を吐

きかけをつた。おのしのいふたとほりの男ぢやつた。暫して森の中で　ヂエラル、ヂエラル　と呼ぶ声をきいた。ヂエラルとい

ふ名は邪教徒にあるのぢや」

対象に直接触れずにその対象を操作して行う象徴的呪法・調伏に關し、呪の対象者の名前を知ることが最低限必要なことは一九二一年九月二一日付和辻哲郎宛書簡に登場する Atharva-veda 註2の調伏法における「名前を捕えること、すなわち厳かに物を名付けること、もしくは単に（それは何々である）と知ることにより、その名付けられたものに対する魔術的力を獲得するのである」（針貝邦生、『ヴェーダからウ・パニシャッドへ』清水書院、二〇〇〇）という原理に基づくと考えられる。

作品に登場する主要人物の内、唯一、名前が明らかなのがヂエラルであることから、名前の持つ呪術的要素を際立たせる構想が作品に認められる。

また、人間の動物への変身譚、その逆の変身譚が、呪術と神への祈りの結果に基づくことから魔術昔話の影響下にあると考えられる。

(三) 人間性と獣性

「神意によつて結ばれたる夫婦の交わりは邪教徒の凌辱よりも遙に醜悪、残酷、且つ狂暴であつた」と描写される娘犬と僧犬との交わりは、夫婦という宗教的、道徳的に認められた関係性が、異教徒からの性的暴力より劣るといふ、逆説的価値観がクローズアップされる。作品冒頭で凌辱の様子を告白する娘に対して僧は「犬めが」と罵倒するが、人間以下の存在としての「犬」に該当するのは、その後、情欲の虜となり「さうぢや。わしはこれの姿をかへてしまはふ。ふびんぢやがしかたがない。わしらは畜生になつて添ひとげるまでぢや」と考へた僧自身ではないかという問題提起がある。

娘犬については次のような心理描写がある。

僧犬との夫婦生活において「彼女は自分の肉体が僧犬の肉体の接触のために、自分の意志に反して性的な結果をひき起すのが情けなかつた。そしてそれが『あの人(論者注 恋人)に対してしんからすまなかつた』と、動物的本能と意志との狭間で苦しむ様が描かれた。子犬を亡くした際に「彼女は絶望した。精も根もつきてしまった。その時その凄しい怒が忽然として深い深い悲と思慕の情にかはつた」という娘犬の子犬を奪つたものへの怒りと子犬を悼む気持ちが記述された。人間的感觉、特に母性の内在が描かれた。

五 「マハーヴァンサ」第六章「毘闍耶の来訪」、第七章の「毘闍耶の灌頂」との比較

先述四のプロット上の特徴を「マハーヴァンサ」第六章「毘闍耶の来訪」、第七章の「毘闍耶の灌頂」にも認めた。中の受容が想定される *Mahavamsa, English Translation (1912)* の基となり、『南伝大蔵経』第六〇卷(大正新脩大蔵経刊行会、大蔵出版、一九三九)収録「大王統史」底本 W. Geiger 校訂の Pali Text Society 刊行羅馬字本該当部分を次に示す。

(一) 文明の衝突

Tassa sutva tatha katva sabbayakkhe aghatayi, sayam pi laddhaviyayo yakkharajapasadhanam. Pasadhanehi sesehi tam tam bhaccam pasadhayi. Katipaham vasitvettha Tambapanim upagami, (7, 37 38)

(二) 神話的要素―夜叉女の呪術について―

Suttam ea tesam hatthesu laggetva nabhasagama, dassesi sonirupena paricarikayakkhini(7,9)

Tam gahetva surungavam ravantam yakkhini khipi. Evam ekeaso tatha khipi satra satani ca.(7,15)

Dapitam Vijayenaggam yakkhi bhunjiya piñata solasavassikam rupam mapayiva manoharam(7,26)

(三) 獣性と人間性

①獅子王の妻子への愛情

Siho sigham guham gantva te adisva tayo jane attito puttasokena na ca khadi na capivi. Darake te gavesanto aga paccantagamakam, ubhasiyati so so ca, yam yam gamma upeti so, (6,21 22)

So tam gantva guhadvaram siham disva va araka entam puttasinehena vijjhitum tam saram khipi. Saro na latam ahacca mettacitena tassa tu kumarapadamule va nivatto pati bhumiyam. (6,28 29)

②毘闍耶の悪行について

Vijayo visamacaro asi tamparisa pi ca, sahasani anekani dussahani karimsu te.(6,39)

Vijayassa suto dhita tassa yakkhiniya ahu, rajakannagamam sutva Vijayo aha yakkhinim: 》gaccha dani tuvam bhoti thapetva puttake duve, manussa amanussehi bhayanti hi sada 《(7,59 60)

六 まとめ

以上より、「犬」のプロット上の特徴である、侵略による文明の交錯、呪法による犬への変身等神話的要素、「犬」と蔑まれる対象が持つ人間的愛情と抑圧者の獣性、これらは中の「マハーヴァンサ」受容の影響と考えられる。

註1に示した論において堀部は「犬」における日本昔話「犬婿入り」の影響を指摘した。今回の調査過程において日本昔話の異類婚の原型、即ち獅子と人間との婚姻譚、夜叉と人間との婚姻譚が「マハーヴァンサ」第六章・第七章に存在することを認めた。この経緯から、

中の「犬」もインド源の異類婚譚の流れの中に位置づけることができよう。

註

1. 堀部功夫『「犬」考』（『銀の匙』考』翰林書房、一九九三）において「犬」への *Early History of India 3rd.ed.* の影響について指摘がある。

2. William D. Whitney 解説 Charles R. Lanman 編集 *Atharva-veda Samhita, translated Harvard Oriental Series Vol. VII*・VII1905